博士学位論文

ジャック=ダルクローズの教育観の発展に関する研究

― ルソー研究所、クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーとの関わりを中心に ―

2017 年度修了

細　川　　匡　美

目　　次

はじめに …… 1

序　章　本研究の課題設定 …… 5

１．研究の課題と構成

２．先行研究について（既存の研究と本研究の位置づけ）

第１章　ルソー研究所におけるジャック＝ダルクローズの教育法 ……14

第１節　ルソー研究所について ……14

１．本章の課題と背景

２．ルソー研究所の創立と理念

３．ルソー研究所付属「メゾン・デ・プチ(子どもの家)」

４．ルソー研究所における子どもの教育観

第２節　J＝ダルクローズ研究所とルソー研究所 ……17

１．J＝ダルクローズ研究所の設立

２．J＝ダルクローズの「ルソー研究所」に関する見解

３．ルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係

第３節　J＝ダルクローズに対するルソー研究所の教師の見解 ……23

１．身体運動の教師、イェンツェルの見解

２．障がい児教育の研究者、デクードルの見解

３．フェリエールと J＝ダルクローズとの関係

４．クラパレードの見解

第４節　まとめ ……27

第２章　クラパレードから与えられたジャック＝ダルクローズの教育に関する示唆について：学会活動と書簡を手掛かりに ……32

第１節　クラパレードによる J＝ダルクローズへの教育的示唆 ……32

１．本章の課題と背景

２．クラパレードの教育的示唆による、J＝ダルクローズへの影響
第２節　クラパレードの「子どもの心理学」と　……37
J＝ダルクローズの教育学への導き
第３節　ジュネーヴ教育学協会での活動　……38
１．　ジュネーヴ教育協会と J＝ダルクローズ
２．　J＝ダルクローズ「リズム体操の講義と実習」
３．　質疑応答からみる J＝ダルクローズの見解
第４節　クラパレードの J＝ダルクローズに関する見解から探る共同研究の視点　42
第５節　J＝ダルクローズの教授法にみられるクラパレードの影響　……45
第６節　J＝ダルクローズのリトミックに対する見解の変遷　……46
第７節　まとめ　……47

第３章　モンテッソーリと J＝ダルクローズの身体運動を活用した音楽教育　……53
第１節　本章の課題と背景　……53
第２節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育　……54
１．モンテッソーリの音楽教育に関する概要
２．リトミックに関する概要
３．モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育の比較
第３節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの教育理念　……64
１．モンテッソーリの教育理念
２．J＝ダルクローズの教育理念
３．モンテッソーリと J＝ダルクローズの教育理念の比較
第４節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの接点　……67
１．ジュネーヴ、ルソー研究所を介した接点
２．両者の音楽教育の接点
第５節　モンテッソーリの J＝ダルクローズ教育法に関する見解　…… 69
１．『モンテッソーリ・メソード』における見解
２．『初等学校における自己教育』における見解
３．J＝ダルクローズの著述にみられるモンテッソーリ教育
４．Böhm 編集によるモンテッソーリ「論文集」における見解

第６節　まとめ　…… 74

第４章　ベルギーにおけるリトミック受容と展開：　……80
ドクロリー・メソードとの関係を中心に
第１節　ドクロリーについて　……80
１．本章の課題と背景
第２節　リトミックとドクロリー・メソードの関係　……81
１．ドクロリーについて
２．ドクロリー・メソードとリトミックの関係
３．ドクロリーの協力者、アマイドについて
第３節　ドクロリーのリトミックに対する見解　……84
１．ドクロリー学校におけるリトミック
１．ドクロリーに関するJ＝ダルクローズの記述
２．アマイドの新学校とリトミック
第４節　リトミックとドクロリー・メソードの影響と展開　……88
１．ドクロリーに関するJ＝ダルクローズの記述
２．アマイドの新学校とリトミック
第５節　ベルギーにおけるリトミック教育の発展　……91
第６節　まとめ　……92

第５章　ジャック＝ダルクローズの教育理念に関する研究：　……97
新教育連盟における活動を通して
第１節　新教育連盟の成立と『新時代』誌の創刊　……97
第２節　『新時代』誌に関わった教育者たちとJ＝ダルクローズ　……98
１．エンソアについて
２．ロッテンとニイルについて
３．フェリエールについて
３.－１．J＝ダルクローズとフェリエールの接点
第３節　J＝ダルクローズの新教育連盟における活動　……105
第４節　まとめ　……109

終　章　本研究の結論 ……114
１．本研究のまとめ
２．J＝ダルクローズの音楽教育観再考
３．今後の課題

主要参考文献一覧 …… 125

おわりに …… 132

は じ め に

「音楽教育」は２つの側面をもつと考えられる。ひとつは「音楽への教育」であり、音楽的資質の向上や音楽の本質と理論の理解を目指すもの、一方は「音楽による教育」、つまり音楽を通して人間性を豊かにする教育である。19 世紀中頃以降、フランスの小学校では唱歌が必修授業として導入され、ドイツでは「一般人の教育」という概念が生じ、国民学校(Folksschule, 小学校)の音楽教育は民謡による授業が行われるようになった[1]。しかし、専ら音楽院(conservatoire)では卓越した技巧が追求され、裕福な家庭の子女たちは個人教授によるピアノや歌等のレッスンを受けていた。音楽教育法リトミックを創案したスイスの作曲家・音楽教育家のエミール・ジャック＝ダルクローズ[2] (Jaques-Dalcroze,Émile 1865-1950、以下、J＝ダルクローズと表記)は、「技術の卓越性は、音楽学習の目的そのものになるのではなく、表現の手段になるということが確実に実現されるだろう[3]」と述べ、学校で種蒔かれた良い考えはいずれ実行に移される、と考えた。

J＝ダルクローズは、パリ国立高等音楽院、およびウィーンで作曲を学び、1892 年にジュネーヴ音楽院の和声学の教授に就任した。彼はすぐに学生たちが音を聴き取る能力に欠けていることに気付き、音を書取る前に聴取力をつける指導に努め、学生の音楽的能力を高めることに専念した[4]。また、J＝ダルクローズは、「聴取力は新しい感覚が子どもの感覚を捉え、喜びに満ちた好奇心が子どもを生き生きさせる時期に迅速に発達するという検証を経て、ごく幼い年齢の時期から耳の練習にとりかかった[5]」と述べている。これは、音楽家を目指す学生を対象にした教育から子どもを視野に入れた教育へと、J＝ダルクローズの教育観が変化したことを表している。

しかし、彼の担当する生徒たちは、聴取力が発達し、頭では正確な拍子を理解しているものの、その聴取力と筋肉感覚を関連づけるための経験が不足していた。J＝ダルクローズは音楽における運動的・力動的性質のものは、聴覚だけでなく、「本来リズミカルな性質のものである音楽的感覚は、からだ全体の筋肉と神経の働きにより高まる[6]」という考えに至り、動きと音楽を融合させたリトミック教育法を確立していった。

さらに J＝ダルクローズはリトミックにおける可能性について探究し続けた。彼は生理学者や心理学者らの著作を読み、それらの学問的視点からリトミックを検討し、「神経反応を整備し、筋肉と神経を整合させ、精神と身体を調和させること[7]」を目指したのである。「手や足の練習が一体音楽に何の関係があるのか」という疑問に対し、彼は次のように答

えている。

> その目的は、子どもたちの身体的・知的生活を充実させる生来のリズムを目醒めさせること、時間を均等に分割する正しい能力の獲得、身体のバランス・均衡のある運動・音楽記号への素早い反応・意志的な躊躇しない、すなおな段階のあるアクセント付けへの本能の増強、一言で言えば、彼の内部にリズムの感覚を完成させることである[8]。（1925）

J＝ダルクローズは、当時の最新の生理学者や心理学者たちの助言や交流の中で、リトミックが貢献するであろう教育的価値について証明しようとした。それが確信に変わった時、彼はリトミックが音楽的能力の伸長のみならず、子どもの人格形成[9]（本論では、人格形成を「豊かでバランスのとれた人間性と社会性を育むための支援」と定義する）に有益な働きかけをするメソードとして、一般教育や療法的教育など、さまざまな領域を対象に世界へと発信していったのである。

J＝ダルクローズの教授法は、リズム運動、ソルフェージュ、即興演奏の三領域で構成されている。彼は「音楽において、最も強烈に感覚に訴え、生命に最も密接に結びつく要素というのは、リズムであり、動きである[10]」と述べ、子どもの聴取能力の発達と身体的感覚の鋭敏さ、判断力や社会性などを育成することを提唱した。この三つの教授法は、各22項目の学習に集約されている。詳細については、第３章「モンテッソーリとJ＝ダルクローズの身体運動を活用した音楽教育」で取り上げる。

J＝ダルクローズの聴覚と筋肉感覚を通して音楽のリズムや表現を培っていくアプローチは、当初革新的な発想をもった音楽教育であり、理解されない時期もあった[11]。しかし、音楽と動きを伴ったリズム法は古代から考えられていた。プラトンは、身体運動を通してリズムとハルモニア（調和）の感覚と秩序の感覚が身に付くとし、合唱歌舞による身体運動の教育的価値を認めている[12]。ヨーロッパ近世以降で例示すると、ドイツの教育学者で世界初の幼稚園を開設したフレーベル（Fröbel,Friedrich Wilhelm August 1782-1852）は「人間の内面的なものの、人間それ自体の表現が、芸術である[13]」と述べ、「幼児に多方面の活動をさせるに最適なものは遊戯である[14]」として遊戯を教育活動の核心に据えた。また、関口(2012)[15]はリズムを身体運動との関わりについて記述をした人物として、スイスの音楽教育家ネーゲリ(Nägeli,Hans Georg 1773- 1836)を挙げている。1900年前後に構想され

たと考えられるリトミックは、これら先人の延長線上に位置付けられるだろう。しかし、J＝ダルクローズのメソードが、今日の我が国の幼児教育や初等教育において幅広く応用、実践されているひとつの要因は、音楽教育の能力を向上させるとともに、子どもの個々の発達や個性に即し、子どもの集中力や思考力、社会性などを引き出す教育的有用性にある。従って、リトミック研究において、その重要性を歴史的研究の観点に立ち、J＝ダルクローズの教育観を再認識すべく検討することには大きな意義があると考える。

J＝ダルクローズはリトミックの子どもの教育に果たす役割を模索、研究し、従来の音楽教育の枠組みを超えた広義の教育的意義を見出そうとした。その教育観の形成に関わりをもつ人物として、教育改革を推進させた以下の心理学者、教育家たちが挙げられる。ジュネーヴでは教育心理学者クラパレード(Claparède, Edouard 1873-1940)、フェリエール（Ferrière, Adolphe 1879-1960）、イタリアでは、障がい児の治療教育で得た感覚教育法の成果を、一般教育にも適用させた教育者モンテッソーリ(Montessori, Maria 1870-1952)、ベルギーの精神科医で教育者のドクロリー(Decroly, Ovide 1871-1932)などである。そして、彼らは新教育連盟に参画している研究者たちであり、そのリーダー的役割を担っていた。その中でJ＝ダルクローズと最も緊密な協力的関係にあった人物はクラパレードであろう。また、J＝ダルクローズは障がい児者教育、音楽療法にもリトミックの領域を広げており、モンテッソーリやドクロリーから影響を受け、また彼らの教育実践にも影響を与えていた。

本論は、J＝ダルクローズと同時代に活躍したこれらの教育家たちとの関係、及び彼らが創設した教育機関におけるリトミックの受容に関する新しい知見を示した上で、J＝ダルクローズの教育観が芸術家のための「音楽への教育」から、子どもの視点に立った人間性を豊かにする「音楽による教育」へと発展した経緯について考察するものである。

注、及び引用

---

[1] 『ニューグローヴ世界音楽大事典 第４巻』、講談社、1994 年、p.155

[2] エミール・ジャック＝ダルクローズの名は通称である。パリの楽譜出版社は、ボルドーの作曲者である「エミール・ジャック Jaques,Emil」と区別がつく名前にすることを条件にシャンソンの出版を進めた。そのため、彼は旧友レイモン・ヴァルクローズ(Valcroze,Raymond)の最初の文字を“D”に代えて自分の名前とする許可を得たのが名前の嚆矢とされる。従って、J＝ダルクローズ (Jaques-Dalcroze)は姓の総称である。本名はエミール＝アンリ・ジャック(Jaques, Emile-Henri)。

[3] J＝ダルクローズ、山本昌男訳、『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003 年（原著初版は 1920 年）、p.12

[4] J＝ダルクローズ、山本昌夫訳、『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003 年、p.ix

[5] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.viii

[6] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.ix

[7] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.ix

[8] J＝ダルクローズ、板野平訳、『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版社、1990 年、p.110

[9] 「人格形成」の意味に関する補足説明。人間は他の動物と比べて、成人になるために長い間の学習期間を必要とする。その長期の過程を人間形成過程という。人間形成は多くの学問からのアプローチが可能な学際的な現象であり、発達心理学においては人格形成の機構と過程を、発達社会学では人間形成の社会的被拘束性の機構を、文化人類学は人間形成における文化差をそれぞれ取扱う。

[10] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.73

[11] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.15

[12] プラトン、『法律』、前掲書、1993 年、pp.95-99

[13] フレーベル、荒井武訳『人間の教育（上）』、岩波書店、1973 年、pp.323-324

[14] 供田武嘉津『世界音楽教育史』、音楽之友社、1982 年、p.165

[15] 関口博子「リトミックの理念―リズムの根本理念―」『リトミック教育研究―理論と実践の調和を目指して―』、日本ダルクローズ音楽教育学会編、2015 年、p.114

序 章

本研究の課題設定

１．研究の課題と構成

本研究の課題は、J＝ダルクローズが創案したリトミックの導入に関わった、当時の教育改革を推進する三名の教育家たちからの影響により、J＝ダルクローズの教育観がどのように発展し、それが当時の教育の中でどのように位置づけられるかを明らかにすることである。

まず各章においては、前述したクラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーの三人の教育者と、それぞれが創立した教育機関であるルソー研究所、モンテッソーリの「子どもの家」、ドクロリー学校とアマイド新学校について取り上げる。次に、彼らの教育観とその教育機関でのリトミック導入が J＝ダルクローズの教育観にどのような変化をもたらしたのかを考察する。

本論文は第６章(終章含む)で構成されている。以下、各章の課題について叙説する。

第１章は、リトミックとジュネーヴに創立されたルソー研究所との関係について検討した。ルソー研究所は、心理学者のクラパレードが 1912 年に設立した子どもの教育改革のためのラボラトリー、教員養成などを目的とした先駆的教育機関であった。クラパレードと J＝ダルクローズは同時代にジュネーヴを起点として活躍し、互いに専門とする教育分野を通して研究をしていたといわれている。しかし、これまでルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係、および J＝ダルクローズに対するクラパレードの見解については、ほとんど明らかにされていない。

これを踏まえ、第１章ではルソー研究所とその付属幼児施設「子どもの家(la maison des petits 以下、メゾン・デ・プチと表記）[1]」の活動を通して、ルソー研究所とリトミックの関係を検討し、ルソー研究所に関わる教育者たちと J＝ダルクローズがどの様に関わっていたかについて明らかにした上で、リトミックの受容が果たした役割について考察した。ルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係を検討することは、リトミックの教育方法や理念の構築への手掛かりになると考える。

第２章から第４章までは、リトミックが音楽的能力を向上させるだけでなく、子どもの人間性を養う教育的役割をもつメソードとして、新教育家[2]たちが認知していたことを取り上げ、J＝ダルクローズが彼らから受けた教育的示唆について明らかにする。本論ではリ

トミック受容に関わったと考えられるクラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーの教育を中心に、それぞれの教育法やリトミックに対する見解等の視点から、J＝ダルクローズの教育観を繙いていく。

第２章は、第１章の考察を踏まえ、クラパレードとJ＝ダルクローズの関係について取り上げる。J＝ダルクローズはジュネーヴ音楽院の教授に就任し学生と接したことにより、音楽教育の方法を自身の蓄積された知識と経験を通して考案した。しかし、彼はリトミックが科学的根拠をもつ教育法として体系化することを目指したのである。例えば、それは子どもの内省力を引き出し、注意力や判断力、社会性などを高める教育的有用性についてである。そのために、J＝ダルクローズとクラパレードは共同研究していたといわれている[3]が、その経緯はほとんど明らかにされていない。

そこで、第２章ではJ＝ダルクローズとクラパレードの往復書簡、クラパレードの文献、J＝ダルクローズの著書などにより、両者の研究や見解を示す記述を読み取り、クラパレードがJ＝ダルクローズのリトミックをどのように評価し、J＝ダルクローズの教育観が発展した背景のひとつに、クラパレードの影響があったことを明らかにする。

第３章ではモンテッソーリを取り上げる。彼女はイタリア初の女性医学博士号を取得し、ローマの貧困層地域に「子どもの家(casa dei bambini)」を設立した人物である。彼女は障がい児研究から医学的治療より教育的方法の有効性を提唱し、感覚教育と幼児の自発性を重視した独自の教育法を考案した。また、モンテッソーリに関してはルソー研究所と深い関係がある。ルソー研究所の創立時に、モンテッソーリ法のデモンストレーションを機縁として付属幼児施設メゾン・デ・プチ(子どもの家)は設立されている。メゾン・デ・プチではモンテッソーリの教育が実践されており、そこではドクロリーやフレーベル等の教育も採用されていた。J＝ダルクローズも「メゾン・デ・プチ」に息子を入園させており、モンテッソーリ教育について認知していたと考えられる。

両者はともに新教育運動に関わった教育者であり、感覚教育、音楽教育、障がい児の教育について研究・実践し、独自の教育法を体系化したという共通点がある。本章では、モンテッソーリの著書などにより、モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育について比較・検討し、モンテッソーリ・メソードにおけるリトミックの受容と相互の影響について考察する。

第４章では、ベルギーの医師であり教育家のドクロリーとの関係、及びドクロリー学校でリトミックが導入されていたことを明らかにした上で、ベルギーにおけるリトミックが

ドクロリー・メソードの影響を受けて発展したことについて検討する。ドクロリーは、精神障がい児の治療に従事し、子どもの興味の題材を作業活動によって学習する心理学的教育法(ドクロリー・メソード)による学校を設立した、ベルギーにおける初等教育の改革者とみなされている人物である。ドクロリーは「リトミックが障がい児教育に有効である[4]」とその有用性を認めながらも、リトミックに関して幼い子どもには分析的で難しい練習法であると分析している。そこで、本章では、ドクロリーの教育法を検討しながら、ドクロリー・メソードとリトミックの関係性を明らかにし、J＝ダルクローズがドクロリーから何を学び、それがリトミックにどのような影響を及ぼしたのかについて考察する。

クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーは互いに独自の教育を実践しながらも新教育家の同朋としての交流があった。第２章から第４章においては、この三者の教育とリトミックとの関わりを示す文献を検討することにより、各メソードへのリトミック受容とその経緯、及び J＝ダルクローズの教育観の発展とリトミックへの教育的影響について明らかにするものである。

第５章では、J＝ダルクローズの新教育連盟会議における活動と、その機関誌『新時代のために *Pour l'Ére Nouvelle*』への J＝ダルクローズの寄稿文をもとに、新教育連盟に関わりをもつ教育者との関係を検討し、当時のさまざまな教育改革の実践においてリトミック教育の果たした役割、及び J＝ダルクローズの教育観について考察する。

J＝ダルクローズは新教育連盟のフランス語圏版機関誌『新教育のために(*Pour L'Ére Nouvelle*)』が刊行されると直ちに『リズム *Le Rythme* (1922)』という題の小論を寄稿しており、新教育連盟の第二回モントルー会議にも参加している。新教育連盟の創立者であり、その機関誌の編集者であったエンソア(Ensor, Beatrice 1885-1974)、フェリエール(Ferrière, Adolphe 1879-1960)、ロッテン(Rotten, Elisabeth 1882-1964)、ニイル(Neill, Alexander 1883-1973)らとの関係を通して、J＝ダルクローズがリトミックのもつ教育的価値をどのように教育者たちに認知させようとしたか、その活動と見解にも言及する。

最終章では各章で検討し、明らかになった課題について考察した見解をもってまとめとしたい。ルソー研究所やモンテッソーリの「子どもの家」、ドクロリー学校、及びアマイド新学校における各メソードへのリトミック受容について、また、クラパレード、モンテッソーリ、ドクロリー等からの学びを通して、リトミックが音楽教育のみならず人間性を養う教育であることを目指した J＝ダルクローズの教育観についての考察を総括する。

２．先行研究について（既存の研究と本研究の位置づけ）

J＝ダルクローズに関する先行研究はメソードが広領域に亘ることもあり、さまざまな視点から数多くの研究がなされている。「まず経験すること」を基盤とするリトミック教育法において、その多くは実践・方法論に対する研究であり、その根幹をなすメソードの理論や教育理念に関する研究は多いとはいえない。その中でも、J＝ダルクローズと新教育家との関係を記した先行研究として、マルタン・ベルヒトルド他『作曲家・リトミック創始者エミール・ジャック＝ダルクローズ(1965)』[5]や、ボイド＆ローソン『世界教育史(1967)』[6]等が挙げられる。マルタン((Martin,Frank 1890-1974)[7]はスイスの作曲家であり、またJ＝ダルクローズの直弟子であった。そのことから、この著書はJ＝ダルクローズの歴史的研究において高く評価されており、クラパレードやドクロリーがリトミックを早い時期から関心を示していたことが記されている。一方、ボイド(1965)は、新教育運動の流れの中で芸術家教育者の教育法としてリトミックが位置付けられており、J＝ダルクローズと新教育家たちとの関連が記されている。しかし、これらの著書には、史実やJ＝ダルクローズの教育観を裏付ける根拠に関してほとんど示されていない。

次に、各章のテーマにおける既存の研究について検討し、本研究との位置づけを明確にする。

１）J＝ダルクローズとクラパレード、及びリトミックとルソー研究所の関係について（第１章と第２章）

J＝ダルクローズとクラパレ―ドクラパレードの関係については、新教育運動に関する研究者のボイド(Boyd, William 1870-1962)らの著書に記されている。ボイドはクラパレードとの協同研究によって、J＝ダルクローズは音楽家のための教育から普通教育(general education)にもリトミックの持つ可能性を認識するようになった[8]と述べている。しかし、その研究内容について明確な経緯、根拠は示されていない。一方、研究内容に言及しているのは坂田(1993)[9]である。坂田（1993)は、クラパレードの生理学的見解がリトミックの「反応練習」に影響を及ぼしたと述べている。同様にブラック＆ムーア共著『リズム・インサイド(1997)』[10]は、両者の協議によって、筋肉運動感覚の発達をさせるために「刺激－反応－観察－修正の練習」がリトミック指導の指針となったと記している。つまり、坂田とブラック＆ムーアのアプローチは、クラパレードの「無意識化の法則」等の理論が、リトミックに注意力を促す反応練習への影響を与えたとする共通した位置づけをしている。

しかし、本研究では、クラパレードとの往復書簡とJ＝ダルクローズの著書との関連か

ら、リトミックの教育内容や教育観をより明確に捉えるために新たな知見を示し、クラパレードから与えられた影響を明らかにする。

またルソー研究所については、従来の先行研究において、リトミックとの関係を示す研究は管見の限り見当たらない。つまり、これまでルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係、および J＝ダルクローズに対するクラパレードの見解については、ほとんど明らかにされていない。その要因のひとつは、J＝ダルクローズやリトミックに対するクラパレードの見解がほとんど発見されていないことにある。また、ルソー研究所やメゾン・デ・プチでリトミックを経験した人の多くが他界しており、本人からの証言を聴き取ることが困難である。リトミック教師ボンメリ(Bommeli-Hainard, Claude 1916-2010)もそのひとりである。彼女は「J＝ダルクローズは頻繁にルソー研究所の幼児施設メゾン・デ・プチを訪れてリトミックを行っていた[11]」と述べている。ボンメリの姉と J＝ダルクローズの息子ガブリエルは同じクラスであった。この記述は、ルソー研究所でリトミックが行われていたことを示唆している。

従って、第１章では、ルソー研究所でリトミックが導入されていたことを仮説とし、今まで示されていなかったリトミックの受容の経緯を示すことで、ルソー研究所におけるリトミックの位置づけを検討する。そして、第２章では、クラパレードが J＝ダルクローズに与えた教育学的・心理学的影響について新たな考察を加えたい。

２）J＝ダルクローズとモンテッソーリの音楽教育とその見解について（第３章）

モンテッソーリ教育はリトミックと同様に、現在も世界各国において実践されている。従って、モンテッソーリ教育関する多くの著書や論文が存在する。例えば、クレーマーの『マリア・モンテッソーリ 子どもへの愛と生涯(1981)』[12]は、仔細にモンテッソーリの生涯を述べている著書であり、モンテッソーリの音楽教育の協力者マッケローニやバーネットに関してその果たした役割が記されている。しかし、モンテッソーリの音楽教育に関する先行研究はそれほど多くない。その中でも代表的な先行研究として、ミラー(Miller, 1981)[13]、藤尾(2016)[14]がある。ミラー(1981)は、モンテッソーリの音楽教育において、その協力者たちの活動内容を明らかにしている論文である。また、藤尾(2016)はミラーの研究を礎として、モンテッソーリのリズム活動における理念を含めた詳細で総括的な研究である。彼女は、モンテッソーリとマッケローニの５人の協力者によって音楽教育が構築され、その協力者の多くはリトミックの教師であったと述べている。しかし、モンテッソーリの音楽教育におけるリトミックの影響については言及をしていない。

つまり、従来の研究では、モンテッソーリのリトミックに対する見解、及び自身の音楽教育へのリトミックの受容、そして、J＝ダルクローズのモンテッソーリによる影響に関しては明らかにされていない。本章ではこれらの問題を明らかにし、両者の教育法や教育観への相互の影響について考察する。

３）リトミックとドクロリー・メソードの関係と影響について（第４章）

ドクロリー学校やドクロリー・メソードを採用したアマイド新学校におけるリトミックの受容に関する先行研究には、マルタン他による『エミール・ジャック＝ダルクローズ』[15]や J＝ダルクローズ研究所ブリュッセル校の名誉教授であったルクレール(Leclerc, Françoise)の「20 世紀のベルギーにおけるジャック＝ダルクローズのリトミック」[16]などが挙げられる。これらは、J＝ダルクローズの弟子たちがドクロリー学校で教鞭を執っていたことが記されているが、その経緯については明らかにされていない。

また、ドクロリーのリトミックに対する見解やドクロリー・メソードとリトミックとの関係性、及び、その活動内容に関する研究は管見の限り見当たらない。本章ではこれらを検討し、J＝ダルクローズ研究所発行の機関誌、および J＝ダルクローズの弟子たちによる書簡、報告書などの資料により明らかにしてゆく。

４）新教育連盟と J＝ダルクローズの活動について（第５章）

J＝ダルクローズの新教育連盟における活動については、ボイド＆ローソン(1967)に詳しい。ボイドは、リトミックを新教育運動の中の芸術家教育者の教育法として位置付けているだけでなく、音楽と運動とを同調させる実践法にも言及しており、J＝ダルクローズのモントルー会議への参加について記している。一方、長尾十三二編『新教育運動の歴史的考察(1988)』[17]では、近代体育の身体統治論の中で、身体運動の視点から筋肉感覚を介した音楽教育としてリトミックを位置付けている。これらは、芸術教育と体育教育からの見解の差異はあるが、新教育運動に関わりを持つ革新的な音楽教育としてリトミックを捉えているところは類似している。

また、岩間の『ユネスコ創設の源流を訪ねて—新教育連盟と神智学協会—(2008)』[18]には、新教育連盟のリーダー的存在であったエンソア、フェリエール、ロッテン、クラパレード等の人物像や教育理念、新教育運動の活動について、国際教育の先駆的役割を果たしたことが記されており、J＝ダルクローズとの関係を俯瞰できる文献である。しかし、J＝ダルクローズと新教育運動の関係については、ボイド(1967)の文献に依拠している。つまり、これらの文献には、J＝ダルクローズが新教育運動に関わっていたことが示されているが、

新教育家たちのリトミックに対する見解については記されていない。

そこで、本章では、従来の研究では明らかになっていない J＝ダルクローズに対する新教育家たちの評価、及び関連性を検討し、新教育運動におけるリトミックの位置づけを検討した上で、J＝ダルクローズの新教育連盟の参加や機関誌への寄稿文をもとに、子どもの視点に立った新しい音楽教育へ至った J＝ダルクローズの教育観を考察する。

注、および引用文献・参考文献

---

[1] モンテッソーリがローマに設立した「子どもの家（casa dei bambini)」と区別するため、ルソー研究所併設幼児施設「子どもの家」を「メゾン・デ・プチ」と表記する。

[2] 本論では「新教育」を、画一的なカリキュラムでの規律化や、教師が子どもの監視者として抑圧的な訓練を強要するというような既存の「旧教育」に対し、子どもの個性や興味を中心におき、自発的活動や感情的な側面を重視した、19 世紀末から 20 世紀前半に提唱・実践された教育のこと[2]として進めていく。

[3] ボイド、ローソン、国際新教育協会訳『世界新教育史』、玉川大学出版部、1967 年、p.102 など。

[4] Decroly, *Le Traitement et L' Éducation des Enfants Irréguliers*, Maurice Lamertin, Bruxelles, 1925,p.28

[5] F.Martin, T.Dénes, A.Berchtold, H.Gagnebin, B.Reichel, C.-L.Dutoit-Carlier, E.Stadler, *Émile Jaques'Dalcroze：L'Homme, le compositeur le créateur de la Rythmique*, Editions de la Baconnière, Neuchâtel, 1965.
F.マルタン他、板野平訳『作曲家・リトミック創始者　エミール・ジャック＝ダルクローズ』、全音楽譜出版社、1988 年(初版 1977 年)

[6] W.ボイド・W.ローソン、国際新教育協会訳『世界教育史』、玉川大学出版部、1967 年。(原著：W.Boyd and W.Rawson, *The story of the new education*, Heinemann, London, 1965)

[7] スイスの作曲家であるフランク・マルタンは、ジュネーヴ大学で数学と物理学を専攻するとともに、ジョセフ・ローバーに作曲法とピアノを師事。J＝ダルクローズとの関係は、1925 年頃、フランス語のプロソディ(韻律＝言語の抑揚、音調、強勢、リズム等)に興味を持ったマルタンがリズムに注目するようになり、リトミックを学ぶため J＝ダルクローズ研究所を訪れたことに始まる。1928 年にリトミックのディプロムを取得し、J＝ダルクローズ研究所で即興、リズム理論を指導した(1928-39 年)。
高塚桂子「作曲家フランク・マルタンの一考察―ピエール・ド・ロンサールの歌曲作品を例に―」、関西福祉科学大学紀要、15,pp53-81(2011)参照。

[8] W.Boyd and W.Rawson, *The story of the new education*, Heinemann, London, 1965. p.52

[9] 坂田薫子「リトミックにおける反応練習―その意義と課題―」、『ダルクローズ音楽教育研究』 Vol.18、1993 年

[10] J.ブラック・S.ムーア共著、神原雅之編訳者、『リズム・インサイド』、星雲社、2002 年

[11] Bommeli-Hainard,"Das Kontinuitätsprinzip in Zeit und Raum Hellerau"(「時間と空間における連続性の原則」),1992,〈www.rhythmik.net/whoiswho/bommeli.htm 2016.〉ボンメリは、2010 年に亡くなっており、本人からコメントを聞くことが出来なかったのが惜しまれる。

[12] リタ・クレーマー、三谷嘉明、他訳『マリア・モンテッソーリ　子どもへの愛と生涯』、新曜社、1981 年

[13] Miller, J.K. “The Montessori Music curriculum for Children up to Six Years of Age. “Ph.D. dissertation, Case Western Reserve University, 1981

[14] 藤尾かの子「モンテッソーリ教育における音楽教育の内容・方法とその発展」『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』、KTC 中央出版、2016 年

[15] F.マルタン他、板野平訳『作曲家・リトミック創始者　エミール・ジャック=ダルクローズ』、全音楽譜出版、1988 年。

[16] F.Leclerc,“La Rythmique Jaques-Dalcroze en Belgique au XXE Siècie”, *Institut Dalcroze Belgique*, 2016.〈http://www.dalcroze.eu/historique.html〉(2017 年以降は記述が省略されている)

[17] 長尾十三二、他『新教育運動の歴史的考察』、明治図書、1988 年

[18] 岩間浩『ユネスコ創設の源流を訪ねて』学苑社、2008 年

第　1　章
ルソー研究所とジャック＝ダルクローズの教育法

第１節　ルソー研究所について

１．本章の課題と背景

19 世紀後期から 20 世紀初頭にかけて、既存の学校教育の改革に向け、ドイツのリーツ(1868-1919)、イタリアのモンテッソーリ(1870-1952)、ベルギーのドクロリー(1871-1932)など、当時のさまざまな教育者たちによって新しい教育法が提唱され、実践されていた。とりわけ、中立政策下にあったジュネーヴでは、心理学者クラパレード(Claparède, Edouard 1873-1940)が創立した「教育科学学院(École des sciences de l'education)（通称ジャン＝ジャック・ルソー研究所(Institut Jean-Jaques.Rousseau)以下、ルソー研究所と表記）」において、第一次大戦時中にも研究や教育の活動が行われていた[1]。

また、作曲家、音楽教育家である J＝ダルクローズは、身体運動を活用した音楽教育法リトミックを創案し、同時代ジュネーヴを中心に世界中で活躍した。リトミックは、筋肉感覚を掌る神経中枢を覚醒させ、音楽のリズムと身体運動を融合させることにより、心身の調和を図ることを目指す教育法である。彼はリトミック法を音楽的能力の向上だけでなく、集中力や思考力、創造力、社会性など、人間性を養う教育を目指すようになり、当時の学校音楽教育における改革の必要性をも提起している。

W・ボイドは、「最初には、リズム体操は、ただ音楽家の練習の一部にしたいというのであったが、クラパレードとの共同研究によってダルクローズは、普通教育にもリトミックの役立つ可能性の広いことを認識するようになった…(中略)…子どもたちはこのような方法で、外界の刺激に対する適応力、心と身体の鍛え方、感情と思考の整然たる表現、すなわち身体と精神の活動的調和を獲得するであろう[2]」と述べている。

このように、ルソー研究所の創立者であるクラパレードと J＝ダルクローズは、親交深く、また研究において協力的関係にあったといわれている。

本章では、ジュネーヴを起点とするルソー研究所とその付属機関「メゾン・デ・プチ（la maison des petits）」の活動を通して、ルソー研究所と J＝ダルクローズの教育との関係を検討し、新教育運動の時代の中で、その中心の役割を担っていたルソー研究所に関わる教育者たちと、J＝ダルクローズがどの様に関わっていたかについて明らかにしていくことを研究の課題とする。

先行研究には、ブライス(Brice, Mary)やリー(Lee, James willam)による論文があり[3]、J＝ダルクローズがクラパレードと協力し合い、ルソー研究所とともに新しい教育を作り上げたことが記されている。しかし、どちらも両者が協力関係にあった以上の記述はされていない。また、マドゥレーラ(Madureira, Rafael)著『ジャック=ダルクローズ：音楽と教育[4]』には、ルソー研究所とメゾン・デ・プチの二つの教育機関において、J＝ダルクローズが 1920 年から知的発達の遅れ、聴覚や視覚の不自由な子どもたちに特別なリズム的活動をしていたと述べられている。しかしながら、その経緯は明らかにされていない。管見の限り、ルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との連携関係、ルソー研究所の教師陣の J＝ダルクローズに対する評価についての詳細な研究は見当たらない。

そこで、本章ではルソー研究所が創立当初から数十年間発行し続けていた研究所の「プログラム」から、ルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係を検討する。この各プログラムには、研究所の目的、概要、授業内容などが記載されている。第 1 章ではこのプログラムに加え、クラパレードの著書から J＝ダルクローズの教育観に対する見解などを読み取っていく。さらに、初代所長のボヴェ(Bovet,Pierre1878-1965)の著書[5]は、ルソー研究所創設時のエピソードや付属機関メゾン・デ・プチに関する見解などが記述されており、ルソー研究所、およびその教授陣について詳しく知ることができる文献である。J＝ダルクローズの著書、書簡他を含め、これらの著作などを基に、ルソー研究所と J＝ダルクローズの教育との協力関係について検討する。

２．ルソー研究所の創立と理念

ルソー研究所は、子どもの見地に立って教育の研究と実践を行った最初の革新的な教育機関として世界に影響を与えた研究所・学校である。そこで行われた実験・研究は、クラパレードやフェリエールらからピアジェ(Piaget, Jean 1896-1980)へと引き継がれ、教育心理学を発展させていった。また、発達の遅れた子どもの研究においても、デクードル、ドクロリー、モンテッソーリなど、後世に名を遺した人物との深い繋がりを持つ。

ルソー研究所は、ジュネーヴの公教育部が発達の遅れた子どものための特殊学校を開設したことを契機に創立されている。ジュネーヴ市やその学校の教師たちは、その適切な児童心理や教育法に関して、当時、ジュネーヴ大学に付設された実験心理学研究所の所長であったクラパレードに協力を求めた[6] 。クラパレードも当初は障がい児教育に関する知識に乏しかったが、これを機に障がい児教育研究を開始する。ボイドは「この依頼が、彼を

その問題について研究させることになった。彼はドクロリーを訪ねたのち…(中略)…公教育局へ異常児の教育についての報告を用意することもできた。すべてのこのようなことが、教育心理学への彼自身の関心を喚び起し、また、普通の学校のもつ欠陥の幾つかをも、彼に理解させることになった[7]」と記している。

そしてクラパレードは、1912 年 10 月 12 日にルソー研究所（Institut J.-J.Rousseau）を開所する。ルソー研究所は、子どもの心理学、実験に基づく教育学、教育法の研究、情報収集などの機能をもつ教育・研究のセンターであった[8]。つまり、研究所は教育者養成のための学校と教育科学に関する研究機関を兼ねたものであった。そのモットーは「師をして子どもから学ばしめよ（le maître doit apprendre de l'enfant）[9]」 であり、『エミール』の序文から「まずなによりもあなたがたの生徒をもっとよく研究することだ。あなたがたの生徒を知らないということは、まったく確かなのだから[10]」 という一文も研究所発行のプログラムに記されている。

子どもの視点に立つことを重視する研究・教育理論の実践の場として、ルソーの生誕 200 周年と『エミール』出版 150 周年にあたる年に、この研究所は設立されたのである。この研究所の存在はその後のジュネーヴ臨床心理学の発展に寄与し、ヨーロッパの新教育運動に大きな足跡を残したといわれている[11]。1975 年に研究所はジュネーヴ大学の心理・教育学部に統合された。

３．ルソー研究所付属「メゾン・デ・プチ(子どもの家)」

ルソー研究所は 1914 年、３歳～10 歳までの子どものための研究所付属「メゾン・デ・プチ」を開設した。研究所は、実践的研究や、教員養成の重要な役割を果たす学校であったため[12]、幼児教育の実習にも活用されていた。さらに 1917 年に「年長の子どもの家(maison de grands)」、翌年には中等教育機関である「テプフェール学校（Ecole Toepffer）」が創立され、幼児からの一貫教育による実践の試みがなされている[13]。

メゾン・デ・プチは保護者の支持のもとに存続し、ミナ・オードマルス(Audemars, Mina 1883-1971)とルイーズ・ラファンデル(Lafendel, Louise 1872-1971)が 1945 年まで校長を務め、ルソー研究所の教師であったデュパルク(Duparc, Germaine 1916-2008)がその後任を担った。1922 年には公立学校となり、1978 年までルソー研究所と密接な関係を保ちながら、初等教育機関として先駆的役目を担っていた。

４．ルソー研究所における子どもの教育観

ルソー研究所は、子どもを尊重し、心理学的、生理学的に実験し、研究を行う場として教育革新をするために創立された学校であった。ルソー研究所の創立当初の『幼い子どもの教育(1915-16)』[14]と題する「特別プログラム」には、ボヴェ、オードマルスとラファンデルが校長、クラパレードは心理学、音楽教育にはベスマン、身体教育の教師にはイェンツェルが担当していたことが記されている。

ここにはルソー研究所のディプロムを得るための授業の一覧が記載されており、(２年課程で、実習は「メゾン・デ・プチ」で行われる)、幼児、児童の教育についての考えを読み取ることができる。その内容は、①心理学、②発達の遅れた子どもについての知識、③子どもの病気と学校保健学、④道徳教育、⑤幼児教育（実習と連携させて)、⑥芸術と手作業による芸術、⑦身体教育、の７項目を挙げて説明している。

⑥には、「教育に役立てるデッサン。…(中略)…どのようにしてデッサンをさまざまな教育に役立てることができるか。どのようにして観察力と率先的行動を発達させるか。子どもの年齢と知能程度に従って、どのようにデッサンによる観察の要約を行うか。装飾的構成の原理。子どもの嗜好と要求にその原理を適応させること。子どものための音楽教養と教育（シャスヴァン・メソード）[15]」と記されている。

⑦「身体教育」には、「医学的、教育学的、芸術的、またはスポーツとしての見地からの運動。運動を用いた教育のさまざまなシステム。学校における身体教育の重要性；矯正の体操、特に遊戯のかたちをとった応用運動、輪踊り、など[16]」と述べられている。⑥と⑦の記述内容は、後にリトミックを特別講義として導入される、J＝ダルクローズの教育理念との共通性が見受けられる。

第２節　J＝ダルクローズ研究所とルソー研究所

１．J＝ダルクローズ研究所の設立

1892 年以降、ジュネ―ヴ音楽院で和声学の教授として教鞭をとっていた J＝ダルクローズは、独自の教育を実現するため、1910 年に辞表を提出する。ドレスデンでの実演会を見て感激したヴォルフ・ドールン(Dohrn, Wolf)らにより、J＝ダルクローズはドイツのヘレラウに招かれ、1911 年にリトミックの学校を設立する。ドールンは田園都市ヘレラウの構想計画を遂行するにあたり、ドレスデン工房の設立者シュミット(Schmidt,Karl)に任命された協力者のひとりであり、政治・経済・芸術・教育などに精通した人物であった。ドー

ルンはこの開校演説で、この仕事を「教育の中にリズムを求め、芸術と人生とに人格の形成を求める[17]」と述べている。しかし、1914 年、ドールンのアルプス山中での滑落死や、同年８月から始まった第一次世界大戦により、ヘレラウのリトミック学院[18]は閉鎖を余儀なくされた。

ヴォルフ・ドールンの弟ハラルトは、J＝ダルクローズにアメリカに学校を創立する提案をし、一方、J＝ダルクローズの弟子であるパーシイ・インガムは、自分のリトミック・ロンドン校に一時的に避難することを提案する[19]。しかし、J＝ダルクローズはジュネーヴに戻ることを決意した。

クラパレードやオーギュスト・ド・モルシエ(Morsie, Auguste 1864-1923)をはじめとする人々の応援があり、ジュネーヴのラック・ホテルの空室でのリトミック授業が始まった。そして 1915 年、ジュネーヴのテラシエール通り 44 番地のビルに、新しい J＝ダルクローズ研究所は設立された（現在もこの場所にある）。クラパレードはヘレラウ時代以前から、いち早く J＝ダルクローズの教育法に関心を寄せていたといわれている[20]。

戦時中にもかかわらず、開校時には 10 名程の教授陣と約 300 名の学生が在籍し、翌年にはさらに約 100 名増え、14 ヵ国からレッスンを希望する多数の生徒が集まった。週 1 回ずつのリトミック、ソルフェージュ、即興、動的造形（プラスティック・アニメ）の授業があり[21]、また主要な分野の教育の他に、彼は談話(causeries)を提案し、画家や彫刻家のための動的造形に関する J＝ダルクローズの談話会、そしてクラパレードの講演も行われていた[22]。この研究所の開校式においてもクラパレードは演説を行っている。ジュネーヴにおいて、ルソー研究所と J＝ダルクローズ学院は互いの教育理念を認知しながら、ともに教育改革の実践に取り組んでいたと考えられる。

２．J＝ダルクローズの「ルソー研究所」に関する見解

J＝ダルクローズの著書には、ルソー研究所やその創設者であるクラパレードに関する記述が散見される。

『リズムと音楽と教育』の第４章「音楽と子ども(1912)」には、音楽を教えることが、学校生活を構築する上で大事な部分となる日が間違いなくくるであろう、と記されている。そしてその実施について「たとえば、ジュネーヴの J.-J.ルソー研究所に教育実験センターを設け、敵対し合う国同志にもその恩恵を浴させ、ついには、双方が武器を棄てることができるような日がきっと来る…（中略）…新しい考えは諸国を飛び歩くものである[23]」と記

されており、終戦後の子どもたちの教育について、ルソー研究所の試みに対する J＝ダルクローズの期待が窺える。さらに、クラパレードに関して、「自然でありながら同時に科学的でもある巧みな指導法を用い始めている。新しいスタイルの学校が生まれ、わがスイスの隅々にまで広がろうとしている[24]」 と述べている。

また、『リトミック・芸術と教育』のXI「これからの音楽教育(1922)」の中には、J＝ダルクローズがイギリス訪問した際に、若い世代のための新しい教育を多くの芸術家や教師が確立しようとしていることに深い関心を覚える、とした上で、「子どもの中に行動と思考のより大きな自由を喚起し、意志と想像力の練習によって身体的・精神的な能力のさらに豊かな拡大の下地をつくとうという傾向が見られた。ジュネーヴでジャン・ジャック・ルソー協会によって進められた興味深い仕事は、イギリスに類似している[25]」 と記されている。J＝ダルクローズは頻繁にイギリスを訪れている。彼は 1912 年のロンドン訪問時に、イギリスの大学の聴衆や精神生理学が隆盛を極める学界(milieux)がリトミックに関心を持ったこと[26]や、イギリスの多くの新学校について「保守的なイギリスが、自由に行動するフランスより、迅速な歩みをみせている…(中略)…相当数の教師たちはより自由な教育原理に興味を示しはじめている[27]」と記している。このことから、イギリスの教師たちの新しい教育実践に対する考えやリトミックに対する評価によって、それがルソー研究所における児童を中心とする新しい教育の考え方と相似していると評したのであろう。

J＝ダルクローズは「自分の研究を理解している心理学者」の一人として、クラパレードを挙げている[28]。「真の教育者は、同時に、心理学者、生理学者、芸術家でもあらねばならない[29]」と提言しているように、J＝ダルクローズの記述は、心理学者、教育者としてクラパレードを信頼し、ルソー研究所の革新的な教育に賛同していたことを読み取ることができる。J＝ダルクローズはルソー研究所付属機関である「メゾン・デ・プチ」に自分の息子を入園させている[30]ことも、その根拠を示すひとつであろう。

３．ルソー研究所と J＝ダルクローズ研究所との関係

ボヴェ著『ルソー研究所での 20 年の生活』[31]の中では、ルソー研究所において、「動き mouvement」の教育についての理論と実践ではイェンツェル（Jentzer, Ketty、ジュネーヴの中等学校の教師)、音楽教育についてはベスマン（Bethmann, Héléne ジュネーヴ音楽院の教授)が授業を行っていたという事実が明らかにされている[32]が、J＝ダルクローズや、リトミックに関する記述はほとんど見られない。しかし、ルソー研究所が発行した「プロ

グラム[33]」には、J＝ダルクローズ研究所によるリトミック（リズム体操）の授業が行われていたことが、1921 年から記載されている。この内容の詳細については後述するが、音楽教育や身体の動き、野外遊びの担当教師がいたのもかかわらず、なぜ身体運動を活用した音楽教育であるリトミックがルソー研究所で行われていたのだろうか。それは、J＝ダルクローズが自らリトミック指導を実施する意志があったことや、クラパレードがリトミックを評価していたことが考えられる。それは、次に挙げる J＝ダルクローズがクラパレードに宛てた次の書簡の内容から読み取ることができる。

> 私は、あなたが我々の両研究所のより密接な関係についてお書きになっていたことを殊に気にかけています。これについて近々話し合いましょう…(中略)…あなたの生徒は私たちの学校で週 2 時間のリトミックの授業を受けることができるようにしたらいかがでしょう。私たちの生徒はあなたの学校で週 2 時間の教育学の授業を受けることができることとしましょう[34]。

この書簡の正確な年代はわからない。しかし、「戦時中のある水曜日 30 日」と記されており、1915-1918 年の間に書かれたものと思われる。このことに対するクラパレードの返書は不明であるが、両者はそれぞれの授業をするために、互いの研究所を行き来していたと考えられる。

1920 年には、J＝ダルクローズは主著となる論文集『リズムと音楽と教育』を刊行し、彼の教育理念を世に知らしめている。また 1921 年にはピアジェがクラパレードに見出され、主任研究員としてルソー研究所に就任している。筆者は、第一次大戦後の社会を立て直すためにも、両研究所が次世代を担う子どもの人間性を育成する新しい教育を実践しようとしていた考えや、科学的な教育原理に基づいた教育法における見解において、互いに一致していたことによるものと思われる。

また、ルソー研究所刊行の「プログラム　ゼネラル(programme général)」には、「ルソー研究所」の概要の他、「メゾン・デ・プチ(子どもの家)」についても次のように説明されている。

> 子どもの家は、３歳～７歳の子どもの教育のための学校であり、ここで適用された教育法と、オードマルスとラファンデルらによってつくられた教材の豊かさが、

子どもの観察と経験による（幼児教育の）センターとなっている…(中略)…子どもの家の周りには、今まで触れてきたような一般的な教育の他に、特別の授業がある。芸術的な特別なコースには、図画やオーナメントの制作、リトミック体操（J＝ダルクローズ研究所)、音楽がある[35]。

この記述は、「メゾン・デ・プチ」において、リトミックの授業が行われていたことを示している。J＝ダルクローズは「この素晴らしい、ジュネーヴのルソー研究所付属メゾン・デ・プチのような幾つかの保育園では、何よりもまず、子どもたちに自分自身についての意識を持たせることに気を配っている[36]」と述べている。さらに、ルソー研究所において、リトミックのコースが存在したことを示す資料がある。リトミック教師のネフ（Naef, Edith, 1898-2007)が、J＝ダルクローズ研究所発行の機関誌『リズム(1925)』の「学校のレポート」欄に記した「リトミックのクラス(大人と子ども)」の一部を以下に示す。

いつものようにアマチュア向けの第一年次(ディレッタント(dilettantes)とは言いません、この呼び方は蔑称なのです[面白半分の好事家のイメージがある語句])の生徒はとても多人数です。２クラスが開講され、１つはブリュネ＝ルコント夫人が受け持ち、もう１つはネフ[私]が受け持ちます。私のクラスは生徒五人から始まりましたが、３週間で５倍の人数になりました。ブリュネ＝ルコント先生のクラス(これはJ.-J.ルソー研究所とソーシャルスクール(l'Ecole Sociale)の生徒用に割当てられたクラスです)も同等の人数です[37]。（［　］の記述は筆者の説明。）

このネフの記述から、J＝ダルクローズの妹であるブリュネ＝ルコント(Hélène *Brunet-Lecomte* 1870-1965)がジュネーヴのJ＝ダルクローズ研究所で、ルソー研究所の生徒を担当していたことがわかる。このレポートの後半には、J＝ダルクローズが不在であることは嘆かわしいことであるが、「三ヶ月ごとの彼の視察によって、生徒たちは、私たちの師であるこの個性的な天才と触れあうことができるのです[38]」と述べられている。この時、J＝ダルクローズは一年間(1924-1925)休暇をとり、パリを拠点に活動していた。彼の留守中、教師たちはJ＝ダルクローズ研究所においてルソー研究所の生徒たちにも授業を行い、J＝ダルクローズが帰国した際には彼自身が指導をしていた様子を窺うことができる。

一方、前述したルソー研究所の「プログラム」には、1921年に発行された「プログラム

X 冬(上半期)」以降、全ての「プログラム」にJ＝ダルクローズ研究所によるリトミックの授業が記載されている。それ以前のプログラムは、心理学や教育学、歴史や科学に関する授業が中心であった。1921 年度には、「子ども(l'enfant)」、「教育（l'éducation)」、「教育法(l'enseignement)」に講義が分かれており、リトミックの授業は「教育」の部門に記されているが、1923 年度からは「実践的授業」、1925 年からは「教育と学校」の欄に記されている。

また、1925 年の下半期プログラムには、「リズム体操(gymnastique rythmique)、実践的な授業、週に２時間、テラシエール通りジャック＝ダルクローズ研究所」とある。他の授業については、「教育」の部門では、オードマルスとラファンデルによる「幼児教育」やボヴェによる「デューイの教育学」、「子どもの心理学と実践」の部門では、クラパレードによる「心理学の応用(実施)」などの授業が紹介されている。このような教育学を研究する機関の中で、リトミックの授業は、体系化された教育理念をもつ教育法として、一般教育、幼児教育における役割をなしていたと考えられる。

この「プログラム」は、いつまで刊行されていたかは不明だが、1921 年以降の全てのプログラムに、J＝ダルクローズ研究所のリトミックが授業に組み込まれている[39]。

1921 年は、ピアジェがボヴェのもとでルソー研究所の研究主任になった年である。また、ピアジェはメゾン・デ・プチも任されている。彼はそこでの児童心理学研究(臨床実験)を思うままにできることを望んで、クラパレードの申し出に応じたのであった[40]。ピアジェは「私は、具体的な実験法と分析的手法を用い、多くの援助をえて時間や運動や速度の観念の発達の研究を開始し、それらの観念を含む行動の研究に着手した[41]」と述べている。「時間や運動や速度の観念」は、リトミック教授法における重要な観念のひとつである。ピアジェは、「均衡化させたシステムとは、あらゆる誤りが訂正され…(中略)…動かない秤のように静的な均衡ではなく、行動の調整である[42]」とし、子どもの発達心理学における知覚運動的な経験の重要性に関心を向けている。彼はメゾン・デ・プチで自身の研究を組織し、クラパレードの理論をさらに展開させた[43]。そして、ピアジェの研究はその後のリトミック教育と関わりをもっている。J＝ダルクローズ研究所のバックマン教授(Bachmann, Marie-Laure)は、ピアジェが自分たちと一緒に毎週あるマスタークラスを持っていた際、彼は我々に遺伝心理学と認識論(epistemology)を講義し、教師と協力者のスタッフの多くが彼の研究に参加していたことを語っている[44]。ルソー研究所は、リトミック教育にさまざまな科学的見地をもたらしたといえるだろう。

第３節　J＝ダルクローズに対するルソー研究所の教師の見解

１．身体運動の教師、イェンツェルの見解

ルソー研究所の研究者・教育者は、J＝ダルクローズについて、どのような考えをもっていたのだろうか。創立者クラパレードだけの判断ではなく、ルソー研究所の教師、研究者たちがリトミックに対する認識と一定の評価があったことを、以下検討したい。

ルソー研究所の「身体運動と遊び」担当の教師イェンツェルは、『*Jeux de plein air et D'intérieur*(1943)（屋外スポーツと室内の手を使う遊び）』の著者であり、ストックホルムの王立学院で学んだ人物である[45]。また、彼女は *Eclaireuses* (ガールスカウト)の手引き書の作成で大きな役割を果たした、とボヴェは伝えている。ベーデン＝パウエルの創始したボーイスカウトの活動は、自然の中での冒険や、グループによる遊びを通して、協調性や自立心を身につけさせようとするものである。ボヴェ自身も『ボーイスカウト』を翻訳しており、イェンツェルの着任は、スウェーデン体操というよりも、ボーイスカウトの教育的活動を熟知している教師として招かれたと考えられる。

ルソー研究所刊行誌『教育者(l'educateur)』の中で、彼女はルソー研究所における活動の重要性について、J＝ダルクローズを挙げている。

> 特に私が思うのは、時代の３人の偉大な教育者の特筆すべき成功を生み出したことである。ジャック＝ダルクローズは、生きたリズムの実践によって音楽教育の革新を果たし、ベーデン・パウエルは行動による道徳教育を改革した。そして、ヘルジングフォルスのエリ・ビヨルグステンは…(中略)…生理学的基礎を与えるだけでなく身体教育の革新を行った[46]。

この記述は、ルソー研究所がリトミック教育の革新に尽力した、という彼女の見解と解釈できる。これはリトミック教育とルソー研究所の関係を裏付けるものである。

２．障がい児教育の研究者、デクードルの見解

ルソー研究所の教師の中には、クラパレードやフェリエールをはじめ、J＝ダルクローズと関係がある人物が少なからずいる。アリス・デクードル(Descoeudres, Alice 1877-1963)もその一人である。ボヴェ著『ルソー研究所での 20 年の生活』の「X 発達の遅れた者の教育」では、以下の記述がある。

異常児、薄弱児がすべての点で健常児に劣っているわけではなく…(中略)…健常児への教育は異常児のために考えられた教育からどんな恩恵を受けているのか、ということが研究所の初期にデクードル女史に従って我々がしばしば扱ったテーマだった。デクードル女史とナヴィル博士が並行して担当していた二つの講座、「心理学と教育学」と「異常児の病理学と臨床実習」は学生の必須授業だった[47]。

ボヴェは、彼女について『異常児の教育　心理学的観察と実際的指示(1916)[48]』を出版し、「ドクロリーの考えには充分に満足せず、あらゆる分野でよりよいものの恩恵を子どもたちに受けさせるために、いつも目覚めた精神をもっていた人物である…(中略)…彼女はジャックにリトミックを、個別心理学をアドラーに、ローテにデッサンを学び、ボスケッティ女史を手本に自由創作を学んだ[49]」 と述べている。これにより、デクードルはリトミックを学んだ教師であったことは明らかである。

デクードルは著書『異常児の教育』「第五章 体操」の中で、「１．自然的体操」と「２．方法的体操」に分類し、「２．方法的体操」には、スウェーデン体操と J＝ダルクローズの律動体操について以下のように述べている。

虚弱児童にとって二つの考え方、即ち彼等の筋骨の薄弱さに対して是非とも体操の練習を必要とすること、他面から考えて、彼らの注意力の無力と意志力の欠如とはスウェーデン体操の様な教育法をほとんど不可能にしている…(中略)…唯一の救知治策は律動体操であることに気が付く。ジャック・ダルクローズの創案の方法は筋肉感覚を他の感覚器官によって体得し、結局は相互にこの両者が練習し合うように役立てるのである[50]。

イエンツェルは J＝ダルクローズについて、リズムの実践（身体運動を活用した）による音楽教育の革新を行ったとしている。一方、デクードルは、J＝ダルクローズの教育法を、音楽教育の視点からではなく、身体運動(体操)としての価値を認めている。J＝ダルクローズの教育は、音楽教育や障がい児教育における身体運動の有用性に関して、ルソー研究所の教師たちに評価されていたといえるだろう。

３．フェリエールと J＝ダルクローズとの関係

フェリエール（Ferrière, Adolphe 1879-1960）は、ジュネーヴ大学で社会学の博士号を取得し、ルソー研究所創立時から教授として就任している教育学者である。また、フェリエールは「活動学校」の推進者であり、国際教育連盟の中心的人物でもあった。彼は、1年間で 40 回の講演を世界各国で行っているほど、その活動は精力的であった。1912 年には、ジャック＝ダルクローズ学院（ヘレラウ）を訪れており[51]、「彼は、J＝ダルクローズの知己を得て、学院の講義を受けた後、リトミックを学ばせるために彼の子どもたちを学院に送った[52]」とされる。フェリエールが J＝ダルクローズに学び、知己を得たかどうかは管見のところ明白ではない。しかし、この記述が示すように、彼の娘であるシュザンヌ・フェリエールはヘレラウの第 1 回卒業生であり、直ちにリトミックを教え始めたひとりであった[53]。

さらに、J＝ダルクローズは、国際教育連盟機関誌『新時代のために（フランス語版の初年、1922 年 7 月の第 3 号)』に、“Le Rythme”という題で記事を寄稿し、リトミック教育の概要を述べている。フェリエールは、この著名な機関紙の仏語圏編集者であった。

このように J＝ダルクローズの教育法は、ルソー研究所の教育者たちに認知され、彼らの教育にも影響を与えていたと考えられる。フェリエールに関しては第 5 章で後述する。

４．クラパレードの見解

クラパレードの研究は幅広く、医学、哲学、生理学、動物学など多岐にわたり活躍した心理学者である。彼は自分の教育概念を「機能主義的教育」と呼び、自身がデューイ『学校と子ども』の仏訳版に付した序文では、「機能主義教育学とは、精神過程をその生物学的観点から開発することを意図し、かつ、身体過程及び身体活動を生存維持の手段すなわち機能とみなし、それ自体に存在理由をもつ過程とはみなさない教育学のことである[54]」と表現している。

クラパレードはこの教育について、「精神発達を目指す教育…(中略)…それは子どもの欲求、すなわち、目的に到達しようとする子どもの興味をまず受け入れ、それを、彼の中の所定の活動性を目覚めさせ引き出すためのテコとして用いようとする教育[55]」と記述している。

その代表的著書のひとつである『子どもの心理学と実験的教育学(1916)』「スイス」において、クラパレードはルソー研究所の創立について述べている。その記述に続いて、ル

ソー研究所を支えた教育者たちや、付属「子どもの家」、さまざまな教育的な「遊び（遊戯 Jeux）」に関しても記している。そして、教育学に立ち向かう著作者なども記載され、更に、J＝ダルクローズについても次のように列挙されている。

> ジュネーヴは、J＝ダルクローズが考案し、発展させたリズム体操によって、1904年以来、教育者たちの関心を集めていた。この優れたメソードは、審美的成果によるだけでなく、教育的効果によって、あっという間に世界に広まった。リズム体操のためのジャック＝ダルクローズ研究所は 350 名の生徒をもって、ジュネーヴで1915 年に開始された[56]。

上述の内容は、ルソー研究所の授業にリトミックを取り入れた、という明確な記述ではない。しかし、ここに記載されている研究者・教育者たちは、皆ルソー研究所の教師、あるいは連携している教育機関であり、J＝ダルクローズ研究所も、そのひとつと考えてよいと思われる。

さらに、クラパレードはJ＝ダルクローズについて以下のように記している。

> この体操は 1904 年ジュネーヴで、ジャック・ダルクローズによって考案されて以来、盛んに実施され、リズムと音楽の感覚を発達させるという価値ばかりでなく、感情と欲求の教育方法としての価値もあるとみなされている。この体操は実際、単純な欲求の命ずるのに従って苦もなく運動が行われるのに至るというような、神経組織の柔軟性を高めるものである。この体操は個人にはその身体を制御する力を与える[57]。

クラパレードは、「子どもは現在の欲求を満たすだけでは満足せず、つねにそれ以上のことを知りたがり、質問するなど、自己を乗り越えようとする[58]」と述べている。彼は、子どもの内在的な欲求や興味によって、外界と自己との関係を創造的で主体的な存在として捉えようとした。クラパレードは、この「成長の欲求」は教育上の貴重な助けとなる[59]と記しており、その教育方法としてリトミックの有用性を認めている。

J＝ダルクローズの方法を取り入れていたモンテッソーリやドクロリーは、リズム体操をするには十分な準備や適切な練習が先行して必要である、という考えを著書の中で示し

ている。一方、クラパレードは、J＝ダルクローズのメソードに対し、音楽教育を超えた広義の意味での教育法であることを認識している。神経中枢を刺激して身体のコントロールを苦なくできるに至る、と述べている記述から、クラパレードが J＝ダルクローズの良き理解者であったことがわかる。

第４節　まとめ

以上、ルソー研究所のプログラムの記載、クラパレードの記述、ルソー研究所の教育者たちの言葉によって、J＝ダルクローズのリズム体操（リトミック）がルソー研究所で行われていたことは明らかである。また、J＝ダルクローズ研究所においても、クラパレードによる講義がなされており、ルソー研究所と J＝ダルクローズ、および J＝ダルクローズ研究所との長い期間にわたる相互の協力関係が存在していたといえる。ルソー研究所の教授陣には、オードマルスをはじめ、デクードルなど実際にリトミックを学んだ人物も少なからずおり、クラパレード、ボヴェ、フェリエールなどの教授たちも、J＝ダルクローズの教育理念を認知していたと考えられる。

これはひとつに、ルソー研究所が子どもの発達や研究のために、J＝ダルクローズの教育法の必要性を認めていたからであると解釈することができる。J＝ダルクローズは、クラパレードより心理学などの科学的思考を独自のリトミック教育に取り入れ体系化した。一方、ルソー研究所は、リトミック教育法を、身体運動を活用した音楽教育というよりも、子どもの発達や特質、気質に応じた人間性への教育的成果をもたらす「音楽を活用した身体運動」であるところを評価していたと考えられる。特に世界に発信する教育機関であったルソー研究所が、幼児や教育者に対してリトミックを実施していたことは注目すべき点であろう。

ルソー研究所創立当時は、まだ J＝ダルクローズはヘレラウを中心に活動していた。1924-25 年度については、J＝ダルクローズが渡仏した年であるため、彼自身が授業を行っていたとは考えられないが、J＝ダルクローズの妹であるブリュネ＝ルコントがルソー研究所の生徒を担当していたことも本章で明らかになった。J＝ダルクローズとルソー研究所の教師陣たちとの相互的な協力関係は、両者の教育方法の構築に重要な役目を果たしていたと思われる。

ルソー研究所で行われていた教育は、身体運動を活用した音楽教育をふくめ、当時以前になされていた教師や大人の視点からの教育ではなく、子どもの発達や個々の子どもの独

自性を尊重する実験的、実践的な教育への挑戦であった。世界中で新教育へのそれぞれの転換をはかろうとする教育者たちと J＝ダルクローズは相互に協力し合っていたといえるだろう。ルソー研究所における実践が、J＝ダルクローズに音楽教育から人間性の育成という広い概念を持った教育へと方向づけたと考えられる。

注、及び引用文

---

[1] ボイド、ローソン共著、国際新教育協会訳『世界新教育史』玉川大学出版、1967 年、p.75

[2] 同上書、1967 年、p.102

[3] Brice, Mary, “La Rythmique Jaques-Dalcroze dans les Ecoles promaires Genevoises”, 2014. p.23.

Lee, James willam, “Dalcroze by any name: Eurhythmics in farly modern theatre and dance”, 2003. p.33, 57.

[4] Madureira,Rafael, “Jaques-Dalcroze:música e educação”2010. p.216.

[5] P.Bovet, *Vingt ans de vie.L'Institut J.-J.Rousseau de 1912 à 1932*, Delachaux & Niestlé, Neuchâtel, 1932.

[6] 古沢常雄「第一部　フェリエールと新教育運動」『活動学校』明治図書出版、1989 年、pp.20-21

[7] ボイド、ローソン共著、前掲書、1967 年、p.55

[8] Programme Général, Institut des Sciences de I'Education,（年代は不明） p.1.

[9] *Ibid.,* p.1.

[10] *Ibid.,* p.1.（ルソー、今野一雄訳『エミール』、岩波書店、(1980) p.18 より邦訳を引用）

[11] クラパレード、森田伸子訳「クラパレードと機能主義」『機能主義的教育論』、明治図書出、1987 年、p.32, 42, 43

[12] 岩間浩『ユネスコ創設の源流を訪ねて』学苑社、2008 年、p.86

[13] 森田伸子「クラパレードと機能主義」『機能主義教育論』明治図書、1987 年、pp.35-36

[14] Programme,　Spécial L'Éducation des petits, Institut J.J.Rousseau, 1916.

[15] *Ibid.,* 1916.

[16] *Ibid.,* 1916.

[17] F.マルタン他、板野平訳『エミール・ジャック=ダルクローズ』、全音楽譜出版、1988 年、p.85

[18] 1915 年ジュネーヴに創立した「J＝ダルクローズ研究所」と区別するため、ヘレラウ校を「J＝ダルクローズ学院」と記す。

[19] Berchtold,Alfred, *Emile Jaques-Dalcroze et son temps*,　2000. p.141.

[20] F.マルタン他、前掲書、1988 年、p.73

[21] 同上書、p.107

[22] Brice,Mary,“La Rythmique Jaques-Dalcroze dans les Ecoles promaires genevoises” 2014. p.23.　F.マルタン他（1988）p.107

[23] J＝ダルクローズ、山本昌夫訳『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2005 年、p.71

[24] 同上書、p.71

[25] J＝ダルクローズ、板野平訳『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版社、1990 年、p.148

[26] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), *carte postale du Redbourne Hotel à Landres*, 1912, f.187

[27] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), 52 rue Vaugirard, 1925, ff.185’186

[28] J＝ダルクローズ、河口道朗訳『音楽と人間』、開成出版、p.113
(アメリカの心理学者 James,William の名前も記述されている)

[29] J＝ダルクローズ、山本昌夫訳『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2005 年、p.127

[30] F.マルタン他、前掲書、1988 年、p.107

[31] P.Bovet, *Vingt ans de vie.L'Institut J.-J.Rousseau de 1912 à 1932*, Delachaux & Niestlé, Neuchâtel, 1932.

[32] P.Bovet, *ibid.*, 1932. p.23.

[33] Programme, Institut J.J.Rousseau（1914-1944 年まで。1913.1919.1933.1938.1939. のプログラムを除く。これは資料が入手できなかったため不明な資料である。）

[34] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), SA,(pendant de guerre), B.P.U., f.181.

[35] Institut J.J.Rousseau, 前掲書、pp.3-4.

[36] J-Dalcroze,"À batons rompus Lettre aux rythmiciens"1916.

[37] E.Naef, "Classes de Rythmique (Adultes et enfants)" *Le Rythme* No.15, Nouvelles de l'Institut Jaques-Dalrcoze Bulletin de la Méthde en Suisse et a l'Étranger, 1925, Avril, f.11.

[38] E.Naef, *ibid.*,1925. F.11.

[39] 1930 年以降のプログラムには、リトミックの授業は「学院による特別授業」の欄に記載され、授業の時間割表にリトミックが約 10 年間にわたり記されている。

[40] リチャード・エヴァンズ、宇津木保訳『ピアジェとの対話』「自伝とおもな出版物のリスト」、誠信書房、1975 年、pp.170-173

[41] リチャード・エヴァンズ、宇津木保訳、同上書、p.187

[42] ピアジェ、J.-C.ブランギエ、大浜 幾久子訳『ピアジェ晩年に語る』、国土社、1985 年、pp.66-69

[43] クラパレード、森田伸子訳「クラパレードと機能主義」『機能主義的教育論』、明治図書出、1987 年、p.42

[44] John Habron & Marie-Laure Bachmann, "Dalcroze Eurhythmics as a psychomotor education for children with special educational needs：An interview with Marie- Laure Bachmann" Approches: An Interdisciplinary Journal of Music Therapy Spesial Issue 8 (2), 20162

[45] Bovet, 1932.　p.23.

[46] L'Éducateur,　Institut J.J.Rousseau, 1927. pp.262-263.
ヘルジングフォルスとは、ヘルシンキ(フィンランド共和国の首都)のスウェーデン語名。

[47] Bovet, 1932.　p.80.

[48] Descoeudres,　*L'éducation des enfants anormaux*, 1916.

[49] Bovet, 1932.　p.80.

[50] デクードル、若井林一訳、中野善造編『異常児の教育』、クレス出版、2008 年、pp.148-149

[51] Gerger,Rémy, *Vie et oeuvre d'Adolphe Ferriere* (1879-1960),　Genéve, 1989. p.11.

[52] Brice,2014. p.30.　（同上、Gerger(1989)からの引用と記されている。）

[53] F.マルタン、1988 年、p.86

[54] クラパレード、原聡介訳「教育観としての機能主義」『機能主義的教育論』、明治図書出、1987 年、p.50

[55] 同上書、1987 年、p.82（1911 年、児童心理学協会リヨン支部の報告書、45 頁参照）

[56] Claparède, *Psychologie de L'enfant et Pédagogie Experimentale*, Librarie Kundig,Genève, 1916, pp.92-93.

[57] Claparède, “Les innovations les plus importantes du domaine de la pédagogie depuis le début du siècle”Separat-Abdruk aus dem Jahrbuch der Schweizerischen 1914. p.225.

[58] クラパレード、原聡介・森田伸子訳『機能主義的教育論』、明治図書出、1987 年、pp.124-125

[59] クラパレード、同上書、1987 年、p.125

第　2　章

クラパレードから与えられたジャック＝ダルクローズの教育に関する示唆について：学会活動と書簡を手掛かりに

第１節　クラパレードによる J＝ダルクローズへの教育的示唆

１．本章の課題と背景

J＝ダルクローズは、リトミックを確立していく過程において、リトミックによる教育法が音楽的能力を伸長させるだけでなく、子どもの内省力を引き出し、集中力、社会性などを高める教育として有用であると考えるようになった。その考えに至った理由のひとつとして、クラパレード、ラグランジェ(Lagrange, Fernand 1846-1909)[1]や、フォーレル(Forel, Oscar-Louis 1891-1982) [2]など、当時の最新の生理学や心理学についての研究が挙げられる。中でも、スイスの心理学者クラパレードの助言は、リトミックの教育理念に影響を与えたとされている[3]。

第１章で述べたように、クラパレードは、スイスの歴史上著名な教育家であるジャン＝ジャック・ルソー(Rousseau, Jean-Jacques 1712-1778)の教育思想を礎にして、それまでにない子どもの発達や子どもの視点にたった革新的な研究・教育機関であるルソー研究所を 1912 年、ジュネーヴに創立した。J＝ダルクローズも数年遅れて 1915 年に、リトミックのための J＝ダルクローズ研究所を同地にて設立している。両者は互いの研究所で講義を行い、交流を深め、研究においても協力的な関係にあった[4]。クラパレードは J＝ダルクローズのリトミックをどのように評価し、両者の間にはどのような研究がなされていたのだろうか。

本章では、J＝ダルクローズの教育観の構築への背景のひとつに、クラパレードからの示唆があったのではないかと考え、その影響について検討することを課題とする。両者の関わりから新たな知見を見出し検討することは、J＝ダルクローズの教育観の変遷の一端を明らかにするものと考える。

研究方法は、J＝ダルクローズとクラパレードの書簡、およびジュネーヴ教育学協会における J＝ダルクローズの実演・講演活動、クラパレードによる J＝ダルクローズの見解を示した文献をもとに、J＝ダルクローズの教育に対する見解を読み取っていく。十数点に及ぶ J＝ダルクローズの直筆書簡(ジュネーヴ大学公共図書館　Bibliothèque Publique et Universitaire, Genèva 所蔵)は出版されていない貴重な資料である。この書簡は、J＝

ダルクローズ研究所図書館（ジュネーヴ）に、一部タイプライターで打ち直された原稿(1980-1990 年代頃)がある[5]。翻訳にあたってはこれを参考とした。

先行研究に関しては、バックマン(Bachman, Marie-Laure)の『Dalcroze Today：音楽を通しての教育(1991)[6]』、ブラック＆ムーア(Schnebly-Brack Julia, Moor, Stephen)共著『リズム・インサイド（2002/1997)[7]』、坂田の「リトミックにおける反応練習（1993)[8]」など多数の文献がある。バックマンは、精神運動に関連した再教育のメソードというリトミックの価値はすでに医学の専門家に評価され、特に J＝ダルクローズを一致してサポートしたのはフルールノワやクラパレードである[9]と記している。また、ブラック＆ムーア(1997)は、刺激と抑制の運動を試みた時に、両者の研究の突破口が開かれた[10]と述べているが、その経緯は明らかにされていない。そこで、本稿では、我が国ではほとんど紹介されていない私的な書簡などの史料を中心に検討する。このことにより、J＝ダルクローズのリトミックに対する教育観を改めて明確にすることができるものと考える。

２．　クラパレードの教育的示唆による、J＝ダルクローズへの影響

クラパレードはジュネーヴ大学で医学を修め、心理学者のフルールノア(Flournoy, Théodore 1854−1920)やジェームス(James, William 1842-1910)らの影響を受けた心理学者、教育学者である。彼は自分の教育理念を「機能主義的教育」と呼び、この教育について「精神発達を目指す教育…（中略）…それは、子どもの欲求、すなわち、目的に到達しようとする子どもの興味をまず受け入れ、それを、彼の中の所定の活動性を目覚めさせ引き出すためのテコとして用いようとする教育である[11]」と述べている。

クラパレードの機能主義的心理学、そこから導かれた「欲求」を重視する教育論は、単に子どもの注意や興味を引き起こす教育を主張しているのではない。全ての興味深いものが教育的価値をもつとは限らないからである。我々も一時的に目先の変わったものに惹かれることがあるように、表面的な興味と、行動を導き意志を揺り動かすことのできる興味とは大きな差異がある。クラパレードは何よりも行動の内発性を強調し、行為は欲求を作り出す教育の方法を提示し､人間の内発的行動を均衡のとれた全体において示そうとした。

また、クラパレードは『機能主義的教育論』の中で、機能的原理を「行為を支配する大法則」として「欲求の法則」、「意識化の法則」など 10 項目に集約している。たとえば、「意識化の法則」に関して坂田(1993)[12] は、クラパレードの示す「意識化の法則」が J＝ダルクローズの教育法のひとつである｢反応練習｣に影響を及ぼしたことを論述している。

一方、ブロッツ(Brotz, Thomas)[13]は、クラパレードと J＝ダルクローズは互いの研究に興味があったが、彼らの見解の交換について書かれているものはないと述べている[14]。しかし、J＝ダルクローズがクラパレードから心理学的知識を得ていたことは、1912 年 11 月 25 日付のクラパレード宛の葉書に認められている。

> イギリスの大学の聴衆や精神生理学が隆盛をきわめる学界(milieux)が私のメソードに大変な関心を持たんとしています。私はこれが、あなたがお聞かせ下さった、私を心理学の分野へと導いた幾つかのご指摘のおかげであることを忘れていません。…(中略)…私はヘレラウに精神生理学の研究所を持ちたいと思います[15]。

J＝ダルクローズとクラパレードは、互いの研究所を講義の目的で行き来していただけでなく、密接な関係にあった両者の間には頻繁に手紙が交わされていた。下記に示す幾つかの書簡はクラパレードと J＝ダルクローズの研究上の関係を浮き彫りにするものである。

１） J＝ダルクローズの書簡より（クラパレード宛、1906 年 6 月 12 日）

> 拝啓　もう一点質問をよろしいですか？ 不躾をお許しください。
>
> リズム体操のメソードの第二部で、私はリズムの本質について述べようと考えています。つまり、リズムのエネルギーについてと、感覚(sentiment)との協同関係について、私は神経が筋肉を支配する幾つかの段階を確定し、「神経支配(“innervation”)」という言葉の定義を次のように定めます。神経組織や諸要素(éléments)が、筋肉の意識的な(consciente)伸縮によって行為を引き出すこと、この定義は正しいでしょうか？ 私は筋肉緊張とこの緊張における感覚との差異を確定したいと思うのです[16]。［ ――下線は原文のまま］

この書簡に記されている「innervation(神経支配)」は、彼の著書『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図(1906)[17]』で取り上げている重要なテーマのひとつである。この著書には、練習は全てのニュアンスと運動性の神経支配の度合いによって行われ、動きを支配する３つの能力の遊びを規則づける[18]と記されている。それは、筋肉的な仕事の強さを指示する「感覚」、仕事の効率を高く評価する「判断力」、表現を決定する「意志」である。これはリ

トミックに、筋肉収縮が持つ特徴を活用する目的を持って執筆されたものであり、「神経支配」という語句が題名に使用されている J＝ダルクローズの著書は他に見当たらない。返信があったであろうクラパレードからの助言は、同年に出版されたこの著作に関する科学的根拠を導いたものと考えられる。

２）クラパレードの書簡より（J＝ダルクローズ宛、1906 年 12 月）

> あなたが生理心理学とは全く違った手段を取りながらも、同じように、運動の心理学的重要性と、精神的な、また実際的な現象の支えとして運動が演じている役割を理解するに至ったということは大変興味深いことです。しかし、あなたは心理学者よりずっと見事になさったのです。単に推論するかわりに、あなたは検証し証明したのですから。まさにそのとおり、あなたは歩きながら運動を説明したのです！
> …(中略)…ブリュッセルの発達の遅れた(arriérés et anormaux)子どもたちの学校で行われているリズム練習、ピアノ伴奏によるリズム、歩行とバトンによる練習が、知能についてと同時に性格についても多大な教育上の影響を持つことは証明されました。リトミック体操(gymnastique eurythmique)はどうにもならないほど言うことを聞かない生徒を規律に従うようにさせる最良の手段だと思う。私はあなたのメソードが小学校に導入されないはずはないだろうと思います[19]。

クラパレードはこの書簡において、J＝ダルクローズの教育法に対し、運動が心理学的重要性を持ち「リズム練習が心身に大きな教育的影響を与える」としている。これは J＝ダルクローズの創案したリトミックが、生理学・心理学的見地からも正しいとクラパレードが述べていると理解できる。一方、J＝ダルクローズは、リトミックの経験を科学的で確かな原理・法則に体系化するために、クラパレードの助言を幾度となく求めていたことを読み取ることができる。

３）1909 年 7 月 9 日付けでクラパレードに送られた J＝ダルクローズの書簡には、「今年の冬に、そのアプローチについての知的な研究の即座に現れた影響を、あなたに観察していただけることを大変嬉しく思います[20]」と記されており、クラパレードが J＝ダルクローズの教育法を視察する約束をしていたことがわかる。「その知的な研究」がどのようなも

のかは、今のところ明らかではない。しかし、J＝ダルクローズは自身の「リトミック」方法論について、クラパレードから助言や指摘を受け、そこから考案された試みがクラパレードにより実証されていったといえるだろう。また、第一次戦時中(1914-1918)にクラパレードに送った J＝ダルクローズの書簡には、次の文章が記されている。

> 私は長い間気にかけながら、戦争が終わらなければ実現できないだろう計画についてもあなたにお話したいのです。リズムについて、と題するような国際会議を開き、そこであらゆる作用について、リズムのさまざまな様相、人間活動のリズムについてなどを話し合いたいのです…(中略)…私たちの協力関係がそのことを指し示しているように思います[21]。

この書簡には、「リズムに関する国際会議」について記されている。その後 1926 年に、J＝ダルクローズは「第一回リズム会議」を三日間にわたり、ジュネーヴの研究所で開催している。つまり、約十年にわたり、彼はこの会議の構想を練っていたことが窺える。その着想を得た早い時期に、J＝ダルクローズが会議についての協力をクラパレードに働きかけていること、そして、それが実現に向かったことは、両者の研究に対する緊密な関係を裏付けている。

この幾つかの書簡からは、J＝ダルクローズとクラパレードは互いに理解し合い、話し合える関係を築いていたことを読み取ることができる。 クラパレードからの心理学、生理学見地からの助言、リトミックの教育的影響の実証、そして、ハンディキャップのある子どもの教育や、さまざまなリズムの作用についてなど、あらゆる側面に関する意見交換へとその関係は深まりを見せている。

４）J＝ダルクローズは 1907 年 1 月 19 日、クラパレードの手紙に対する返礼を書いている。

ルダンテック氏(Le Dantec『生命体における統一性』の著者)とヘンリー氏（Henry, Ch. 精神生理学の専門家）から受け取った手紙には、自分の論文が音楽的精神によるものにもかかわらず、より広い百科的(encyclopédiques)精神の関心をひく性格を持つことを証明してくれたことを報告している。音楽的発達についての自分の論文が、精神的、肉体的に存在全体の改善に寄与することを、ジャン・デュディンヌ氏が彼らに伝えなければ、自分の

著書を繙くことなどなかったはずであると述べ、クラパレードに献辞を付けて、著書を送らせたらよいと考える要人の紹介を頼んでいる。

そして、J＝ダルクローズは「…(前略)…造詣深い方々のご意見は私に新しい指針を見出させてくれることでしょう。科学的精神を欠く私は、いつも経験に基づいて創作していますが、私の内に真の改革を生ぜしめるためには、ほんの一言で充分なのです[22]」と綴っている。

この書簡からクラパレードは、リトミックに対し、心身全体の改善にも役立つ教育であることを認識し、その意義をさまざまな研究者に伝える尽力者でもあったことが判る。そして、クラパレードの助言は、J＝ダルクローズが想定していなかった生理学者や心理学者からの評価を得て、リトミックを科学的・学術的なメソードとする推進力となり、その確信を抱いていったのではないかと考える。

J＝ダルクローズは 1892 年、ジュネーヴ音楽院に和声学の教授として就任し、1903 年には、「リトミックの完全な方法の諸原則を実地に応用してみた[23]」 と述べている。彼はリトミックを構想し始めた早い時期からクラパレードと交流をもち、研究に関する相談をしていたと思われる。

また、2）の手紙を書いた 1907 年は、ジュネーヴでリトミック体操協会の第一回総会が開催されている。その名誉会員にはクラパレードや、リトミック考案の道へ導いた音楽理論家の恩師マティス・リュシィが選ばれている。このことからも、J＝ダルクローズは、クラパレードの人物とその研究をいかに信頼していたかを窺い知ることができる。そのクラパレードが主宰する教育学協会に J＝ダルクローズは参加しているが、この詳細に関しては、後述するものとする。

第２節　クラパレードの「子どもの心理学」と J＝ダルクローズの教育学への導き

クラパレードは、前述したようにジュネーヴを中心に活躍した、生理学・心理学者である。彼は「教育の究極の目的は何であるべきか」という問題は、心理学から逸脱する問題であると述べながらも、1905 年の国際心理学会（ローマ）で「興味は精神活動の基本原則である」と宣言し、1931 年に『機能主義教育論』を出版している。

彼はこの中で、すべての行為は興味によって導かれ、それは、あらゆる可能な反応の中から瞬間に選択することであると述べている[24]。その心理的欲求は、子どもの発達段階により変化し、次々にさまざまな関心を示し際限がない。この「成長の欲求」を教師は見逃

さないことが重要であるとしている。

クラパレードの『機能主義的教育論』は、1911-30 年までの論稿 10 篇からなる著作である。しかし、J＝ダルクローズの 1906 年の書簡には、すでにクラパレードへ生理学的・心理学的概念、教育観についての質問がなされており、1909 年発行の『子どもの心理学(*Psychologie de l'enfant et Pédagogie expérimentale*)』を J＝ダルクローズが読了していたことが書簡により明らかにされている[25]。

『子どもの心理学』は、1905 年の機関紙に掲載された論文が始まりであり、初版では「心理学と教育学」「歴史の概要」「研究の問題点」「精神の発達」「知性の疲労」などに関する、いわば教育心理学の手引書というべき内容になっている。ここには「魅力ある教育」の項に、J＝ダルクローズの著書『リズム体操 *Gymnastique Rythmique* (1906)』がすでに紹介されている。従って、1900 年前後には、J＝ダルクローズは、クラパレードから助言だけでなく、著書からもさまざまな心理学の基礎知識を得ていたと思われる。

1900 年当時、ジュネーヴ大学で医学博士を取得したクラパレードは、大学の心理学実験室でフルールノワの助手をしていた（その後この実験室の後を継ぎ、1904 年に心理学の教授に任命されている）。フルールノワは、「リズム体操は私の目に素晴らしい改革として映った。我々の最も深い生理心理学的な本性に応えるものに思われ、天才的と言ってもよいだろう。身体的にも精神的にも生命存在の全体を完成に導き発展させるのに貢献するものに違いなかった[26]」と 1906 年にリトミックを評している。

このように J＝ダルクローズはリトミックの構想において、さまざまな苦心、研究と実践を繰り返していた中で、クラパレード以外にも評価する学者たちがいた。しかし、書簡によれば、クラパレードは J＝ダルクローズと密接に教育について意見を交わし、精神生理学・教育心理学的見地からの助言やリトミック実践の視察(検証)を行っている。J＝ダルクローズの教育心理学や生理学研究への傾倒や関心は、クラパレードからの影響が大きく関わっているものと考えられる。以下、その積極的な活動について検討したい。

第３節　ジュネーヴ教育学協会（学会）での活動

１．ジュネーヴ教育学協会（学会）と J＝ダルクローズ

J＝ダルクローズは、1896 年にスイス・ロマンド音楽新聞の編集者になり[27]、ソルールで行われた 1905 年のスイス音楽家協会（マティス・リュシィはこの学会の名誉会員）の会議で、学校における音楽教育改革について講演している。また、国際リトミック教育者

協会(U･I･P･D)を創立する(1926 年)など、音楽教育に関する学会や団体への意欲的な活動を行っている。しかし、クラパレードが会長を務める「ジュネーヴ教育学協会（la Sosiété Pédagogique Genevoise）」の会員であったことは、あまり知られていない。

ジュネーヴ教育学協会は、教育問題の研究のために 1867 年に設立された学会であり、1915 年にはクラパレードが会長を引き継いでいる。また、J＝ダルクローズもこの学会の会員であったことが 1916 年の会報誌に記載されており、この教育学協会の会員には、ボヴェ、デュパルク、デクードルなど、多数の著名な教育者が名を連ねている。1916 年は、ジュネーヴの J＝ダルクローズ研究所が設立した翌年である。その上、この研究所の開所式後、半年も経たない 1916 年の３月 23 日「ジャック＝ダルクローズ氏によるリズム体操(gymnastique rythmique)の講義と実習」が行われたことが「ジュネーヴ教育学協会」の会報誌(1916)に報告されている。この報告書の J＝ダルクローズに関する記述は、彼が会員である研究者や教育者たちに、自身のメソードをどの様な方法で理解させようとしたかを窺い知ることができる貴重な史料でもある。また、この中で J＝ダルクローズは教育学の領域において、リトミックを如何に活かしていくのか、理解を深めてもらうのか、学校教育にどのように導入すれば効果的であるのか、という考えを示している。では、その内容とはどのようなものだったのだろうか。

２．J＝ダルクローズの「リズム体操の講義と実習」

この報告書には、クラパレードがはじめに J＝ダルクローズに謝辞を述べたことが記されている。したがって、クラパレードがその場に立ち会っていたことは明らかである。また、クラパレードはこの講義に関する J＝ダルクローズの見解を後に記述している。

報告者のヴィリー(E.Willy)によると、J＝ダルクローズは、最初に個人の精神と肉体の間には断絶があることを示すために、有志を募って 30 名ほどの成人に、単純なエクササイズをさせている。たとえば、後ろ向きに歩いては、時に止まることや、足や腕を同時に、または交互に動かすなどである。

彼女は、「まず、ジャック＝ダルクローズ氏は、彼のメソードについての講義をするつもりはなく、リトミック体操をさせて見せ、聴衆を納得させようとした…(中略)…身体の動きをコントロールするためには、意志力は練習を必要とし、注意力は鍛えなければならないことを示した[28]」と評している。そして、J＝ダルクローズ研究所の１年生から３年生までの子どもたちに、リトミックを実演させている様子を記している。（表１参照）

J＝ダルクローズは、音楽家、俳優、教育家など、各分野の専門家のみならずアマチュアの生徒たちにも門戸を開き、同時に子どもたちのための教室を開いている。デュトワ＝カルリエは、「6歳になれば誰でもそのスイス全土で話題となった教育を、1905年7月1日のソルールにおける講演以前に、受けることができた[29]」 と記述している。ヘレラウ時代、1912年のイギリス巡業に、J＝ダルクローズはジュネーヴの子どもたちを同行させているが、前述の報告書により、ジュネーヴの研究所においても、子どものクラスがあったことが判る。そしてこれは、J＝ダルクローズ研究所の子どもたちによるデモンストレーションにより、意志や注意力などの精神と身体のコントロールや調和が、リトミックの練習によって成果を上げることが出来ることを証明し、教育者たちに理解を得られた講演であった。実際、リトミックは1928年、ジュネーヴの小学校で準公式的に採用され、19のクラスで、正規の科目となっている[30]。

（表１）J＝ダルクローズのジュネーヴ教育学協会における実演内容とその評論

J＝ダルクローズ研究所の生徒	実　演　内　容	ジュネーヴ教育学協会の評論
１年生 (学年の年齢、人数は不明)	・呼吸の運動、柔軟さの練習。 ・瞬間に立ったり座ったりする（即時反応の練習と思われる）。 ・拍子を７拍子まで打つ。 ・目をつぶってピアノ曲の拍子を判断する。 ・即興のリズム課題をすぐさま繰り返す等。	すでに見事にリズムの知識を身につけている。 いとも容易く見える様子でなされていた。
２年生	・１年生と同じエクササイズをさらに正確さをもって行う。 ・もっと複雑な他のエクササイズを演じる。 （具体的な内容は記載されていない）	リトミックを勉強している若人が数々の難関を乗り越えて著しい進歩をみせていた。
３年生 (一人の女子生徒)	・違う幾つかのピアノ曲に合わせて動く。 （調和のとれた、とてもリズミカルな動きの連続によって演じた）	J＝ダルクローズは、我々にこのメソードの成果を示した。 彼と演者は喝采を浴びた。

この記述から、①リトミック教育法を言葉ではなく、実践によりその効果を納得させていること、②早期教育がより容易に、効果的になること、③意志力と注意力の練習により、自己コントロール、自己表現が可能になること、は注目すべき J＝ダルクローズの講演の要点であったと考える。「人間の精神と肉体の間には断絶がある」ゆえに、心身の調和を目指すリトミックの重要性があるからである。

しかし、この報告者である教育者 Willy 女史は、実演した子どもたちの学年が上がるにつれ、複雑なエクササイズを見事に演じて見せたことにより、子どもたちが難しい練習をやり遂げ、乗り越えたからこそ進歩した、という認識に至っている。実演は称賛されたが、「リトミックは難解である」と考えた会員もいたのではないだろうか。次にその会員たちとの質疑応答を挙げて検討する。

３． 質疑応答からみる J＝ダルクローズの見解

ジュネーヴ教育学協会(1916)の「J＝ダルクローズの講演会」には、実演の後、質疑応答の様子が報告されている。J＝ダルクローズは、教育者からの質問にどのように応えていたのだろうか。その応答を以下に記す。

Vignier 女史　：「我々の学校の子どもたちにおいても、このような成果を得るには、どのようなことをしなければならないでしょうか」

J＝ダルクローズ：「教育プログラムは定められているので、そこに変更を加えることは通常は難しいことですが、各々の授業時間を５分短縮することで、一日に 20～30 分を子どもたちの身体適応力向上のためにつくることはできないでしょうか」

「頭脳的に教育されるほど、身体能力と精神の可能性のうちに、ある種の補償を見出さねばならなくなる。だからこそ我々の学校に、このプログラムを行う実験クラスをつくらなければなりません。中学校(Collége)では変声期の間、リズム体操を実施するのが有効でしょう」

Willy 女史　：「リズム体操が他の可能性にも貢献できるのか、この教育に反論を唱える人々はいるのか、などを知りたいのですが」

J＝ダルクローズ：「子どもたちは何に対しても興味をもちますし、運動の練習は発達のおくれた子どもにも有効です。それは全くどんな子どもにも適さないことはありません。よい成果に達するためには、もう少し時間が必要なだけです」[31]

上記の初めの応答に関して、J＝ダルクローズは「学校、音楽、喜び（1915）」の中でも、学校における音楽教育に１日１時間を割くべきであるという見解を示している[32]。まずは、音楽の有用性が確かめられるべきであり、教育は、孤立した個人の育成を目指すも

のではなく、民族の発展や思考、判断の仕方の完成を目指す目的があることを唱いている。それは、J＝ダルクローズが未来の社会を担う、すべての子どもたちの教育の先を見据えて、リトミックの教育に導こうとしているものである。発達の遅れた子どもの教育に関しても同様である。彼は目の不自由な人々の普通教育に関心を向け、療法のための教育領域にもリトミックを発展させている。

また、この報告書によると、J＝ダルクローズは音楽を愛好させ、合唱音楽への嗜好を発達させるために、音楽を伴った祝祭行事の導入を図ることを提案している。なぜならば、このようなイベントの期間は、連帯感情が盛り上がるため（６月の百周年記念祭をさしている）、「教育は感情面の機能の知識も理解しなければならない」[33]と根拠を挙げている。J＝ダルクローズは、初等教育に関わる会員たちに、彼らの生徒たちとともに実体験できる無償のリズム体操のクラスを組織することも提案しており、学校教育や子どもの諸能力を伸長させる教育を目的としたリトミック教育法の活動に精力的であったことが読み取れる。また、J＝ダルクローズはビレー氏(Bieler)の質問に対し、リトミックの授業にピアノは絶対必要というわけではなく、ピアノはハーモニーを出せる点で大変優れた効果があるが、代わりにヴァイオリンや、歌などを使ってもよいと述べている[34]。これらは、リトミックの理解が浅い教師たちに導入が難しいと思われないような提案や、リトミックの重要性を無償のレッスンを開講し、理解を促しているJ＝ダルクローズの尽力を窺うことができる。

この講演内容に関しても、意志力と注意力の練習によって自己コントロール、自己表現が可能になる練習法が披露されている。このことから、J＝ダルクローズがこの実演の練習に教育的効果があると考えていたことがわかる。そして、それがクラパレードからの示唆による練習法であることが考えられる。この学会で行われた実演内容は J＝ダルクローズの『リズム運動[35]』に記載されている練習法である。例えば、拍子をとりながらの歩行練習（９拍子まである）、四肢の独立や抑制のための練習（ハイ、という合図で動きを変化させる）[36]などが記載されている。

第４節　クラパレードの J＝ダルクローズに関する見解から探る共同研究の視点

クラパレードは、ドイツの「教育学アーカイヴ　教育学研究(1914)」において、J＝ダルクローズについて次のように述べている。

リズム体操は、はじめはソルフェージュの勉強の一つの方法であった。ジャック

＝ダルクローズは「子どもが自らさまざまなリズムを自発的につくれば、リズムの意識がより容易くできる」と述べたのはもっともな意見である。しかし、やがてこの練習では、生徒たちはソルフェージュを学んだというだけではなく、彼らの中に姿勢、振る舞いにおける優雅さ、美しさが育っていくことが確信されたのだ[37]。

ここでクラパレードは、ジュネーヴの幾つかの私立学校でリズム体操が導入されていることを記している。それは、J＝ダルクローズが、ジュネーヴのコンセルヴァトワール在任時代にその才能をもって成し得たことであり、顕著な美的感覚の発達をも成し遂げていることを挙げている。

また、クラパレードはジュネーヴ教育学協会発行の「ジュネーヴ教育学協会の活動に関する報告書(1916)」の中で、J＝ダルクローズに関して、およびリズム体操に関して、教育者にとって二つの意味で興味を抱かせるものに違いない、と述べている。その一つは、「音楽をより良く理解するための方法」であり、他方では、「身体についての、また表現手段について、またおそらくは、注意力や欲求についての一般的教養のひとつでもある[38]」と分析している。このクラパレードの見解は、J＝ダルクローズが目指したリトミック教育理念の確信への後押しであり、両者の考えの一致する部分である。

続いて、クラパレードはリトミックに関して、一般的な教育法においても人の行動したことをより理解し、さらに確信を深めるものであるとし、「リトミックは慣例的教育(éducation coutumière)が充分に呼び覚ますことのできないエネルギーの根源を開くものである。リトミックはそれより完璧に、より自己と運動の可能性を明確に意識し行うことにより、個人を高めていくものである[39]」と記述している。

これらの記述から、クラパレードはリトミックに関して、音楽的能力と子どもの諸能力を高めていく教育の両面を兼ね備えた教育法であることを認知し、さまざまな学会、紙面においてリトミックの有用性を提唱していたことがわかる。それは、J＝ダルクローズの考案したリトミックの教育理念が、クラパレードのからの助言の影響や、両者の協力的研究によるところと考えられる。

第５節　J＝ダルクローズの教授法にみられるクラパレードの影響

前述の通り、坂田(1993)[40] はクラパレードからの助言や彼の示す「意識化の法則」が、J＝ダルクローズの教育法のひとつである「反応練習」という方法の導入を決意させたと

述べている。坂田は、反応練習を「音楽上のニュアンスの変化、あるいは指導者の掛声によって、学習者に身体運動の変化を要求するような練習課題[41]」と定義している。ブラック&ムーア(1997)[42]も、教師が生徒の注意を惹くことができなければ適切に教えることはできないというクラパレードの理論に従って、「両者は生徒の注意を集中させ、トレーニングによって注意力を発達させるための音楽ゲームを考案した[43]」と共通した見解を述べている。リトミックにおける反応練習の導入については、J＝ダルクローズの友人であり舞台芸術家のアドルフ・アッピア(Appia,Adolphe 1862-1928)の記述により既存の研究にて論じられている。それは、「クラパレードとの数回にわたる会談で…(中略)…そこから、抑制や神経支配に対する彼の特別な注意が生まれる。じっと我慢して持ちこたえさせ、どんな不意の命令にも身体を動かせるようにし向ける“hop”という掛け声もそこから生まれた。そこから要するに、教育と観察の意識的で論理的な方法が生まれた[44]」というアッピアの言葉に依拠している。

J＝ダルクローズはクラパレードに宛てた書簡(1906)の中で、「筋肉の意識的な伸縮によって神経組織や種要素を活動状態におくこと[45]」について質問をしている。これは、J＝ダルクローズが生徒に身体のあらゆる器官を発達させ、その器官が機能していることを意識させることにより思考の意識、集中力、自分を支配できるような[46]方法を考えていたと読み取ることができる。これは先述した通り、J＝ダルクローズの『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図(1906)』に関するリトミック指導法の科学的根拠を導いたと考えられる。

J＝ダルクローズはリトミック教授法の練習はすべて「集中力を強化すること…(中略)…意識を無意識の中にまで貫通させ、無意識下の諸々の能力を増強し、またその効果としてそれらの能力に敬意を払わせることを目的としている[47]」と記している。そして、彼は身体の自動性(無意識化)を増大させることを通して、子どもの精神がすべての拘束・身体の束縛から解放され、創造性が発達する[48]、ことを目指した。リズム運動は、注意力・集中力の発達や表現力の育成とともに、精神と身体の調和・解放を促すことに繋がっている。

例えば、我々は日常の中で歩く際、意識して足を前に出して歩行することはない。しかし、何か道に障害物がある場合、不測の事態が起こったことに対して注意、観察的意識が働き「意識化」することがある。また、自分の身を守るなどの行為が無意識的に、努力や意志力なしに行われることもある。クラパレードは自身の理論「意識化の法則[49]」の中で、意識化を働かせるには、体験によって注意が促されることを強調する一方、逆説的に、ある行為が自動的になると、それは次第に慣例的に無意識的行為となる「意識の喪失の法則」

があるとする。クラパレードは、この無意識化への移行の段階は、意識化への移行の段階を先行させることが不可欠であるとしている[50]。例えば、子どもの誤りを直す時は、先ずその誤りを意識させることであり、その意志的な注意行動によって意識付けることで、その誤りをおかさない習性、つまり無意識にその習慣がつく、というプロセスである。

クラパレードはリトミックに対して、①単純な欲求の命ずるのに従って苦もなく運動ができるというような、神経組織の柔軟性を高め、個人の身体を制御する力を与える[51]、②生徒たちは、彼らの中に姿勢、振る舞いにおける優雅さ、美しさが育っていく[52]、③身体や表現手段、また注意力や欲求についての一般的教養のひとつである[53]、④より自己と運動の可能性を明確に意識し行うことにより、個人を高めていくもの[54]、という見解を記している。つまり、この教授法に関してクラパレードは、美しいアティテュード(姿勢)の育成、感情や注意力、欲求のための方法、神経組織の柔軟性や、子どもの自己コントロール機能を高める方法に価値を認めている。

J＝ダルクローズの教育内容は、上記のクラパレードの理論やリトミックに対する見解と共通した、注意力や自己制御を喚起するための指導のプロセスを示している。それは、『ジャック＝ダルクローズのメソード(1906)[55]』に記されているレッスン内容から読み取ることができる。なぜならば、この著書はクラパレードに助言を求めた 1906 年の書簡と同年に出版されているからである。その中には、神経によって筋肉に伝えられる個人の意志は、欲求やあこがれを素早く、正確に実行しなくてはならない[56]と記されている。これを獲得する方法として、J＝ダルクローズはＩからＸまでの練習法を挙げている。その中でもクラパレードからの影響があると思われるのは、以下の練習法である。

①運動に関する一般的な練習（呼吸、運動のバランス、筋肉の力と柔軟性）（Ｉ）

バランスの練習の長所は歩行を準備する。それによって、自由に強くリズムをとれるように全ての筋肉に対する統率が学習され、多様な動きを素早く連携させることができる。四肢を強く、柔軟にし、すべての身振りと姿勢の組み合わせを躊躇なく実行できるようにする[57]。筋肉の柔軟性の練習は、頭や肩、腕など全身の筋肉を弛緩、緊張させ、あらゆる方向に動かす。これは個々の筋肉が意志に影響を及ぼすことであり、その動きの独立性を確実にする練習である。

②四肢の独立に関する練習（Ｖ）

四肢の異なる２つ以上の部分を用いて同時に行う練習、または、四肢の異なる２つ以上の部分を用いて同時に行う相反する動きをする練習である。筋肉のより素早い動きをする

ことは彼らの意志によって感受性をより鋭くする[58]。

③自発的な意志を発達させるための練習（VI）

教師によって発せられる《ホップ》という号令によって、即座に動きを入れ替える練習[59]。例えば、教師の合図「オップ」を任意の小節の第１拍上で与え、続く小節の第１拍目から生徒は２小節の間後ろへ歩く練習、合図により左右の拍子打ちを変えたり、跳躍させたりする練習[60]などである。

①は、自分の身体、筋肉を意識させる練習であり、②は運動、拍子、造形に対する四肢の独立性を獲得させる練習、③は即時反応の練習である。これらの練習は、筋肉と中枢神経を円滑にし、集中力や注意力を高めるものである。

クラパレードの「意識化の法則」に当てはめると次のように考えられる。リトミックにおいては、日常で歩行や呼吸といった無意識で行われていることを筋肉の緊張と弛緩の感覚、時間と空間の中でのアゴ―ギク（速さ）、ディナーミク（強弱）等によって意識させていく。そこに別のリズムや動きが同時に、または遅れて与えられると、忽ちいつもの歩行や呼吸が乱れ上手く調整できなくなる。しかし、対比されたリズムや動きを演ずるには、習得した身体の自動性の活用と集中力の発達が必要である。つまり、これは「無意識化」と「意識化」が相互に作用されなければ上手く行動に表現できない練習である。身体の自動性（無意識）の柔軟性は、運動と精神の意識化に寄与し、注意力と集中力を発達させる。これらの練習は体験することにより無意識から意識化へ、そして身体を自動化させることにより意識から無意識化へと移行させている。クラパレードの理論による「意識化」と「無意識化」の両極性のプロセスを、J＝ダルクローズはこれらの練習に適用したといえる。

第６節　J＝ダルクローズのリトミックに対する見解の変遷

J＝ダルクローズの音楽教育、および教育理念に関しては、彼の主著である論文集『リズムと音楽と教育』に記されている。この著書の「序(1919)」において、彼はリトミック誕生の経緯と教育的発展について述べている。J＝ダルクローズは、はじめに、ジュネーヴ音楽院の和声学の教授に就任以来、学生に対して音楽的感覚を向上させるには、身体を音楽リズムに反応させることを通して聴感覚を養うことにあると考えた。さらにその考えは、神経組織を整備し、筋肉と神経を整合させ、心身を調和させることを目指した教育へと変化を見せている。たとえば、1925 年に J＝ダルクローズは、「人体の運動と思考の行為の間に迅速で軽快な伝達組織を作ることは、人間に自由で束縛されない行動をあたえる。

それはその人の個性を素晴らしい方法で強化し活気づける。同時に均整のとれた生命機能の作用に必要な自信を与える[61]」と記している。

彼は身体に秩序を作ることが大切であり、子どもたちは生き生きと、自然で能動的でリズミックな動きを鋭敏に感受する力が大切であることを説いている。J＝ダルクローズは、外界からの刺激に適応し、統制する力を通して生命機能に秩序をもたらす精神と表現との機能を併せ持つところに、「音楽」と「身体運動」を活用する優れた点を見出している。彼は子どもに音楽の技術を教えるのではなく、音楽を好きになるよう導くことを前提としており、子どもの内省力、集中力や想像力などを養うと同時に、想定外の事態に陥った時にも、自己制御し、自分の力を最大限に発揮できる備えを整えることが重要であるとしている[62]。

J＝ダルクローズは読者に対して、論文集『リズムと音楽と教育』の記載の前後に矛盾があろうとも自身の思想の歩みを明らかにする[63]、と述べている。理念の変容・発展は、研究の課程において自然な成り行きであり、柔軟性をもって、より良い方法へと前進していくものであることを示唆している。これは、科学者が実験を通して新しい知見を塗り替えていくように、先人から後人へ、古い考えから革新へと進むプロセスをあえて示すことで、J＝ダルクローズは音楽教育においても、科学者や心理学者と同様な思考をしていることを記している興味深い記述である。

J＝ダルクローズは、リトミックが音楽教育に限定したものでなく、子どもの諸能力に働きかけ、心身の調和を目指していった背景には、第一次世界大戦後の社会の再構築や、技術を重視した音楽教育や学校教育への批判など、さまざまな要因が考えられる。しかし、ジュネーヴ派の新教育運動における代表者の一人、クラパレードの科学的知識は J＝ダルクローズに大きな影響をもたらしたといえる。それは、筋肉組織の神経支配により運動感覚を発達させ、注意力や抑制などの心身の連携を促す目的を持った、身体運動を用いたリトミック指導法の考案である。

第７節　まとめ

クラパレードはリトミックに関して「音楽をより良く理解するための方法」のみならず、「身体や表現手段、注意力や欲求についての一般的教養のひとつ」であり、自己と運動の可能性を明確に意識し行うことにより、個人を高めていくものと捉えていた。また、クラパレードの書簡には、リトミックが自己と他を理解し、運動が心理学的重要性を持ち「リ

ズム練習が心身に大きな教育的影響を与える」と記している。クラパレードのJ＝ダルクローズの教育に関する見解を検討した結果、この教育的影響とは、子どもの表現や注意力、自己コントロール機能などへの効果と考えられる。J＝ダルクローズはクラパレードから生理学的、心理学的知己を得て、リトミックの実際的な現象の支えとして運動が及ぼす教育的役割に関して確信するに至ったのである。

リトミック教授法については、従来ベルヒトルド(マルタン他)の著書に示されたアドルフ・アッピアによる“hop”という掛け声による『反応練習』をJ＝ダルクローズが起草したとする文献、クラパレードの一部の書簡から心理学的助言があったという記載により、リトミック教育法におけるクラパレードからの教育的影響についてたびたび論じられてきた。しかし、本稿ではクラパレードからの影響を次のように考察した。

J＝ダルクローズはクラパレードに宛てた書簡(1906)[64]の中で「神経支配」という言葉の定義について助言を求めている。この「神経支配」という言葉は、これは、同年に出版されたJ＝ダルクローズの著書『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図(1906)』の主要なテーマであった。この著書には、リトミックの練習は全てのニュアンスと運動性の神経支配の度合いによって行われ、動きを支配する「感覚」「判断力」「意志」の３つの能力の遊びを規則づけると記されている。従って、これはリトミックに筋肉組織が持つ特徴を活用する目的を持って執筆されたものであり、クラパレードの助言はこの著作に関する科学的根拠を導いたと考えられる。そして、『ジャック＝ダルクローズのメソード(1906)』には、身体運動により、神経中枢と筋肉組織を結ぶ指導のプロセスが示されていた。これは、注意力や集中力、自己制御を喚起させるための練習法であり、従来の研究で検討されていたクラパレードの「無意識化の法則」理論からの影響を、新しい視点から示すことができた。これらの検討により、クラパレードからJ＝ダルクローズへの心理学的、教育的示唆があったことは明らかである。

また、J＝ダルクローズはクラパレードの主宰する「ジュネーヴ教育協会」の会員となり活動していたことが判明した。クラパレードは、J＝ダルクローズに当時の新しい子どもの視点に立った教育改革、つまり新教育運動への関心を促したといえよう。クラパレードとの協力的研究は、リトミックをクラパレードが科学的に検証し、方法論の検討のみでなく根本原理についても両者の協議により、リトミックが音楽的能力の伸長のみならず、注意力や判断力、自己制御を促す教育学的意義を世に知らしめたといえる。

J＝ダルクローズの活躍した時代は、身体運動や発達の遅れた子どもの教育など、さま

ざまな旧来の教育思考の転換期であった。音楽教育によってJ＝ダルクローズが求めていった教育の全容は多様であり、また発展し続けた教育理念およびその教育法はまだすべて明らかにされていない。次章では、クラパレードと深い繋がりをもつイタリアの医師で教育者のモンテッソーリを取り上げ、さらにJ＝ダルクローズの音楽教育とその教育観の一側面について考察したい。

注、及び引用文献

---

1 フランスの生理学者。著書 *L'Hygiene de l'Exercice,* 1894.（J＝ダルクローズが推奨している。）

2 フランスの生理学者。フォーレルは、J＝Dalcroze,*Coordination et Disordination des mouvements corporels*,Alphones Leduc(Paris),1935. の序文を書いている。

3 Ring Steinmann, *Lexikon der Rhythmik*. Gustav Bosse Verlag, Kassel.1996. pp.50-51.

4 Anon*., Programme et Horaire du Semestre D'Hiver Xme*, Institut des Sciences de l'Education, (Genève,1921-1922) ., n.pag. *Programme Général*, Institut des Sciences de l'Education,s.d ., p.4

5 J＝ダルクローズ研究所図書館(Institut Jaques-Dalcroze Bibliothèque)の図書館司書ソアツィッヒ(Soazig Mercier, bibliothécaire responsableinstitut jaques-dalcroze)とのメール通信により、資料提供、及び文献の探索、研究者や図書館等とのコンタクトの方法、聴き取り等の協力をして頂いた。(2016. 4/18, 25, 7/9, 11, 12/5, 2017. 2/13, 20, 3/13, 4/5, 24, 25, 6/27, 7/3, 5, 7)

6 Bachmann,Marie-Laure, *Dalcroze Today an education through and into music*, Oxford University Press.1991.

7 J・ブラック/S・ムーア共著、神原雅之編訳『リズム・インサイド』、西日本法規出版社、2002 年(1997)

8 坂田薫子「リトミックにおける反応練習—その意義と課題—」、『ダルクローズ音楽教育研究』 Vol.18、1993 年、p.19

9 Bachmann,Marie-Laure, *ibid.*, 1991.p.67

10 J・ブラック/S・ムーア共著、前掲書、2002 年、p.9, 48, 54

11 E・クラパレード、原聡介訳「機能主義教育観」『機能主義教育論』、明治図書出版、1987 年、p.82（児童心理学協会リヨン支部の報告書(1911）、45 頁参照せよ、と原註に記載されている。）

12 坂田薫子「リトミックにおける反応練習—その意義と課題—」、『ダルクローズ音楽教育研究』 Vol.18、1993 年、p.19

13 音楽教育学博士、ダルクローズ音楽学校にて免許取得(1972)、アイオワ大学、ナショナルセンターにおいてボコロジー（声楽の練習の科学と実践）の免許を取得(2011)。現在、声楽等の個人教師。

14 Brotz,Thomas,"Dalcrozian piano pedagogy and cognitive motor learning theory", *Dalcroze Society of America,* Vol.41,No.3, 2015. p.22.

15 J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1912),(Cartre postale du Redbourne Hotel à Londres), Bibliothèque Publique et Universitaire(Genèva), f.187. (以下、B.P.U.と略す。)

16 J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1906), B.P.U., ff.167-168.

17 J-Dalcroze, *La Respiration I'Innervation Musculaire Planches Anatomiques* Sandoz, Jobin & Cie,Editeurs. 1906.（板野和彦訳）

18 J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.6

19 Claparède,(Lettres à J-Dalcroze), "11.Opinions et Critiques sur la Méthode Jaques'Dalcroze" *Le Rythme,* No.12*.,* Le Institut J-Dalcroze, Genèva,1924. p.41.

[20] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(Monte Verita,/Ascona,1909), B.P.U., ff.171-172.

[21] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), SA,(pendant de guerre), B.P.U., f.181.

[22] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), (1907), B.P.U., ff.169-170.

[23] マルタン他、板野平訳『エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社、1988年、p.66

[24] E・クラパレード、原聡介・森田伸子訳「機能主義的教育観」『機能主義教育論』、明治図書出版、1987年、p.134

[25] J-Dalcroze, *La correspondence* (1909), *op.cit.*

[26] T.Flournoy, *Le Rythme,* No.12*.,* (1924)*, loc.cit.,* p.41.

[27] チボル・デヌス、板野平訳「ジャック＝ダルクローズ年譜」マルタン他『エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社、1988年、p.8

[28] E.Willy,"Conférence et Exercices de Gymnastique Rythmique,par M.Jaques-Dalcroze"*Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.7, 1916.p.59. (Claparède *Mélanges* Ⅲ)

[29] Dutoit-Carlir,"Le Créateur de la Rythmique"Émile Jaques'F.Martin,et al. *Dalcroze L'Homme le Compositeur le Créateur de la Rythmique*, La Baconnière,Neuchâtel, 1965, p.332.fn.

[30] マルタン他、前掲書、1988年、p.136

[31] E.Willy,"Conférence et exercises de gymnastique rythmique, par M.Jaques-dalcroze" *Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.7, 1916. P.61.

[32] J＝ダルクローズ 、山本昌男訳『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003 年、p.117

[33] E.Willy, *op.cit.*, 1916. p.61.

[34] E.Willy, *ibid.*

[35] J＝ダルクローズ、板野平訳『リズム運動』、全音楽譜出版社、1970年 (*Jaques-Dalcroze method of eurhythmics Rhythmic Mouvemnt,* 1920)

[36] J＝ダルクローズ、板野平訳『リズム運動』、全音楽譜出版社、1970年、p.28,32 他

[37] E.Claparéde,"Die französische psychologisch-pädagogische Bewegung"*Archiv für Pädagogik Ⅱ.Teil, Die Pädagogische Forschung* , April 1914. pp.256-257.

[38] E.Claparéde,"Repport sur l'activité de la Sosiéte pédagogique genevoise pendant l'exercise 1913-1914",*Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.9, 1916. pp.81-82.

[39] E.Claparéde, *ibid.,* p.82.

[40] 坂田薫子「リトミックにおける反応練習―その意義と課題―」、『ダルクローズ音楽教育研究』 Vol.18、1993年、p.19

[41] 坂田薫子、同上書、1993年、p.18

[42] J・ブラック/S・ムーア共著、前掲書、2002年、p.48

[43] J・ブラック/S・ムーア共著、同上書、2002年、p.48

[44] マルタン他、前掲書、1988年、p.73
Berchtold,Alfred, *Emile Jaques-Dalcroze et son temps*, Collection «Poche Suisse» dirigée par P.O.Walzer, L'Age d'Homme, Lausanne(Suisse), 2000, p.99

[45] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1906), B.P.U., ff.167-168.
[46] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.76
[47] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76
[48] J＝ダルクローズ、前掲書、1970 年、（序文）
[49] E・クラパレード、原聡介・森田伸子訳『機能主義教育論』、明治図書出版、1987 年、pp.128-130
[50] E・クラパレード、同上書、1987 年、pp.129-130
[51] Claparède, “Les innovations les plus importantes du domaine de la pédagogie depuis le début du siècle”Separat-Abdruk aus dem Jahrbuch der Schweizerischen 1914. p.225.
[52] E.Claparéde,“Die französische psychologisch-pädagogische Bewegung”*Archiv für Pädagogik Ⅱ.Teil, Die Pädagogische Forschung* , April 1914. pp.256-257.
[53] E.Claparéde,“Repport sur l'activité de la Sosiéte pédagogique genevoise pendant l'exercise 1913-1914”,*Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.9, 1916. pp.81-82.
[54] E.Claparéde, *ibid.,* p.82.
[55] J-Dalcroze, *Méthde jaques-Dalcroze Gymnastique Rythmique*, Sandos,Jobin and Cie, paris, Neuchtel, Leipzig, 1906（板野和彦訳）
[56] J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.Ⅶ
[57] J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.14-15
[58] J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.4
[59] J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.4
[60] J-Dalcroze, *ibid.*, 1906, p.4, pp.30-31
[61] J＝ダルクローズ『リトミック・芸術と教育』、前掲書、1990 年、p.46
[62] J＝ダルクローズ、前掲書、2005 年、p.xi
[63] 同上書、2005 年、p. x （1919 年執筆）
[64] J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1906), B.P.U., ff.167-168.

第　3　章

モンテッソーリと J＝ダルクローズの身体運動を活用した音楽教育

第 1 節　本章の課題とその背景

マリア・モンテッソーリ(Montessori, Maria 1870-1952)はイタリア建国の年に生まれ、イタリア初の女性医学博士となった人物である。ローマの精神病院で貧困層の知的障がい児者に、感覚的刺激を与えることで知的水準を上げ、1907 年にローマに開設された「子どもの家(casa dei bambini)」という保育教育施設を任された。ここでの教育実践をもとに、彼女は精神医学の見地から教育者として科学的アプローチや感覚的な教育法を展開し、モンテッソーリ・メソードを確立した。そしてこのメソードは世界中に広がっていった[1]。

モンテッソーリが最初の「子どもの家」を開校した同時期、J＝ダルクローズはジュネーヴ音楽院の教授職を辞任し、独自のリトミック教育を推し進めるため、1911 年、ヘレラウ J＝ダルクローズ学院でのリトミック教育を開始した[2]。

J＝ダルクローズの創案したリトミックは、音楽と身体の動きを融合させることで、内的聴取力を養い、音楽的能力だけでなく、心身の調和や人間の内省力を引き出そうとする教育法である。同時代に活躍した二人の教育者は、独自の教育法の中の感覚教育、身体運動を活用した音楽教育に関して､それぞれの著書から共通点を見出すことができる｡また、両者の教育法に至る経緯やその理念に、観察、実践、比較を通し、豊かな人格を養う目的を読み取ることができる。

そこで本章ではモンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育を通して、モンテッソーリ・メソードにおけるリトミックの受容と相互の影響について検討し、この時代の教育における J＝ダルクローズのリトミックの位置づけを明確にすることを課題とする。

モンテッソーリは、音楽教育の領域において「子どもの家」開設時からの協働者であるマッケローニ(Maccheroni, Anna Maria,1876- 1965)や､1923 年からモンテッソーリの誘いに応じて教師となったバーネット(Barnet, Elize Braun 1904-94)らの協力者がいた。マッケローニは、音感ベルなどの教具の制作や音楽活動の実践に寄与し、バーネットはモンテッソーリの理念に基づく「動きとリズム」のためのリズム曲集[3]を出版するなど、音楽教育をより系統的な指導法に導いている。

モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育に関する先行研究には、一部にその関係が示されている文献は多数あるが、管見の限り両者の関係に焦点をあてた研究は見当たら

ない。藤尾（2016)[4]はモンテッソーリの音楽教育について詳細な研究を示している。彼女は J＝ダルクローズとの関係において、モンテッソーリの協力者マッケローニと共にリズム活動の開発に着手したリトミックの教師ギルバート(Gillbert, Jean)の協力がリズム活動開発の一端を担ったと記している。しかし、藤尾はモンテッソーリ・メソードにおけるリズム活動について、J＝ダルクローズの影響を受けているという指摘はあるが、マッケローニとギルバートは音価の違いを弁別し、それに合わせて動くことを基礎とする段階的なリズム活動を考案したと述べている。つまり、モンテッソーリの音楽教育における J＝ダルクローズからの影響については言及されていない。ここに、両者の音楽教育に対する本研究の独自性があると考える。

これを踏まえ、本章ではモンテッソーリの最初の著書『子どもの家における幼児に適用された科学的教育の方法(1909)[5]』 の英訳書である『モンテッソーリ・メソード（1912)[6]』と、その後に執筆された『初等学校における自己教育(1916)[7]』、およびその英訳書(1917)[8]、ベーム(Böhm,1937-)が編纂した『マリア・モンテッソーリの原文と現在の議論(1985)[9]』を中心に、リトミックに関するモンテッソーリの見解を明らかにしていく。

第２節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育

１．モンテッソーリの音楽教育に関する概要

モンテッソーリの音楽教育について詳細に記されている著書に『初等学校における自己教育(1916)』や『わたしのハンドブック(1914)[10]』、『子どもの発見(1948)[11]』などがある。とりわけ『初等学校における自己教育(1916)』には、体系化された音楽教育の内容が記されている。その指導内容は、モンテッソーリの協力者であったマッケローニの共同研究によって、「音階」「読譜・記譜」「長音階」「リズム運動」「音楽的聴取」の５つに分類し示されている。その数十年後に出版された『子どもの発見』では、音楽教育を「リズム運動」「楽器の演奏」「記譜・読譜」の３つの要素に分け記している。このように、モンテッソーリの音楽教育法は段階的に変化を見せているが、その変遷の中で常に彼女の音楽教育の基盤となっていたのは「音楽的聴覚の発達」と「身体運動によるリズム活動」である。

前者はマッケローニが考案した「音感ベル」という教具によって、音楽的音響を聴き分け、音感を養うものである。「音感ベル」は１オクターヴ（13 個）からなる金属性ベルであり、外見上はどのベルも同じに見えるので、音のみでしか区別できないようになってい

る。最初の練習は、２セットのうち１組が音階順に配置されているベルをマレットで鳴らし、もう一方の任意に置かれたベルの中から同じ高さの音を捜す方法である。その後、聴力により音階順(ハ長調)に並べられるようにする[12]。

モンテッソーリは当初、それは音楽的能力の育成が目的ではなく、音を弁別するために行っていたが、この感覚教育はのちに音楽的教育の基礎をつくり、音楽的感情を持って表現するというところまで考えている。モンテッソーリは、「(音楽)教育がなされなければ、どんなに良い音楽を聴いたとしても、永遠に聴く耳を持たない人ばかりになってしまう。偏った音楽しか聴かないような無学な人々の耳は、崇高な音を理解することや知覚することはできない[13]」と述べており、感覚教育とその教具によって、聴取力や音楽的感性を育成することを重視していた。

後者「身体運動によるリズム活動」は、子どもの平衡感覚を養い、動きを自由により確かにさせるために「歩くこと」を基本としている[14]。この活動は「線上歩行」と呼ばれ、モンテッソーリ教育が開始された当初から用いられていた運動教育である。「線上歩行」は床に書かれた線の上を綱渡りのように一歩ずつ足を前に進めていく運動である。

モンテッソーリは子ども(幼児)について「彼らはどのように動かなければならないかを知ることに執着しているようです…(中略)…筋肉や神経という道具はそのとき運動の調整を確立する時期を通るのです[15]」と身体運動が幼児期の教育に重要な働きをすることを述べている。

「線上歩行」は、『初等学校における自己教育(1916)』によると、音楽を伴う表現活動へと発展する。この著書には、教師がピアノを弾くと、子どもたちは自主的に線上に並び、音楽と子どもの動きは反復練習のうちに初歩的な適合が現れ始める[16]と記されている。モンテッソーリ・メソードでは子どもの自主性を重視し、子どもがリズムと調和した動きによって、音楽の理解をし始めるまで教師は何も指導しない。辛抱強く観察し、子どもの自発的な興味や魅了されていく時を見逃さず、その瞬間に曲を演奏して教師が導くと、子どもは増々集中して音楽の拍子などを自ら考え始めるのである[17]。

このように、モンテッソーリは聴取力やリズム運動の練習を基軸として、読譜・記譜、音階などのソルフェージュや、楽器演奏、作曲等の学習へと段階的に発展させていく方法を考案している。

また、モンテッソーリの音楽教育の特徴として挙げられるのは、独自に開発された教具を使用した指導と、静けさを経験させる「静粛」の活動である。

モンテッソーリの音感教育のために考えられた教具には、先述した「音感ベル」のほかに、振って様々な音を識別する「雑音筒」、調性感を養うための「トーンバー」などがある。また、記譜・読譜の練習には、音符がはまる穴のある五線が書かれた板に、表には音名、裏には無記名の円盤を置く教具や、音の出ない小型のキーボードなどが創案されている。これらの教具は、同音の聴き分け(ペアリング)や、違いの認識(グレイディング、例えば、静かな音から大きな音へ並べる、類似と両極端の音の認識)などの方法で感覚教育が進められ[18]、記譜・読譜や歌唱、創作活動の導入として展開される。

一方、「静粛」について、モンテッソーリはほとんどの著書の中で提唱していることから、その活動の重要性を窺うことができる。この「静粛」の練習は、静けさの中で聴く耳を養う目的をもっている。これは命令によって達せられるものではなく、子ども自ら運動の衝動を調整し、騒音と雑音を識別させる練習でもある[19]。

静まり返った部屋で、時計の秒針の音が聞こえ出し、校庭から聞こえる小鳥の囀りなど、さまざまな音が耳に飛び込んでくる。この様な音の世界を体験することで、粗暴な音を徐々に不快に感じるようになり、内面からの優雅な態度が身につくとモンテッソーリは考えている[20]。

『初等学校における自己教育(1916)』では、リズム感覚を与え、リズムによる動作を促すために適しているとして、有名な６曲を選び[21]、その中から８つの動きが記されている。モンテッソーリは、この動きは何度も繰り返されるうちに、子ども達は全てのリズムを感じていくだろうと確信している[22]。例えば、拍子の練習では音階を２、３、４拍子に変えて練習をする。ハ長調の音階をさまざまな拍子で弾くことにより、それを聴いた子ども達は、メロディーの拍や拍子を聴き分け、音価を簡単に理解するのである。さらに、子ども達は教具を併用して、すでに読譜や記譜を身につけているので、五線譜に書かれたものをステップすることや、音階に沿ってリズムを変えてステップをすることに進む。例えば、４/４拍子で、初めの小節は１拍ずつ４拍歩き、２小節目は４拍伸ばすなどである[23]。以下、「線上歩行」の段階的練習の実例を(表１)に示す。

また、晩年の著書『子どもの発見(1948)』では、「リズム運動」「楽器演奏」「記譜・読譜」が取り上げられている。これらは、従来の指導法に基づくものであるが、モンテッソーリは本書で「楽器演奏」の指導を加えている。彼女は、音楽の発達はすばらしい音楽を演奏することであり、グループを集めて音楽会を行う効果や自分の楽器で練習することから音楽的感覚が生じる[24]と述べている。つまり、モンテッソーリは、個人や仲間と音楽

を演奏することにより、音楽に対して傾聴し感動する心が芽生えると考えているのである。

（表１）「線上歩行」の段階的練習と実践例、モンテッソーリ(1916)より

「線上歩行」の段階的練習	モンテッソーリの実践例の記述
① ２つの異なった曲調を交互に聴かせる練習。（1 曲目はゆっくりでレガート、2 曲目がアンダンテでスッタカート）。	① 初めは２曲目に移ったことがわからなくても、1 曲目に戻った時に幾人かの子どもは気付き、その後全員が少しずつ動きを合わせられるようになる。
② テンポ、ニュアンス、エネルギーを感じて身体表現する練習をする。	② レガートとスタカート、スローとアンダンテの曲を聴き分けて動きで表現する。 クレッシェンドでは急いで足を踏み、フォルテでは時々手拍子を導き、カランド（消えるようにだんだん遅く）では静かなマーチに合わせて動きをそっと止めるなどができるようにする。
③ ダンスのメソードを「線上歩行」練習の中に取り入れる。	③ 音楽によって完全な精神の一体感を要求する特別な能力が、線上歩行の中で発達させることができるようになる。
④音楽に合わせて足取りを変える練習。	④ 歩く、走る、リズミカルな動きなどの衝動により子どもは発達していく。

モンテッソーリの音楽教育は、マッケローニとの共同開発によって、ソルフェージュや音楽理論、作曲等の系統的な指導法へと発展した。その後、ウィーンのモンテッソーリ運動に参加していた音楽家のバーネットは、モンテッソーリ・メソード用のリズム曲集を出版し、晩年のモンテッソーリの音楽教育に寄与している[25]。これは民謡やよく知られている作曲家の作品からなる曲集であり、リズムの特徴・表現の自発性、単純性のために選曲されている。バーネットは、その著書の序でJ＝ダルクローズの名を挙げ、「リトミックを学んだ協力者たちは、音楽において一番重要なことはリズムであることを確信した[26]」と述べている。全身を動かし音楽と一致させることで精神の満足を得ることができると考えたバーネットは、ニューヨークのダルクローズ・スクールでも教鞭を執っていた[27]。このことは看過できない点である。また、彼女はレッチワースのセント・クリストファー・ス

クールにてモンテッソーリ教師養成コースを修了している。イギリスの教育思想家であるエンソア(Ensor, Beatrise)が創立したこの新学校のモンテッソーリコースでは、音楽やフランス語は毎日のプログラムのなかにあり、特別クラスの授業としてダンス、リトミックなどが行われていた[28]。

２．リトミックに関する概要

J＝ダルクローズの創案したリトミックは、音楽を通して身体運動をすることにより、音楽的能力のみならず､心身の調和を促し豊かな人格を培う教育法である｡その教育法は、リズム運動（ユーリズミック)、ソルフェージュ、即興演奏から成り立っており、それぞれ各 22 項目の学習法が提示されている[29]。（表２、p.59 参照）

リトミックは、フランス語では「リトミック rythmique」、ドイツ語では「リトミーク rhythmik」、英語では「ユーリズミクス eurhythmics」と称される。「eurhythmics」は、ギリシャ語の「eu(よい)」と「rhythmos(リズム/流れ)」から採用された[30]と言われている。山下(2014)[31]によれば、リズムの語源である「リュトモス rhythmos」はギリシャ語の「レオー rheo＝流れ」という動詞に由来しているが、リデル&スコットのギリシャ語辞典[32]には「規則的に繰り返す何らかの動き」、「音あるいは動きにおける、想定された動き、時間」、「一般的にいって、釣り合い、配列、整列」、「かたち、ものの外形」等と記されていると説明している｡山下は､リズムは元々音楽用語ではなく人間を保持し､つなぎとめ、秩序づけるのであって､「人間を人間であるように成立させること、つまり、人間の流れを捉えてバランスのよいかたちへと割り当てていく働きである」と総括している[33]。この語源にまで J＝ダルクローズが辿っていたかどうかはわからないが、彼はこの教育のシステムをギリシャ語に由来する「リトミック」と名付けた[34]。

J＝ダルクローズは、リトミックの目的は聴覚と発声感覚の相互関係を分析し、聴覚の受容力を伸ばすこと、さらに神経組織のための新しい体操を利用して「全身の機能を使って脳、耳、喉の間に内なる耳とでも称すべきものを創り出すこと[35]」であるとしている。また、美的感情は芸術の初歩的な法則に関する知識と並行して学習の第一歩から着手されるべき[36]であるとして､彼は技能の完成は表現をする歓びを愛好してこそ達成できるとし、音楽的ニュアンスを感受できるようになることを重視している。

しかし音楽的理解ができる子どもであっても生来完璧なリズムを身につけているとは限らない。身体運動の練習への困難や混乱が生じることもある。リズム感や拍子感が欠いて

いることを J＝ダルクローズは「非リズム性」と称し、身体と脳を結ぶ神経組織の迅速な情報伝達を練習することで、身体と脳の働きのバランスを発達させることを考えた。生活の中での自然な動きのリズム（歩行や呼吸など）を筋肉の知覚運動にして、意識的に全身で体得することを、彼は音楽を自由に表現できる身体をつくり、音楽への理解や、音楽をより豊かに表現する手段としたのである。J＝ダルクローズは、リトミックの内容をソルフェージュ、リズム運動、即興演奏の３つの部分に分けて論じている[37]。

① ソルフェージュ

J＝ダルクローズはソルフェージュの学習について、生徒たちにすべての調でのメロディーとその随伴旋律、あらゆる性質のハーモニーとその組み合わせを聴いて、頭の中で思い浮かべ、楽譜で読んですぐに即興で声に出して歌ったり、記譜したり、作曲したりすることを学ばせる[38] と記している。

彼は、耳と咽頭は密接に結びついており、声は聴力に、聴力は声帯にと相互に影響しあう[39]と捉えている。その上で、大切なことは、子どもが音楽を心に感じ取り、音楽において身体が合一すること、つまり耳でしっかり聴くばかりでなく、自分の全存在で聞き入れること[40]であると述べている。J＝ダルクローズは、耳だけでなく、心で音楽を聴き取る力（内的聴取力、楽器等を使用せずとも音を頭で創造できる能力）をつけることで、音程に対する意識が向上すると考えた。

しかし、この練習の先にあるものは自分で音楽を考える能力をつけることにある。J＝ダルクローズは『ダルクローズ・ソルフェージ』(Ⅰ巻－Ⅲ巻)[41]を 1909 年に刊行している。このソルフェージュの練習には、音楽に関わるさまざまな法則（例えば、ニュアンスの法則）が示されており、あとはその法則に従って自分で曲に表現をつけて歌うことを意図して、強弱記号などは付されていない。J＝ダルクローズは、自分で演奏能力を高めていくプロセスを重視しているのである。

また、ソルフェージュの学習内容については、第一に全音と半音の違いを理解させることにある。音階はすべての音から規則的に全音と半音の並びで成り立っている。この区別ができれば、子どもが音階の難しい理論から学ぶ必要がなくなり、音階を理解していくことが容易になる。

第二には、基準音階（ハ長調）の主音である C（ド）の音を短期間で記憶に刻み付けることである。J＝ダルクローズはハ長調音階が感じとることができれば、どんな楽曲の調でも

苦なく識別できる[42]と述べている。

第三に、J＝ダルクローズの音階練習には独特の方法がある。通常はさまざまな主音から始まる音階を理解させていく。しかし、彼のメソードでは C(ド)～ C(1 オクターヴ高いド)の間で、すべての音階を練習する。たとえば、本来ト長調は、 G(ソ)が主音の音階であるが、J＝ダルクローズの方法では、C、D、E、Fis、G、A、H、C、(ドレミ(ﾌｧ♯)ソラシド)と歌う。この方法により、すべての調を限られた声域で歌うことができ、調性感を発達させる利点がある。また、ローマ数字による旋律翻唱や数字譜などを用いて、絶対音感と相対的音感の両側面から、より調性の深い理解を図ろうとする練習もある。

第四は、身体運動によってソルフェージュを練習することである。これはこのアプローチの特徴である。J＝ダルクローズは『ダルクローズ・ソルフェージ』の中で、1000 の旋律と 450 の練習問題を示している[43]が、原著(1909)には「歩行しながら歌う」練習の項目は見当たらない。しかし、『リズムと音楽と教育』第５章「リトミック、ソルフェージュ、即興演奏(1914)」には、歌や発声と歩行・身体的な動き・拍節的表現等と結びつける練習が明示されている[44]。ダルクローズのソルフェージュは、音楽的な声と耳、より鋭敏なリズムの内面的聴取力と表現力、ならびに創作力を生徒の内に生み出そうとする[45] 方法なのである。

② リズム運動

この指導法には後掲の図表(表２)のように、リズム、拍、調性などの理解とともに、自発的意志力、集中力、即時的身体表現を養う多くの練習項目がある。

例えば、「１．筋肉の弛緩と呼吸の練習」では無益な力を取り除く練習、「２．拍節分割とアクセントづけ」では、各小節の１拍目を、足で地面にアクセントづけすることで、拍子の違いを識別する練習が記されている。また、「５．筋肉感覚によるリズムの理解」で J＝ダルクローズは、身体は一定の時間内にエネルギーを持ち自然のリズムを持っているとし、空間の中で身体を動かすことにより、短時間の場合には長時間の場合とは異なる筋肉のメカニズムを使う[46]と述べている。私たちが身体表現する時は、動きの Time(速さ), Space(大きさ), Energy(筋力・強さ)の相互関係が発生する。我々は速い拍手をする時、その手の動きはごく僅かな空間の中で叩いていることを実感する。逆にボールを高く遠くへ投げる時は、強い力と広い空間を必要とする。この相互関係を理解し応用したさまざまな練習をすることで、リズムの表現を自在に行うための能力が養われる。

リトミックの練習法は、他にも即時反応（音楽や言葉の合図で、自己判断し迅速に身体表現する）や拍の分割、複リズム、拡大・縮小、などの項目がある。ある時は、手と足を使い、呼吸を意識し、音楽に合わせて全身で拍子の指揮をしながらリズムをステップするエクササイズがある。これらの練習は集中力を強化し、意識を無意識の中にまで貫通させ、無意識下の諸々の能力を増強し、またその効果としてそれらの能力に敬意を払わせることを目的のひとつ[47]としている。リトミックは音楽の要素の本質を捉えて、身体と感情を調和させ、子どもの内省力を目覚めさせるものであり、それにより音楽に感動する心を育てるようにと考えられている。

③ 即興演奏

即興演奏についてJ＝ダルクローズは、「触覚を援用して、リトミックとソルフェージュの概念を、その音楽的表出という観点で結び付け…(中略)…運動間感覚を目覚めさせ、楽器でメロディー、ハーモニー、リズムを備えた音楽的思考を表現することを学ばせる[48]」と記している。

その内容は、腕、肩、手、指の仕組みや動きを学び、拍子やリズムを変えながら音階を弾くこと、また、メロディーを歌いながら伴奏（和声）をつけて弾く、などである。また、適宜なニュアンスの指示に従い、創作する練習を繰り返し、自由に即興演奏できるようにする[49]学習などがある。（表２）を参照）

即興演奏は、リトミックを指導する教師にはその技術や創造性のセンス、ニュアンスの法則など、質の高い力量が求められる。しかし、子どもに対する最初の器楽教育は、ピアノにちょっと触れさせる、メロディーをさがさせる、即興的に和音進行を作らせるくらいにとどめることが良い[50]と記されている。J＝ダルクローズは、子どもにとって指のテクニックや読譜の疲労はよくあることであり、生涯音楽が嫌いにならないような指導が肝要であると考えている。彼は即興演奏により、自発的な楽器での創作や音楽的表現を鍵盤上でも築くことができるようにし[51]、リトミックとソルフェージュとの調和のとれた総合的な音楽教育が展開されることを提唱している。

以下、表２(次項に表記)は、上記の各 22 項目あるリズム体操、ソルフェージュ、即興演奏の枠組みを項目に沿って示したものである。それぞれの横断的な共通練習により構成されており、体系的な練習プロセスであることが見て取れる。

表２）各 22 項目のリトミックの学習法[52]

	リズム体操	ソルフェージュ	即興演奏
1	筋肉の弛緩と呼吸の練習	首の筋肉と呼吸器の筋肉の収縮と弛緩、肺のリズミカルな運動	筋肉の収縮と弛緩の訓練
2	拍節分割とアクセントづけ	剥製分割とアクセントづけ	拍節分割とアクセントづけ
3	拍節の記憶	拍節の記憶	拍節の記憶
4	目と耳による拍子の迅速な理解	目と耳による迅速な把握	目と耳による迅速な把握
5	筋肉感覚によるリズムの理解	筋肉感覚の強弱による「歌声の高さ」の知覚	筋肉感覚による空間中でのリズム学習
6	自発的意志力と抑止力の開発	自発的意志および抑止の訓練の声への応用	自発的意志と抑制の訓練のピアノ弾奏への応用
7	集中力の訓練。リズムの内的聴取の創出	集中力の訓練。音の内面的聴取の創出	集中力の訓練。内面的聴取
8	身体の均衡をとり、動きの連続性を確実にするための訓練	連続している身体の動きと持続されている発声音との結合。それと中断される動きとの組み合わせ	手の動きと声の動きの連結
9	数多くの自発的作用の獲得と、自発的意思の働きでもってする動作との結合と交替を目的とした訓練	声の自動性の修得と組み合わせ、および自発的意志に基づく発声の働きとの交替のための訓練	自発的意志を働かせて、数多くの自動的作用を習得し、それらを組み合わせ、交替させる訓練
10	音楽的時価の表現	リトミック訓練の声楽表現への応用	リトミック訓練のピアノ演奏表現への応用
11	拍の分割	同上	同上
12	音楽リズムの即時的身体表現	同上	同上
13	動きの分離のための訓練	分離の訓練	動きの分離の訓練
14	動きの中断と停止の練習	休止とフレージングの学習	休止とフレージングの学習
15	動きの遅速の倍加や３倍加	動きの遅速の倍加、３倍速	動きの遅速の倍加や３倍加
16	身体的体位と　（ママ）	身体造形による複リズムと対位法	身体造形的対位法と複リズム
17	複リズム	同上	同上
18	感情によるアクセント付け―強弱法と速度法のニュアンス（音楽的表現）	感情によるアクセントづけ―強弱法と速度法のニュアンス	感情によるアクセントづけ―ニュアンス―表現の法則
19	リズムの記譜の訓練	メロディー、ポリフォニー、和声進行の記譜訓練	リズムの記譜と即興
20	即興表現の訓練（想像力の開発）	即興歌唱の訓練	同上
21	リズムの指揮（他者―ソリストたちや集団の面々―に自分の個人的感覚・感情を速やかに伝達すること）	リズムの指揮（生徒はメロディーを記憶し、指揮する生徒の支持に従いグループの生徒はニュアンスをつける）	リズムの指揮
22	いくつもの生徒のグループによるリズムの実演（音楽的フレージングの手ほどき）	同上	2 台のピアノ（または４手）の即興演奏

３．モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育の比較

モンテッソーリの主著『子どもの発見』には、リズム活動に関して「自分の動作を長い繰り返す練習で支配することを学んでその活動欲に快い面白い仕方で従えるので、満足ししている子どもは楽しく健やかでその落ち着きとその規律で自分の特徴を表す[53]」と記されている。モンテッソーリは、リズム活動によって自己制御や秩序が培われ、幼児が楽しく満足し表現力が養われると考えている。J＝ダルクローズもまた、リズムに関する練習課題として、自分のこと知ること、自分を支配すること、自分の人格性を把握することを挙げている[54]。そして、彼は「子どもは、自分が発揮できる豊かな能力を実際に使ってみようという意欲が生まれ…(中略)…想像力も同じく発達する[55]」とし、精神があらゆる肉体的不安定から解放され、喜びを自覚する[56]と述べている。このように、両者の音楽教育法についての考え方は近似している。さらに、モンテッソーリは、聴覚は感覚の最初の基礎的な訓練でなければならない[57] と示し、聴覚練習は音楽教育に必要であるとしている。これらは聴取力と身体運動を通した音楽教育によって、子どもの豊かな内省力を引き出そうとする J＝ダルクローズのリトミック教育と共通している。

相違点については、①両者のメソードにおける音楽教育の位置づけ、②教具による指導、③即興演奏の学習が挙げられる。

①音楽教育の位置づけに関しては、モンテッソーリ・メソードは、知育（言語、算数など）や道徳、芸術などを総括した教育法であり、どれも欠けてはならない大切な領域であるが、「音楽」はその教育法を完成させるための一部分なのである。一方、リトミックは音楽教育法であり、身体運動を通して音楽を感じ、また音楽を通して身体表現を行うことにより、音楽への理解や愛好、社会性や創造性などを育み、芸術の力をもって豊かで均衡のとれた人間性を目指しているものである。

また、②教具による指導については、モンテッソーリのソルフェージュ指導に独自の教具が使用されている点が大きな違いである。モンテッソーリの音楽教育では、ベルや一弦琴、移動式シロフォンなどの教具を用いて、歌唱、音の聞き分け、音階などを理解させ、並行して身体運動を取り入れている。

③即興演奏は、J＝ダルクローズの音楽教育の重要な学習のひとつであり、モンテッソーリの教育には J＝ダルクローズのような体系的方法はない。J＝ダルクローズの「即興演奏」は、指や手の触覚を通して、ソルフェージュやリトミックの体験を活かし、音楽的思考を表出させることに対し[58]、モンテッソーリの「楽器演奏」は即興的な演奏によるものではなく、

メロディーやハーモニーの学習に結びつけて自己表現へ至らせるものである[59]。

モンテッソーリの独自性は幾つもの教具や楽器を創案し、わかり易い音楽教育を実践したことにある。子どもへの指導も彼女の右腕であったマッケローニやバーネットに委ねられていた。一方、J＝ダルクローズは、さまざまな音楽に関心をよせ、自ら考案した指導法により、自作した音楽や即興演奏を通してリトミック教育を実施している。

両者には音楽の専門性の違いがあるが、楽譜あるいは記号を中心とした技術的指導ではなく、子どもたちの感覚を通して歌い、身体運動を行うことによって、音楽を愛好する心を育て、子どもの内なる能力を引き出そうとしたところに、二人の教育法の類似点を見出すことができる。

第３節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの教育理念

１．モンテッソーリの教育理念

モンテッソーリは貧困地域での長期間保育の必要性を感じ、ローマに「子どもの家」を設立している。森下(2016)[60]は、モンテッソーリ教育の基本が「子どもには生まれながらに自ら成長発達する自己教育力と自然のプログラムとが備わっており、適切な環境と援助が与えられれば自分自身で積極的に成長を遂げる[61]」ことであると述べている。このように、モンテッソーリの教育観は幼児の精神生活や環境への援助・救済と結びついている。

モンテッソーリは「教育は誕生直後から始めなければならない[62]」とし、出生の瞬間から人間の人格が形成される重大さを主張している。彼女は、①幼児は「吸収する心」をもち、②それを幼児期に現れる「敏感期」を見極めて集中させ、③「創造する心」を育てる援助をし、子どもの人格を尊重することを教育理念の中心に置いている。

①「吸収する心」とは、幼児が直接、知識、記憶力、運動などを心的生活の中に吸収できる一種の精神化が彼らの内部で進行することである[63]。幼児は無意識のうちに心理的発育が始まるのであって、習う意識なしに受け入れた印象を心の中で変形させる。やがてそれは、自分のものになった知識として意識するようになるのである。

②「敏感期」とは、幼児期に現れる特別敏感な状態のことであり、子どもが特定のある時期に、興味を示したことに対して特別な感受性を持って吸収することを、モンテッソーリは子どもの成長、発達のための最適な時期と捉えている[64]。つまり、教師は敏感期に対応した環境をつくることによって、子どもが興味の対象に集中することを促してゆく。幼児の言語の獲得は最も明らかな例のひとつである[65]。

③「創造する心」を育てることについて、モンテッソーリは「子どもは、自分自身で表現する方法においてさえ生命を吹き込まれているので…(中略)…自分自身を形作らなくてはならない[66]」と述べている。出生時には何も知らない子どもが、幼児期中には色々なことを覚え、意志をもつようになる。モンテッソーリは創造するのは子どもであるとし、教師は子どもの創造を援助するだけで、幼い存在の人格を認め人格を尊重することであると述べている[67]。

また、彼女によれば、子どもは一つの仕事に惹きつけられ吸収することで、子どもの悪い気質・優秀な性質のすべてが消され新しい性格を創造していく[68]。モンテッソーリは、子どもが本当の人格で自分を正常に組み立てることを「正常化(normalization)」と称している[69]。これは「むずかしい子どもたち」の治療のためにも効力があり、この正常化を通して子どもは社会性や共同性が形成される。つまり、この「正常化」はモンテッソーリ教育理念における社会性への核心的概念といえるだろう。そして、それは、自己コントロールできる自立した子どもの育成を目指していると読み取ることができる。モンテッソーリ教育にとって最も重要なことは、人間の生命の認識が出発点でなければならないことである[70]。つまり、それは新生児や幼児の法則をよく知り、彼らを対象とした教育にある。そこには、彼女の最終的な教育の目標が、生命の援助を起点とした社会と世界の平和にある[71]といえる。

２．J＝ダルクローズの教育理念

『リズムと音楽と教育(1920)』の序文には、J＝ダルクローズの教育に対する基本理念が次のように述べられている。

> 明日の教育が子どもたちに、まず第一に①自分自身をはっきり知るよう、ついで②自分の知識・身体的能力を先輩たちの努力の結果との適切な比較により推量するよう教えること――そして、③自分自身のもつさまざまな能力を評価し、そのバランスを保ち、④それらを個人生活上の必要にも、社会生活上の必要にも役立たせてくれる経験には素直に従うよう導くこと、であることを理解してくれるだろう[72]。
> (①－④は筆者の加筆)

J＝ダルクローズは「①自分自身をはっきり知る」ことを基本理念の第一に挙げている[73]。

これは、「③自分自身のもつさまざまな能力を評価する」という記述とも関わりをもっている。J＝ダルクローズは、「教育とは生徒の持っていない能力を創り出すものではない[74]」と述べ、生徒が自分の中にある能力から最大の利益を獲得できるようにすることに教育の意義を見出している。そのために、J＝ダルクローズは「自分のことを知ること」や「自己評価」できるよう、子どもに学ばせることを考えている。子どもたちは異なった気質をもち、運動相互間の関係にも差異がある。J＝ダルクローズは、人は自分の内面をはっきり見つめ、自らの不純性を認識する努力をせずに身体を純化することはできないと述べている[75]。一方、彼は子どもが身体の動きの自由を獲得し、精神の束縛から解放されたとき、自分を発揮させる喜びを自覚する[76]と記している。これは、自分の人格性を把握させることにより、自己の欠点と闘うこと[77]、それを改善し、自分の能力に敬意を払わせること[78]、つまり、主体的に自己調整をする力と自己肯定感をもつ重要性を説いているものと考えられる。

また、②「自分の知識・身体的能力を先輩たちの努力の結果との適切な比較により推量する」ことは、本質的な人間性に関する営みの継承、および音楽に関することも含め、先人たちの築いた業績について理解し自分の内面へと取り込むばかりではなく、それを他者の人生と共存(調和)させる手段を身に付けることである。それは、④「それらを個人生活上の必要にも、社会生活上の必要にも役立たせてくれる経験には素直に従う」という記述と関連している。J＝ダルクローズはリトミックを経験することにより「強い感動を味わえば、人は自分なりの仕方で、他の人々にそれを伝えたいという欲求を感じる[79]」とし、我々の周りに活力を拡げ、受け取り、与えることが人間性の大原則と提言している。これは子どもの主体性や社会性を高めることが表明されているのであり、音楽的能力を高める教育だけに特化していないことは注視すべき点であろう。

J＝ダルクローズは、教育は神経組織を再教育し、精神の落ち着きや内省力、集中力を養うことであると述べている。また、予想外のことに遭遇したとしても、それを苦なく受け止め、自分の力を最大限に発揮・行動できる備えを整えさせることが肝要である[80]としている。「リズム運動は音楽の基盤となるものであるが、単に音楽学習の準備であるに留まらず、それ以上に一般教養の一体系である[81]」という J＝ダルクローズの言葉からも、リトミックが思考力、判断力、表現力などを育成し、自分で対処できる力を身につけ、社会性や心身の調和を目指す教育であるといえる。

３．モンテッソーリと J＝ダルクローズの教育理念の比較

両者の子ども観には、将来を担う子どもたちが自分自身で判断し、自己決定し、自己実現できるように導く理念に類似性がある。また、方法は異なっても、二人は子どもに内在する能力を引き出し、生理学的見地によって脳から筋肉組織への伝達を促進するために、身体を動かす活動をその教育法に取り入れている。

J＝ダルクローズは音楽的能力の向上から出発しており、一方、モンテッソーリは貧しい人や障がいを持つ子どもの福祉的援助から教育法を生み出している。したがって、モンテッソーリは「生命の援助」や「平和で戦争のない社会」を築くための教育観が根底にあり、幼児期の身体的発達と知的教育を促すことにより、自分自身で精神的成長（判断力や創造力など）をしていくことを目指している。これに対し、J＝ダルクローズは、音楽を通した「リズム」による身体運動から知識や技術にとどまらず、集中力や判断力、創造性、社会性などの育成を目指している。どちらも自分自身で考え、判断し、表現する能力を子どもの時から身に付ける教育を提唱しているが、「生涯の発育期」と呼び、特に幼児期（３歳～７歳）の教育に独特の視点をおいたところにモンテッソーリの教育の基点がある。これに対し、J＝ダルクローズの教育法は幼児教育のみに特化した教育ではない。彼は、「私が推奨する教育は、子どもと同様に大人も対象とする[82]」と、人間の人生における心身のバランスをも教育の目的に含めている。そこに、J＝ダルクローズとモンテッソーリの教育観の差異を見ることができる。

第４節　モンテッソーリと J＝ダルクローズの接点

１．ジュネーヴ、ルソー研究所を介した接点

モンテッソーリと J＝ダルクローズは同時期に独自のメソードによる教育を開始している。モンテッソーリはイタリアを中心に、また J＝ダルクローズはジュネーヴを中心に活躍した。両者は直接的に出会ったという記録はないが[83]、ジュネーヴにおいて、この両者の接点を見出すことができる。

ジュネーヴ出身の心理学者クラパレードは1912年にルソー研究所を設立した。1913年、ルソー研究所の要請によりモンテッソーリ・メソードに関する講習会がジュネーヴで開かれ、その直後、ルソー研究所付属「メゾン・デ・プチ(子どもの家)」が設立されている[84]。この講習会は、３歳から７歳の 12 名の子どもたちがモンテッソーリの教具を使用し、自由に遊ぶ様子を一か月間デモンストレーションし、夕方にはその実験成果の討論が指導者

を中心に行われた。このデモンストレーションは保護者からの強い支持を受け、これを契機に「子どもの家」は開校し、長い間存続したのである[85]。「メゾン・デ・プチ」はモンテッソーリ教育だけではなく、ドクロリー、フレーベルなどの教具も整備され[86]、アガッツィ姉妹の方法などが取り入れられたものであった。また、J＝ダルクローズは、メゾン・デ・プチとルソー研究所においてリトミックの授業を行っていた。従って、両者の教育法が当地で並行して実践されていたことは明らかである。

２．両者の音楽教育の接点

モンテッソーリがイギリスに滞在した 1919 年の 9 月から 12 月にかけて、ラディス(Radice, Sheila)が書いたモンテッソーリに関する一連の記事がある。彼は英国で主に学校教師に向けた週刊紙である“The Times Educational Supplement”の編集者であり、その記事は翌年、*The new children: Talks with Dr.Maria Montessori* (1920)[87]として出版された。本著には数行ではあるがモンテッソーリが寄せた序文があり、著者ラディスとモンテッソーリ、マッケローニ、J＝ダルクローズの四者の興味深い会話と記者の見解が記載されている。この著書から音楽教育に関する記述を取り出し検討したい。

ラディスはマッケローニとともに、子どもたちに律動的な動きを引き出すには音楽を「数える」ことよりも自由に表現し、子ども自身が満足することが重要であるという問題について話している。彼女は「音楽と数えることを混同することは間違っている」[88]と述べ、黒板にダンス音楽の概念を一続きの曲線にして描いたとラディスは伝えている。そして、J＝ダルクローズは、マッケローニとラディスとの議論において同じ事を述べ、手で空中に引かれた一連の曲線によって音楽的リズムの彼の概念を例示したと記述されている[89]。これは、マッケローニと J＝ダルクローズが音楽教育の理念について共感した場面を、記者が目撃した貴重な記述である。

マッケローニは著書(1956)[90]の中で、２つの興味深い見解を示している。ひとつは、彼女は「私の小冊子『メロディーに合わせて歩きましょう』には、子どもの音楽のレッスンと運動を結びつけるのが一つの小さな秘密だと説明している[91]」と記している。もうひとつは、「全ての音の長さは分けられるものではないと私は考えます。一つの全音符は、一つの長い音であって、短い音がつながったものではないのです[92]」と述べ、ギルバートに美的な運動の伴奏になるようなソルフェージュ曲を作曲するよう督励したと記載されている。マッケローニは、音楽教育にとって身体運動が効果的であり、音の長さや音楽のフレーズ

と動きを関連づけており、J＝ダルクローズはフレージングの学習について、運動の開始と終止を結ぶ線の形態を研究すべきであると説いている。しかし、J＝ダルクローズは、長い時価を持つ音符は、短い時価の音符が繋がれて形作られるとして、リトミックでは、音価の統合と分割の両方の課程をもって練習をする[93]。これは空間と時間の関係を感知し、人の心を動かせるニュアンスをもった感情を身につけるためである。多少記述の違いはあるが、二人は音楽のフレーズを数えることによって音楽の表現を損なわないよう、豊かなニュアンス感覚を身につけることを目指す教育観において類似性が認められる。さらにラディスはJ＝ダルクローズから、以下の聞き取りを記している。

> バルセロナの学校の年長の子どもたちは、ダルクローズのメソードを教わっている。ダルクローズは私に、モンテッソーリの教育を受けた子どもたちは、リトミックを身につけることが最も早いと話した[94]。

これは、J＝ダルクローズがバルセロナのリトミッククラスにおいて、モンテッソーリの教育を受けた子どもたちが良い成果を上げていることを証言している記述である。マッケローニは、1916 年にバルセロナのモンテッソーリスクールの責任者となっている。ミラー(Miller, Jean.K.)[95]によると、マッケローニはバルセロナにおいて、リトミックを学んだ教師と（ギルバートを指していると思われる）一緒に教鞭をとり、リズムについてのカリキュラムでは、明らかにダルクローズのメソードの影響を受けていると述べている[96]。これは、ラディスの著書の内容と同様の見解を示すものである。

第５節　モンテッソーリの J＝ダルクローズ教育法に関する見解

１．『モンテッソーリ・メソード』における見解

モンテッソーリの最初の著書『子どもの家における幼児に適用された科学的教育の方法(1909)』の英訳書である『モンテッソーリ・メソード *The Montessori Method*（1912)』には、音楽教育について数項の記述があるだけで、J＝ダルクローズについての記載は見当たらない。モンテッソーリはこの著書の中で、自分の科学的、感覚的教育法がいかに効果的であるか、教育理念やその方法を中心に論述されている。

第９章「筋肉教育—体操」の中で、幼児に必要な体操とは、生理的な運動（例えば歩行、呼吸、会話など）を助け、日常生活における衣服の着脱や、くつを履くこと等を身につけ

る運動を提唱している。この体操練習は３歳－６歳の間に必要であり、主として「歩くこと」に関連していると述べている。また、「線上歩行(walking on the line)」はここでは “The Cord”と記述されており、子ども達が雪の上を歩いて、競うように真直ぐな線を足跡で作ろうとした、と当時の屋外での楽しい運動の様子が記されている[97]。

音楽教育に関しては、「組織的方法によって注意深く指導されなければならない」また、「音楽教育のためには、楽器を創造しなければならない[98]」と記載されている。ベルや単純なハープなどの楽器を使用することは、音響の識別が第一の目的であり、子どもの耳を騒音と音響との区別ができるように教育することを重視している。それに加えてリズム感覚を目覚めさせ、筋肉に静かで調整された運動へ向かう衝動を与えることにある。

子どもの耳を騒音と音響との区別ができるように教育することは、感覚教育が美的鑑識力を習得するという点で価値を持つ[99]として、実質的なしつけに適用し得る方法を提唱している。しかし、重要と思われるのは、ミラノの「子どもの家」の音楽的才能のある指導者に(マッケローニを指していると思われる)幼児の筋肉能力に関する多くの実験をさせ、彼女が「子ども達は音楽的な調べに対して敏感ではなく、しかしリズムにだけ敏感であるのを観察した[100]」と述べた記述である。モンテッソーリは、彼女があるリズムに簡単な振り付けをつけて子どもに行い、リズムが筋肉運動の調整にもたらす影響を研究しようとした、と解説している。この実験の有効性についてモンテッソーリは「この経験は子どもの筋肉感覚を教育することが可能であることを示している[101]」と述べている。これは、筋肉感覚が筋肉記憶と関連して、さらに他の感覚記憶と並んで発達するにつれて、筋肉感覚がより洗練されることを示唆している。

２．『初等学校における自己教育』における見解

『モンテッソーリ・メソード』の執筆後、教具の使用方法が述べられている『私のハンドブック(1914)』の出版に続いて『初等学校における自己教育(1916)』が刊行された[102]。翌年には、この英訳書である *The Advanced Montessori Method-II*(1917)が出版されている。この著書には「音楽」に関する章が約 60 ページにわたり記載され、英訳版(第６章)では、Ⅰ「音階」、Ⅱ「読譜と記譜」、Ⅲ「長音階」、Ⅳ「リズム運動」、Ⅴ「音楽的聴取」の部分から成っている。モンテッソーリは、この章の冒頭で「最初の著書の出版以来、音楽教育に関する考察の進歩が見られた」と記されており、最初の著述から約７年間の教育実践の間に、音楽教育のメソードが変化していったことがわかる。それは、J＝ダルク

ローズの記述が見られることも、その見解の推移を示している。それは、Ⅳ「リズム運動」の章に記されており大変興味深い記述である。

> これらの拍子の分析の練習は、同様に体操のための適用には特に有効である。子ども達は、特にダルクローズの運動を使ったリズム体操をする。それは本当に美しく 2/4、3/4、4/4 などの拍子に見事に合っていた[103] 。

この記述は、モンテッソーリの音楽教育において、リトミックが実践されていたことが示されている一文である。モンテッソーリはリズムや拍子について、聴いたメロディーを記譜させることや、教具で音価を学習させるなど、拍子(measures)の分析を理解させる練習を行っている[104]。彼女は拍子やリズムは音楽教育の重要な要素と考えており、その練習方法として J＝ダルクローズのリズム体操が必要な方法であると考えた。「拍子に見事に合っていた」という彼女の見解は、リトミックが拍子の本質を体現することができ、子どもの成長を促す練習であったことを示している。

モンテッソーリはこの記述に続いて、J＝ダルクローズの運動は音価の違いの感覚が十分に習得されていれば子どもには困難ではないが、この身体運動をするには音価の練習などの準備が先行されなければならないと強調している。この文章により、モンテッソーリ・メソードではリトミックを実践していないという指摘もある。しかし、前節でミラー(1991)やラディス(1920)、その著書の J＝ダルクローズの記述により、実際にリトミックは実践されていたことは明白であろう。国際モンテッソーリ協会（Association Montessori Internationale, Ami)のアーキビスト[105]である ヴァーヘル(Verheul, Joke)に直接質問したところ、「モンテッソーリによる記述では、J＝ダルクローズのリズム体操を実践させていたとあるが、音楽的分野において初期、またはその体系が確立する過程での実践であり、その後マッケローニとギルバートらによって独自の音楽メソードが創られた。これによって、J＝ダルクローズからの影響はあったといえるだろう[106]」という返答を得られた。

この著書において、モンテッソーリは、リトミックの有効性と自分の感覚教具などによるメソードの効果を示しているといえる。最初の著書との見解の変化は『初等学校における自己教育』がイタリアで出版された 1916 年には、すでにリトミック教育は確立され、1915 年、ジュネーヴに J＝ダルクローズ学院を開校していることから、運動によって子どもの発達を促すことができるということを熟知していたモンテッソーリが、音楽教育の身

体運動にリトミック教育法を実践し、その結果に基づいて独自の音楽教育と関連させて活用することに至ったものと思われる。

３．J＝ダルクローズの著述にみられるモンテッソーリ教育

J＝ダルクローズは『音楽と人間』の第一部で、「子どもに身体感覚とそれを言葉に表してみることの密接な関係をわからせようとすれば、モンテーニュが見事にいっているように、『教育は乳母の腕の中で始め』られなければならない。母親たちはモンテッソーリ女史の学校へ行けばいいのではないか[107]」と記している。J＝ダルクローズは、モンテッソーリ教育が乳幼児の教育に重点をおいていることを認知していることがわかる。彼もまた、新しい感覚が子どもたちの心を捉え、好奇心に満ちた時期に聴取力が即座に発達することを発見している[108]。

さらに彼はモンテッソーリについて、彼女はとても示唆的な幼児教育の方法に取り組んでおり、「例えば、女史は教師に時々大きな声で話す以外は話せないようにして、小学生たちには唇の先でいわれる文章を聞くように学ばせる。彼女は小学生たちに目を閉じて床に寝かせ、異なる音を聴き分け、説明が聞けるようにさせる[109]」と、その教育法について述べている。これは、モンテッソーリの教育が感覚教育と生理学的教育を取り入れたメソードであることを、J＝ダルクローズは認知していたばかりでなく、それが有効であることを知っていた。

モンテッソーリの静けさの活動である「静粛」に関しては、幼児であっても動作を即座に止めることや、静寂の中で聴く耳を意識的に持つことは、J＝ダルクローズの教育法における、自己判断によって身体表現をすることに繋がる重要な要素と共通している部分がある。

J＝ダルクローズは『音楽と人間（1945)』の中で、「沈黙は、ときには、とても暗示に富んでいる[110]」とあり、大きな森の中で、揺れる木の葉、まじりあう香り、互いに呼吸する鳥たちの生命が感じられると述べている。これは音楽にも当てはまり、オーケストラが沈黙している間、私達は心の中で、感覚の広がりを感じ、その後の音楽の展開を想像するのと同じように、J＝ダルクローズのいう「休止」は活動との対照でもある。「音楽上の停止の練習は、動きは欠いても生命を欠いているのではない[111]」と述べられているように、動きの準備に繋がる意識を絶やさず、自分を支配することに重点が置かれている[112]。

４．Böhm 編集によるモンテッソーリ「論文集」における見解

『マリア・モンテッソーリの原文と現在の議論(1985)[113]』は、モンテッソーリの論文をベーム(Böhm, Winfried 1937-)が編纂したものである。この中には「音楽」と「身体運動」に関する記述が収められている。

これらは 1916 年の著作以降に執筆されていることから、さらにモンテッソーリの身体運動やリズム体操に関する見解を読み取ることができる文献といえるだろう。特に「運動の組織化による人格形成(1932)[114]」には、「運動」の問題と J＝ダルクローズに関する見解が述べられており、1927 年に大改訂した『子どもの発見』には記されていない晩年のモンテッソーリの考えを読み取ることができる。

モンテッソーリはこの中で、J＝ダルクローズの創作したリズム体操について、次のように記している。それは、①体操を印象深い音楽によって演じること、このやり方(die Gymnastik)は、運動をコントロールされた状態に保つことを問題にしている、②この練習はリズムを分析的に理解することや、このリズムに相応しい運動を要求する。そして、注意深い、極度の緊張(とても強い集中力)が必要である。③単に音の波動によって熱狂(興奮 mitreißen)させるだけでは十分でなく、総合的な内面の活力(能動性)が生き生きとしてこなければならない。④筋肉は音楽の内なる声に従って、忠実に動かなければならない。子どもはただ黙想的に音楽を捉えるのではなく、一人の知的な個人として彼の筋肉を、自分の感じる音楽的感覚の印象に対して厳しく服従させる[115]、に集約される。

モンテッソーリは、このことにより子どもは集中し、それ故に、精神と運動の調和が得られると述べている。彼女もまた、個人が自分の運動を抑制し、目標に達するように注意を向けさせることが重要であり、子どもに正確なコントロール機能のもとで運動を自制させる[116]よう促す考えを示している。これは、J＝ダルクローズのリズム運動と相似する見解である。また、モンテッソーリは次のように述べている。

> そして、その結果は？ そうしたら、よく運動できるということなのか？ そうではなく、厳しさと正確さをもって、この模範的な(klassische)リズム体操を行う者たちは、自分の中に道徳上の変化と知性の明瞭さに、そして一つの新しい生命を感じるに到る。このような人間は、ついに精神力と運動の根本的な統一に達するのである[117]

モンテッソーリは、この調和(精神と運動の一致)は真に重要であり、運動はもっと自由な行動を選び、統制する人間の意志によって支配されなければならないと述べている。そして、彼女は、運動の組織化（身体運動と中枢神経の関係）が子どもの人格の構成に最も深い影響を与えることを、J＝ダルクローズのリトミックと結びつけて記述している。これは、モンテッソーリがリトミックを評価している看過することのできない記述である。

第６節　まとめ

1909 年、最初に刊行されたモンテッソーリの『子どもの家における幼児に適用された科学的教育の方法』は、1912 年に *The Montessori Method* と省略されて英訳書が出され、1929 年にイタリア翻訳の大改訂版、その後 1948 年インドにて『子どもの発見』と題され再々出版されている。この著書には J＝ダルクローズに関する記述が見られるが、最初の著書では J＝ダルクローズの記述はなく、両著書とも音楽教育については数項しか触れられていない。

しかし、1916 年にイタリアで出版された『初等学校における自己教育(1916)』(1917. 英訳、邦訳なし)にある記述から、J＝ダルクローズの身体運動が、拍子やリズムに関する有効な練習として、モンテッソーリの音楽教育の中で実施されていたことが判明した。この実践は短期間であり、その後モンテッソーリの協力者によって独自の音楽教育が考えられたとの指摘がある。しかし、J＝ダルクローズからの影響があったことはベーム(1985)によるモンテッソーリの記述などから明白である。モンテッソーリの音楽教育に協同研究したマッケローニ、ギルバート、バーネットらは、リトミックを学んだ人物であり、マッケローニにおいては対談にて共通した音楽教育観を交わしている。彼らがリトミック教育法に準じてモンテッソーリの音楽教育を作ったといえるだろう。モンテッソーリは、J＝ダルクローズの身体運動は最後には「精神と運動の根本的な統一」に達する見解を示している。これにはさまざまな要因が考えられるが、一つには、モンテッソーリが J＝ダルクローズの教育の有効性を認知し、この教育法の見解が変化していったことを表している。

モンテッソーリは、知的障がいの子どもの救済のためには医学的な治療よりも教育が重要であると考え、音楽教育に関しても初めは言語や数などの感覚教育や、日常生活の作業による運動教育の一部として扱うだけであったが、のちには音楽教育を発展させ、豊かな心とそれを感受する感覚を育てることで、人間形成を成し遂げることを目指すようになった。また、J＝ダルクローズは、モンテッソーリの乳幼児より行う教育の実証的研究から

得た効果を、幼児の迅速に発達する聴覚能力に対する発見を裏付けるものとして、評価していたと考えられる。

モンテッソーリの教育法と J＝ダルクローズの教育法は、その始まりの目的や方法は異なっているが、モンテッソーリ・メソードは次第に音楽教育が子どもの身体運動に重要な影響を与えるとしてリズム活動を導入させ、一方、音楽能力の向上のために創案されたリトミック教育は、子どものさまざまな内省力を引き出す教育へと推移をしており、両者は最終的に、子どもの人間形成に同じく力を注いでいった点において共通している。

新教育運動の近代思潮の中、同時代に活躍した二人の教育者は、当時のさまざまな学問や研究者との出逢いにより、独自の教育法を確立していった。特に、身体運動を活用した音楽教育に関しては、その理念を熟知し自分のメソードにおいて試みたモンテッソーリの実践力は卓越したものであった。

J＝ダルクローズも、乳幼児期の教育の重要性や静粛の活動などに、モンテッソーリ・メソードへの関心を示している。両者の子ども観に共通するものは、音楽を通して身体運動することにより子どもの内省力を引き出し、豊かな人格を培うことを目指していることである。それぞれの教育法が今日まで継承されてきたのは、これらの概念が普遍性をもっているということの証であるように思われる。

注、および引用文献

---

[1] リタ・クレーマー、平井久監訳『マリア・モンテッソーリ 子どもへの愛と生涯』、新潮社、1981 年、p.11.53.144

[2] F.マルタン他、『エミール・ジャック=ダルクローズ』、板野平訳、全音楽譜出版、1988 年、pp.81-84

[3] Barnett,Elise.Braun, *Montessori & music Rhythmic Activities for young children,* New York,1973.

[4] 藤尾かの子「モンテッソーリ教育における音楽教育の内容・方法とその発展」『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』、KTC 中央出版、2016 年、pp.125-126

[5] M.Montessori,*Il metodo della pedagogia scientifica applicato all' educazione infantle nelle casa dei bambini*, Rome,Max Bretschneider, 1909.

[6] M.Montessori,*The Montessori Method*:Scientific Pedagogy as Applied to Child Education in "The Chidren's Houses" with Additions and revisions by the auther, Trans.by Anne.E.Gorge, New York, Frederick A.Stokes company, 1912.

[7] M.Montessori, *L'autoeducazione Nelle Scuole Elementari* ,Ermanno Loescher,Rome, 1916.

[8] M.Montessori,*The Advanced Montessori Method:the Montessoir elementary mat erial,* Trans.by Arthur Livingson, New York,Frederick A.Stokes company, 1917

[9] W.Böhm, M.Montessori, *Maria Montessori Texte und Gegenwartsdiskussion,* Verlag juliusklinkhardt, 1985.

[10] M.Montessori, *Dr.Montessori's own handbook*, Gyan Books Pvt.Ltd, Delhi, India, 1914

[11] M.Montessori, *The Discovery of the Child,* trans.by M.A.Johnstone Madras, Kalakshetra publications, 1948/1909(1st edi.)

[12] モンテッソーリ『世界教育学選集 77 モンテッソーリ・メソッド』阿部真紀子・白川蓉子訳、明治図書出版、1977 年、p.164
最初の著書では、A(Ra)から 1 オクターブ上の A まで、半音刻みのベルの楽譜が記載されているが、『初等学校における自己教育(1916)』には、C(do)を基調とするハ長調の音階のシステムが採用されている。

[13] M.Montessori, *The Advanced Montessori Method-Ⅱ The Elementary Material* , Oxford,England, 1917, p.364

[14] M.Montessori, *ibid.*, 1917, p.341

[15] モンテッソーリ『子どもの発見』、鼓常良訳、国土社、1997 年、pp.104-105

[16] M.Montessori, *L'autoeducazione Nelle Scuole Elementari* ,Rome 1916,p.479.
M.Montessori, *The Advanced Montessori Method-Ⅱ The Elementary Material* , Oxford,England, 1917, p.341

[17] M.Montessori, *ibid.*, 1917, p.342

[18] モンテッソーリ『私のハンドブック』、平野智美・渡辺起世子共訳、エンデルレ書店、1989 年、pp.58-62

[19] モンテッソーリ、前掲書、1997 年、p.164

[20] モンテッソーリ、前掲書、1997 年、p.165
モンテッソーリ、前掲書、1989 年、pp.64-65

[21] M.Montessori,*ibid.*, 1917, p.367
遅い歩調、速い歩調、行進、走る、跳ぶ、静かな歩調、（その他賛美歌）が選曲集から選ばれた楽曲として掲載されている。例えば、行進では"Eagle March"イタリア民謡など。

[22] モンテッソーリ、前掲書、1997 年、p.324

[23] Maria Montessori, *The Advanced Montessori Method-Ⅱ The Elementary Material* 1917, pp.343-345, p.351, pp.355-358, p.367.
[24] モンテッソーリ、前掲書、1997 年、p.328
[25] リタ・クレーマー、前掲書、1981 年、p.431-435
[26] E.B.Barnet, *Montessori&music Rhythmic activities for young children*, Schocken Books, New York,1973, p. v
[27] E.B.Barnet, *The Montessori approach to music for young children*, Montessori Society, New York, 1965, n.pag.
[28] Peter Daniel, Frensham Heights, 1925 -49：A Study in Progressive Education, Lakeside printing Ltd., 1986, p.12
[29] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、pp.80-87
[30] V.H.ミード、神原雅之・板野和彦・山下薫子訳、『ダルクローズ・アプローチによる　子どものための音楽授業』、フクロウ出版、2008 年(1994)、p.2
[31] 山下尚一「リズム概念の語源について―アルキロコスと人間の倫理」、駿河台大学論叢(49)、2014 年、pp. 28-31
[32] *A Greek-English lexicon,* compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, 1940, Oxford, clarendon Press, 1988. p.1576.
[33] 山下尚一、前掲書、2014 年、pp.30-31
[34] 1920 年代半ばに、ドイツのリトミック教師ブレンスドルフ(Blensdorf,Otto 1871-1947)が当時用いられていた「リトミック“Rhythmische Gymnastik”」を「リトミック“Rhythmik”」としたといわれている。フランス語圏では当初、「リズム体操“Gymnastique Rythmique”」と表記されていた。
[35] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、板野平監修、山本昌男訳、全音楽譜出版社、2003 年、p.3
[36] J＝ダルクローズ、同上書、「学校音楽教育改革論」、2003 年、p.27
[37] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.78-87
[38] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.79
[39] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.59
[40] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.59
[41] J＝ダルクローズ、板野平・岡本仁共訳、『ダルクローズ・ソルフェージュ』、第 1 巻-3 巻、国立音楽大学出版部、1978 年。(J-Dalcroze,Méthode Jaques'Dalcroze 3me partie Les gammes et les tonalités,le phrasé et les nuances,1909.)
[42] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.35
[43] R.エイブラムソン『音楽教育メソードの比較』、板野和彦訳、全音楽譜出版、1994、p.97
[44] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、pp.88-92
[45] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.88
[46] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.81
[47] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76
[48] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.79
[49] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、pp.94-98
[50] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.65
[51] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.93
[52] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、pp.80-98
[53] モンテッソーリ『子どもの発見』、1997 年、p.111
[54] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.76
[55] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76
[56] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76

[57] モンテッソーリ、同上書、1997 年、p.160
[58] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.79, 92
[59] モンテッソーリ、前掲書、1997 年、pp.327-328
[60] 森下京子「モンテッソーリ教育の内容・方法の概要と今日の実践が引き継ぐもの」、『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』、KTC 中央出版、2016 年
[61] 森下京子、同上書、2016 年、p.31
[62] モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの心－吸収する心－』、国土社、1974 年、p.10
[63] モンテッソーリ、同上書、1974 年、p.33
[64] モンテッソーリ、鼓常良訳『幼児の秘密』、国土社、1990 年、pp.50-51
オランダの学者デ・フリース(1848-1935)の動物実験による感受期の発見から、モンテッソーリは敏感期を教育の目的に活用した（『幼児の秘密』p.51）
[65] モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの心－吸収する心－』、国土社、1974 年、p.32
[66] Maria Montessori, *The Child in the Family*, Translated by Nancy Rockmore Cirillo, Clio Press, Oxford 1989, pp.19
[67] Maria Montessori, *ibid*., p.20
[68] モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの心－吸収する心－』、国土社、1974 年、pp.213
[69] モンテッソーリ、同上書、1974 年、p.216
[70] M.Montessori, *Das kreative Kind*, Herausgegeben und eingeleitet von Paul Oswald und Günter Schulz-Benesch, Herder, Freiburg 1972, S.11.
[71] M.Montessori, cf., *ibid*., S.15.
[72] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、前掲書、2003 年、p. x
[73] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76
[74] J＝ダルクローズ、板野平訳『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版社、1990 年、p.83
[75] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.75
[76] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.76
[77] J＝ダルクローズ、前掲書、1990 年、p.88
[78] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、p.76
[79] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.77
[80] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、前掲書、2003 年、p.xi
[81] J＝ダルクローズ、前掲書、1990 年、p.87
[82] J＝ダルクローズ、河口道朗訳『音楽と人間』開成出版、2011 年、p.84
[83] L.チョクシー・R.エイブラムソン他、板野和彦訳『音楽教育メソードの比較（2013)』には、モンテッソーリ、オルフといった教育界のリーダーたちもヘレラウを訪れ、リトミックの独創的な教育を学び、観察した(p.108)と記されている。
[84] E.クラパレード、原聡介・森田伸子著訳『機能主義教育論』、明治図書出版、1987 年、p.35
『世界の幼児教育４　北欧・スイス』、岡田正章・川野辺敏監修、日本らいぶらり、1983 年、p.333
ルソー研究所付属幼児童施設「子どもの家(maison des petits)」は、モンテッソーリが設立した「子どもの家(casa dei bambini)」とは異なる教育施設である。
[85] 森田伸子「クラパレードと機能主義」E・クラパレード『機能主義教育論』、前掲書、1987 年、p.35
[86] 森田伸子、同上書、p.37
[87] S.Radice, *The new children; talks with Dr.Maria Montessori,* New York, Frederick A.Stokes Conpany, 1920.
[88] S.Radice, *ibid.,* 1920, pp.86-87.
[89] *Ibid*., pp.87-88.

[90] マッケローニ、夙川幼児教育研究会訳『モンテッソーリ博士との出会い』、エンデルレ書店、1979 年、p.136
[91] マッケローニ、同上書、1979 年、pp.136-137
[92] マッケローニ、同上書、1979 年、pp.136-137
[93] J＝ダルクローズ、前掲書、2003 年、pp.83-84
[94] S.Radice,ibod.,1920, p.91
[95] 教育学博士。モンテッソーリ教育、とりわけ音楽教育分野の実践および研究者として著名。
[96] J.K.Miller, “Dalcroze, Montessori and preschool music teaching.” American Music Teacher 40(6), 1991. p.27.
[97] M.Montessori *The Montessori Method* ,New York ,1912, p.142.
[98] モンテッソーリ『世界教育学選集 77　モンテッソーリ・メソッド』、1977 年、166 頁。
[99] モンテッソーリ、前掲書、1977 年、p.163
[100] モンテッソーリ、同上書、1977 年、p.167
[101] モンテッソーリ、同上書、1977 年、p.167

[102] *L’autoeducazione Nelle Scuole Elementari* (1916)イタリアで初版。 1917 年には、英訳版『モンテッソーリ・メソッドの発展』(*The Advanced Montessori Method-Ⅱ The Elementary Material*) などその他多くの翻訳版が刊行されている。『初等学校における自己教育』という著書の訳は、リタ・クレーマー 1981 『マリア・モンテッソーリ 子どもへの愛と生涯』平井久監による。（p.436）
[103] Maria Montessori,*ibid.*, 1917, p.360.
Maria Montessori *L’autoeducazione Nelle Scuole Elementari* ,Rome, 1916, p.505.
[104] Maria Montessori,*ibid.*, 1917, pp.359-360
[105] アーキビスト(archivist：archivist)とは、永久保存価値のある情報を査定、収集、整理、保存、管理し、閲覧できるよう整える専門職を指す。
[106] J.Verheul, (editor and archivist at Association Montessori Internationale, Netherland), 2017,19/1, 24/1, のメール通信による聞き取りによる。
[107] J＝ダルクローズ『音楽と人間』河口道朗訳、開成出版、2011 年、p.4
[108] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、前掲書、2003 年、p.viii
[109] J＝ダルクローズ、同上書、2011 年、pp.4-5
[110] J＝ダルクローズ『音楽と人間』、前掲書、2011 年、p.13
[111] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、前掲書、2003 年、p.82
[112] J＝ダルクローズ、同上書、2003 年、p.53
[113] W.Böhm, M.Montessori, *Maria Montessori Texte und Gegenwartsdiskussion,* Verlag Juliusklinkhardt, 1985.
[114] Montessori,“Der Aufbau der Person durch die Organisation der Bewegungen”, Böhm,*Maria Montessori Texte undGegenwartsdiskussion,* 1932.pp.77-80.
[115] Montessori,*ibid.*, p.79
[116] Montessori,*ibid.*, p.80
[117] Montessori,*ibid.*, p.79

第　4　章

ベルギーの教育におけるリトミック受容と展開：
ドクロリー・メソードとの関係を中心に

第１節　ドクロリーについて

１．研究の課題と背景

19 世紀から 20 世紀にかけて、ベルギーでは、実験的児童学や教育学研究が新進の医学者や生理学者の関心事となり、とりわけブリュッセルでは障がい児と健常児に関する研究が多くの研究者たちによってなされていた[1]。

ドクロリー(Decroly, Jean-Ovide 1871-1932)は、精神発達の遅れや学習障がい児などを対象とする教育施設を立ち上げたベルギーを代表する精神科医師、心理学者、教育学者である。ドクロリーの教育実践は、子どもの興味を中心とする生活体験重視の教育であった。障がい児教育から出発し、健常児の教育を改革した彼のメソードは世界から注目され、今もなお、ドクロリー研究所(Institut Decroly)は初等教育、障がい児者教育、職業教育など幅広い領域を持つ教育機関として存続している。

J＝ダルクローズと同時代に活躍した教育者との関係を検討してゆく中で、上沼久之亟(うえぬまきゅうのじょう)(1881-1961)らが 1927 年 1 月、欧米教育視察の折に、ブリュッセルのドクロリー学校を訪れていることに筆者は着目した。彼は旧浅草区にあった東京市立の富士尋常小学校の校長であり、ドクロリー・メソードを取り入れた教育を試みていた人物である。上沼は、当時の視察を踏まえ『生活學校　デクロリーの新教育法（1931)』を執筆し、その中にはドクロリーが児童に実施した年間学習内容について記されている。とりわけ、学習案「観察」には幾つかの運動に関する項目（筋肉の力、運動の速さ、運動の正確さ等）があり、運動のリズム実験として「運動のリズム證明･･･見聞きできるあるリズムに従って行ふ（ママ）」[2]という項目が示されている。この一文は、ドクロリー学校でリズム活動、またはリトミックが行われていたことを示唆している。

先行研究については、スイスの歴史家ベルヒトルド（Berchtold, Alfred 1925-）が「ドクロリーは 1901 年、学習、知的発達の遅れた子どものための学校を創立し、直ちにリトミックを信頼した…（中略）…ジャック＝ダルクローズの幾人もの弟子、とりわけテオドール・アッピアとジャン・ビネが彼の施設で教鞭をとった」[3]と述べている。この記述は、スペクター(Spector, Irwin 1934-2016)の『リズム＆ライフ(1991)』[4]、ヴォス(Vos, Staf)に

よる『ベルギーのダンス 1890-1940 年 (2012)』[5]等、多くの著書や論文の根拠として採用されている。しかし、ベルヒトルドはその出典を明らかにしていない。また、J＝ダルクローズ研究所ブリュッセル校の名誉教授 (1976-2004 就任)であったルクレール (Leclerc, Françoise)の「20 世紀のベルギーにおけるジャック＝ダルクローズのリトミック」[6]は、J＝ダルクローズの弟子であるビネ(Binet, Jean 1893-1960)とリスル(Rissler, Jean)がドクロリー学校の子どもたちにレッスンを行なったと述べている。これは、ベルギーにおけるリトミックの歴史を辿ることのできる貴重な文献であるが、その経緯についてはほとんど示されていない。

そこで本章では、J＝ダルクローズとドクロリー、およびドクロリー学校長を務めたドクロリー・メソードの継承者アマイド(Hamaide, Amélie:1888-1970)との関係を取り上げ、ベルギーの教育機関、とりわけドクロリー学校におけるリトミックの受容とその展開について検討し、それが J＝ダルクローズのリトミックに対する捉え方にどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることを目的とする。

研究方法は、ドクロリーによる『学校の改革をめざして *Vers l'Ecole rénovée* (1921)』[7]、『正常でない子ども達の治療と教育 *Le traitment et l'éducation des enfans irréguliers* (1925)』[8]、『全体化機能と教育 *La function de globalization et l'enseignement* (1929)』[9]をもとに、ドクロリー・メソードの理念について検討し、ドクロリーのリトミックに対する見解を読み取っていく。また、ベルギーにおけるリトミックの教育に貢献した J＝ダルクローズの弟子であるアッピア(Appia, Théodore 1887-1980)、ビネ、エックシュタイン(Eckstein,Sergine 1949-1982)らの文献を通して、ドクロリー学校やアマイドの新学校とリトミックの関係について検討し、ベルギーの教育機関における J＝ダルクローズの教育法のあり様の一端を浮き彫りにする。

第 2 節　リトミックとドクロリー・メソードの関係

1．ドクロリーについて

ドクロリーは、ガン(Gand)大学にて医学を修め、1896 年に医学博士号を取得後、ベルリン、パリに留学した。帰国後、ブリュッセルに戻ったドクロリーは、知的障がい児や学習障がい児のための特殊教育施設(Institut d'enseignement spésial pour enfants irréguliers)を 1901 年に自宅に開設し[10]、児童の興味の題材を作業活動によって学習する心理学的教育法「ドクロリー・メソード」を創案した。さらに、ドクロリーは 1907 年、健

常児のための学校「生活による生活のための学校（l'école pour la vie, par la vie)」をブリュッセル郊外のイクセルに創設し[11]、このドクロリー・メソードを用いた学校（通称エルミタージュ校）は、理論と実践において世界的に注目された[12]。第 1 次世界大戦後、ドクロリーはブリュッセル大学の教授となり、児童心理学を講じている。

また、1921 年には、イギリスの教育思想家エンソア（Ensor, Beatrise 1885-1974)らが創設した新教育連盟（New Education Fellowship)[13] 第一回カレー会議で、ドクロリーは自身の学校について講演し、新教育連盟における中心的役割を担った。なお、国際教育連盟の第二回モントルー会議(1923)には、J＝ダルクローズも参加している。

２． ドクロリー・メソードとリトミックの関係

ドクロリー・メソードは、医学的・心理学的児童研究をもとに立案・実施された教育で、「生活による生活のための教育」をスローガンに掲げ、児童の自由と活動を尊重し、環境との全体的関係のもとで児童の精神発達を目指した教育法である[14]。 ドクロリーの考えた子どもに対する基本的学習案は、次の４つの欲求(besoin)を中核として形成されている。それは、食物を摂る欲求、気候不順と戦う欲求、自己防御する欲求、連帯的に活動する欲求（労働、楽しみ、進歩への欲求など）である。具体的な学習活動は、この４つの「欲求」とともに「観察（感覚や直接的経験による習得）」、「連合（間接的習得や経験した過去の記憶の想起）」そして「表現」の三段階の学習プロセスによって実践される。これらを提示した「観念連合教科案」は、ドクロリー・メソードの核心ともいえる見解である。

「表現」に関しては、a. 具体的表現と b. 抽象的表現に分類され、具体的表現には、種々の手工、実用体操、律動体操、いろいろの遊びなどを挙げている。一方、抽象的表現には歌や、読み書きが含まれている[15]。ドクロリーは表現の練習として、具体化と抽象化の両方を用いて学習の統一を考えている。例えば、彼は「母親は子どもにとって細分化されたものではなく、まったくの全体として存在している」[16]と記している。つまり、母親が少しずつ自分を理解させ、自分を模倣させながら子どもへ言語などを習得させること（母親法）は、彼の考える全体法なのである。このように、ドクロリーの総合的カリキュラムの考え方は、全体をおおう原理、部分よりも全体を優先させる「全体化(globalisation)」と称される原理[17]に基づいている。彼は、既存の文法、理科、歴史の学習などに対して各要素から全体に達する方法や、体操・音楽についても部分的要素の寄せ集めの方法で行われていることを、大人の合理的原則に他ならないとし、速く進むという理由でその進行を支配

していると[18]指摘している。彼は全体を一纏めに認知させることにより、子どもの知識習得の苦労を軽減させようとした。

そして、このメソードとリトミックの共通する部分と思われるのは、リズムに合わせて全身運動をすることや経験を基盤とした指導をするところである。ドクロリーは感覚教育に関して、我々の神経中枢を興奮させ、記憶を豊かにするような感覚は外からだけではなく内的な感覚にもあるとし、その感覚は本能的欲求や全身感覚と呼ばれるさまざまな状態からくると述べている[19]。このメソードは感覚教育や運動機能の教育にも全体化の原理が適用されている。そして、彼は、感覚の練習は必然的に多くの運動を含んでおり、律動体操は粗大運動として有効な方法のひとつであると記している[20]。つまり、ドクロリーは全身感覚を使い、全身運動をさせる律動体操の効果を認知していた。

また、ドクロリーは表現分野の教育に対して、芸術教育は技術の習得ではなく一般教養のひとつであり、経験を利用しながら調和のとれた人間性の発達を約束するものと記している[21]。この記述は、子どもたちが経験を通し、自分の欲求を満たそうとすることにより集中力を発揮し、自分をコントロールしていく教育の重要性を意味している。これらは、経験によって子どもの諸能力を発揮させ、心身の調和を目指す J＝ダルクローズの教育理念[22]と通じる部分である。J＝ダルクローズは音楽に正しく芸術的にフレーズをつけ陰影づける能力は「全身体組織の健全さに依存している」[23]と記している。身振りは我々の存在の深さから沸き上がるものであり、一連のニュアンスによって表現され、全身的な大きなリズムを創り出す。J＝ダルクローズは身体の重い部分、腕、足、胴の運動によって生ずるものは身体全体に浸透して作用し、同じようにして身体のすべての部分にそれは伝わっていくと述べており[24]、 全身から身体の末端へと運動が引き起されることを示唆している。これもドクロリーの全体化の手順を踏まえた学習と類似している。

３． ドクロリーの協力者、アマイドについて

アマイドはドクロリーを支えた共同研究者であり、エルミタージュ校で５年間(1912-16)教鞭を執っていた教育者である。その後、グラヴリンヌ(Gravelines)街にある中間学校 C (l'école moyenne C) [25]に奉職し、公立学校の中でドクロリー・メソードを実現するために尽力した。1924 年、彼女はドクロリーの要請でドクロリー学校の校長となる。しかし、ドクロリーの没後退職し、1934 年にドクロリー・メソードを採用した彼女自身の学校「アメリー・アマイド新学校(l'ecole nouvelle Amélie Hamaide)」をイクセルに設立する。多数

の応募者に応えて、彼女は第二の学校を 1947 年に増設した。

また、アマイドは 1922 年に『ドクロリー・メソード *La méthode Decroly*』[26]を出版する。この著書は、ドクロリーと親交の深かったスイスの心理学者クラパレード(Claparède, Edouard 1873-1940）による序文が付されており、ドクロリーの教育を詳細に認めた著作として世界各言語に翻訳されている。アマイド新学校とリトミックとの関わりについては後述したい。

第 3 節　ドクロリーのリトミックに対する見解

１．ドクロリー学校におけるリトミック

前述したように『学校の改革をめざして(1921)』の中には「具体的表現」の教育法案について、実用体操・律動体操（gymnastique utilitare et eurythmique)が列挙されている[27]。

本書で示されている「律動体操（gymnastique eurythmique)」については明確な定義や発案者がはっきりしていない。ブリュッセルの体育高等学校と特殊教育学校の教師マークブリュック(Marquebreucq, Fernand)は「律動体操」は、音楽を伴った動きの練習をするものであり…(中略)…動きの実践において、音楽の影響は重要である」[28]と述べている。また、『ジュネーヴ教育協会会報(1903)』[29]には「律動体操あるいは音楽を伴った体操(gymnastique eurythmique ou gymnastique avec musique)は子どもを律し、子どもたちの集中力を発達させる最も有益なエクササイズとみなされている」[30]という見解が報告されている。したがって、本書における“gymnastique eurythmique” は、音楽を伴った身体運動であると定義できるだろう。そして、ドクロリーは障がい児のさまざまな発達に「律動体操」であるリトミックを有効であると考え、自分のメソードに取り入れたと考えられる。

また、新教育連盟の創立者エンソアは、子どもたちの最も興味を引く対象を日常の関心の中心としているドクロリーの方法は重要であるとし、彼の方法では「モンテッソーリのメソードやフレーベルのメソード、ドルトンプラン、ジャック＝ダルクローズのリトミックなど、日常的な学校で扱われる様々な主題が関連付けられている」[31]と述べている。この記述はドクロリー・メソードにおけるリトミックの導入を示唆しているとともに、新教育家たちの中にその認識があったことを表している。

J＝ダルクローズは、子どもたちのリトミック実演のため 1920 年にブリュッセルを訪れ、ドクロリーとも出会っている[32]。 その時の内容に関しては今のところ確かな資料は見当た

らない。しかしながら、J＝ダルクローズの弟子アッピアがドクロリーの施設でリトミックの活動をしていたことは、以下のジュネーヴの新聞 “La Tribune de Genève (1926)” の記事に見出すことができる。

> …(前略)…1913 年の終わりには、テオドール・アッピアはワルシャワの王立オペラ劇場の呼びかけに迎合することを固辞した。ブリュッセルへ戻った彼は、使命感に燃えた忍耐、根気、情熱、信念の実りを結ばせ、ダルクローズメソードによる研究所を設立した。同時に、ドクロリー博士の医療施設で知的発達の遅れた子どもと関わり、リトミックメソードによって決定的な成果をあげた。また、リエージュの音楽の自由学校で授業を持っていた。一方、彼は J＝ダルクローズの理論の継承者としての立場に留まらず、リトミックメソードを組織的に、より総合的に構築し、より明確なものにすべく発展させることに専心した[33]。

アッピアは、ヘレラウのリトミック学院第一回卒業生(1911)のひとりである。リトミックの学校をパリに創設した(1909)音楽評論家デュディン(Jean d'Udine 1870-1938)と深い関わりを持ち、ブリュッセル音楽院の校長ラッス(Rasse, François 1873-1955)やジュネーヴ音楽院のシェクス(Chaix, Charles 1885-1973)に師事した。その後 1915 年、彼は、ジュネーヴのリトミック研究所が創立された年に、J＝ダルクローズと協力してクラスを開設している。

また、J＝ダルクローズの弟子で作曲家のビネは、1923-1929 年の間ブリュッセルに移住しリトミックを教えていた[34]。彼は 1919 年に渡米し、ブロッホ(Bloch, Ernest 1880-1959)とともにニューヨークにダルクローズ・リズム・スクール (School of Rythmic Jaques-Dalcroze, 現在、Dalcroze School of Music)を創立した人物である。そして、ビネはブリュッセル時代(1926)に J＝ダルクローズへ書簡を送っている。彼はその中で、ベルギー・スイス高官の総会の場で子どもの初歩的な音楽教育やリトミックの基礎の重要性を強調する予定であると述べ、指導に関しては次のように認めている。

> とりわけ輪舞(ronde)の動きをする場合など、(クラスやドクロリー校に来た)子どもたちに歌わせるには相当の労力が必要です。一方、孤児院（歌の機会が多く、フランス人による運営）のかわいそうな 16 人の子どもたちは、私たちの提供した

３曲を数日で覚え、とても上手に歌いました[35]。

この書簡により、ビネがドクロリー学校やリトミッククラスで苦心している様子を読み取ることができる。これは、ビネがドクロリー学校でリトミックを行っていたことを明らかにする資料である。

また、ビネは 1925 年の 10 月に、ブリュッセルで自分を含めた 3 人の教師とともにリトミックの授業を再開している[36]。彼はこのことについて「ドクロリー学校の優れた校長であるアマイド女史の発意のおかげで、リトミックがこの学校で最初の６年間、必修として(週２回)導入された[37]」と記している。さらに追伸として、彼は次のように記している。

> 私は幸運にもブリュッセルの自由大学でドクロリー博士による児童心理学のコースに出席することができ、そこから非常に多くの教えを手に入れることができました。それゆえ、私は専門の学生たちに可能な限り、この問題に関する資料を収集するように勧めます。なぜなら、子どもたちのために従事するためには、彼らがどういう者であるのか、また、彼らは何を考え、彼らが必要としているのは何なのかを知っていなければならないからです[38]。

このビネの記載にある学校とは､イクセルの高等音楽教育学校を指していると思われる。この報告書は 1925 年に発行されているが､アマイドは 1924 年にドクロリー学校の校長に就任しており、彼が心理学やリトミックについて、ドクロリーやアマイドと交流をしていたことを読み取ることができる。そして､「追伸」の記述からは子どもに対する教育についてドクロリーからの影響が窺える。

ドクロリーは『正常でない子ども達の治療と教育(1925)』の中で、子どもの性向の中でも、運動への欲求、遊びや模倣への欲求、自己愛、競争心は、治療の成功への強力な助けになると述べている。そして、子どもの知能の程度や経験を考慮しながら、彼らの進歩、運動能力を上げるために、音楽や律動体操は有効とされている方法であると考えていたことは明らかである。彼は、これらと関連した粗大な運動の実践例として、腕や身体や脚を使う遊びや､大人の仕事をまねた遊びなどを挙げている[39]。 ドクロリーは「粗大な運動（全身を使った運動)」をすることで、運動能力を向上させる「遊び」を音楽や律動体操と結びつけて行っていた。

また、ドクロリーは晩年の著書『全体化機能と教育(1929)』で、J＝ダルクローズについて次のように記述している。

> ジャック＝ダルクローズ式の練習は、これが動きの分析を要求したり、前もって習得されていた全体的な運動整合（両側運動、対称運動、交替運動など）を、それを修正して新しい整合に到達するために、バラバラに解体することを要求したりするという限りにおいて難しい練習である。リズム体操（gymnastique rythmique）がある程度成功するのは、運動分析の能力が発達し、運動整合が習性化しすぎておらず、子どもがこの種の運動を好んでいる（特に女子に顕著な好み）限りにおいてであり、またもちろん、先生の教授の才能次第でもある。スウェーデン体操と同様、リズム体操もどちらかといえば分析的であり、リズムや運動機能の面で特に恵まれている年長の子ども達に向いているといえる[40]。

これらの記述は「体操」の項に記載されている。つまり、ドクロリーは J＝ダルクローズの教育法を「身体運動」の視点から、子どもの教育に有効かどうかを考えている。律動体操は、歩く、跳ぶ、走る、のぼることを子どもが覚える時にそうであったように、子どもが模写するのはひとまとまりであり、動きの細かな分析はもっと後になってから（８歳－９歳以降）試されるべきである[41] と彼は記している。これもドクロリーの「全体化」という理念による見解であろう。

ドクロリーは 1920 年代前半には律動体操を学習案に取り上げ、障がいのある子どもの運動能力に対しても知能や経験を通した有効的な教育法として示している。一方、上記の 1929 年の記述では、リトミックが幼い子どもにとって難しく分析的であると評している。ドクロリーは子どもが教師や母親から音楽や歌を学ぶ時、「子ども自身の動きを、詳細に正確に分析させるのに充分な注意力及び興味を期待することは不可能である[42]」と捉えていた。しかし一方、この記述はリトミックの「全体的な運動整合」の方法について記されており、「運動整合が習性化しすぎていないこと」等を挙げている。ドクロリーは、リトミックが遊戯やダンスなどの決められた動き(習性化)をせずに、自分自身の身体をより適切にコントロールすることができると認識していた。

彼は「感覚練習は必然的に多くの運動を含んでいるものである…(中略)…精神の条件に最も多く応える運動は、その効率、適応性からみて最も実りの多いものであり、同時に、

運動の条件自体を改良していくためにも最も適切なものであろう[43]」と述べている。ドクロリーは、子どもは特別な練習がなくても次第に動きたいという欲求が起こり、自分の努力が有効に働くようにコントロールできるようになると捉えていた。その運動や遊びの欲求を助けるために、音楽やリズムを使った律動体操を有効とし、障がい児への効果はそのまま健常児の教育法に適用されたと考えられる。

そして、アッピアやビネに関する資料によれば、リトミックは実際にドクロリー学校で実践されていた。上記のうち２つの著書は 1925 年、1929 年に出版されており、この時すでにドクロリー学校の校長は､彼の協力者であったアマイドに引き継がれていた｡そして、アマイドはリトミックをドクロリー・メソードによる教育の中で採用していたのである。以下、アマイドが引き継いだドクロリー学校、およびアマイドの新学校とリトミックの関係を、ベルギーでのリトミック受容とともに検討する。

第４節　リトミックとドクロリー・メソードの影響と展開

１．ドクロリーに関する J＝ダルクローズの記述

J＝ダルクローズは「学校音楽教育改革論(1905)」の中で、音楽は「教育者ばかりか、画家、彫刻家、文学者たちからさえも、極めて低い評価しか受けていない[44]」と述べている。彼は、ジュネーヴでの音楽は軽視され、フランスの学校も見せかけであるのに対し、ベルギーとオランダだけがきちんと秩序だった教育システムの重要性をすべて理解している[45]と記している。1908 年の３月 20 日に J＝ダルクローズはブリュッセルから、舞台の稽古が順調に進んでいる内容の手紙を舞台芸術家のアドルフ・アッピア(Appia,Adolphe 1862-1928)に送っている[46]。つまり、J＝ダルクローズは 1908 年にはブリュッセルへ渡航しており、音楽の教育事情も知っていたことがわかる。また、J＝ダルクローズは、教育理論の最近の進歩のひとつは､「教育を生活への関連における肉体的､精神的な諸資質の学習として把えていることである[47]」とし、子どもが肉体的意識を持つことが知られたのは近年のことであると記している。ドクロリーは、子どもの観察によって、個別教育の必要性や一時に身体的、知的、道徳的、職業的問題に対処する必要性を感じ[48]、生活学校において、子どもの欲求と興味を重視した生活総合カリキュラムを実施している。従って、この J＝ダルクローズの記述はドクロリーの教育理論を首肯しているものと思われる。

また、J＝ダルクローズの晩年の著書『音楽と人間(1945)』[49]の中にドクロリーの名前を見出すことができる。J＝ダルクローズは、今では大部分の医者がリトミックをもはや疲

れるものとは考えなくなり、人体の個々の動きに教育的価値を認めているとし、「今は亡き、ブリュッセルのドクロリー博士が発達の遅れた子どもたちにその動きを課し、フォーレル（O.-L.Forel）博士がリトミックの療法的価値に対する素晴らしい論文を書いたことは周知の事実である[50]」 と述べている。この記述は、ドクロリーがリトミックの療法的かつ教育的効果を評価していたことを読み取ることができる注目すべき一文といえるだろう。

２． アマイドの新学校とリトミック

J＝ダルクローズ研究所ブリュッセル校の創立者エックシュタインは「我々のメソードは今世紀初頭[20 世紀]以来、ベルギーを代表する傑出したリトミシャンや経験豊かな音楽家たちを輩出した」と述べ、次の 8 人の名前を挙げている[51]。ビネ(Binet, Jean)、リスレ(Rissler, Jean)をはじめ、ツィンマー(Gabrielle, Zimmer)、ユーリゥ (Huberti, Alponse)、ローゲン(Berthe, Roggen)、ジゴ(Gigot)、ポートレイン(Poutrain, Gaby)、タウフスタイン(Taufstein, Antonia)の面々である。

ドクロリーが 1907 年、健常児のための学校を創立した場所は、ブリュッセルの郊外のイクセルであった。そのイクセルにある「高等教育学院と音楽・演劇学校(Institut des hautes études et de l'école de musicales et dramatiques d'Ixelles)」発行の月刊誌(1908)には、「特別な教育」の欄に「J＝ダルクローズのメソードによるリトミック体操」の講座が記載されている[52]（女性と子どものコース）。上記に記したツィンマー、ローゲン、ジゴも、ソルフェージュなどの担当教師として名前が記されている[53]。それでは、ドクロリー学校やアマイドの新学校でのリトミックはどのようなものだったのだろうか。

それは、ポートレインが 1931 年の『リズム』誌に記した以下の報告書から窺い知ることができる。ポートレインはジュネーヴで 1927 年頃リトミックの免許を取得している。

> 私は今年、私のダルクローズリトミックの授業がより多くの拡がりを見せたことに大きな喜びをおぼえます。私がドクロリー学校の 200 名の子どもたちを教えて 3 年になります。私はそこで２回、午前中いっぱいを使い、６歳から 13 歳まで９つに分けられたクラスを持っています。優れたドクロリー・メソードによって、非常に自発的かつ生き生きとしている子どもたちは、強い関心をもってその成り行きを見守られ、私も彼らの大きな進歩を喜んで認め、その授業に強い関心を持っています[54]。

この記述は、ポートレインが、1928-29 年頃からアマイドが校長を務める(1924-1934)ドクロリー学校でリトミックを教えていたことを明らかにしている。従って、ドクロリーが J＝ダルクローズについて述べている『全体化機能と教育(1929)』を出版した時、リトミックはドクロリー学校で行われていたことになる。ここでは 6 歳からのクラスがあり、ドクロリー・メソードに沿って、年齢や個々の発達に応じたリトミックの段階的な方法が採られていた。

また、タウフスタインは、『リズム(1953)』誌の中でドクロリーについて次のように述べている。

> ベルギーにおいて、ドクロリー博士は、初等教育のための改革者と見なされている。彼の弟子によって指導された、複数の私的な学校で全面的に実施された彼のメソードは、公教育による幾つかの障壁を打ち破るのに成功したといって過言ではない …(中略)…ドクロリーの教育がダルクローズの教育と一致する多くの点を見つけたとしても偶然ではない、特にリトミックの持つ制御された自由の精神と新学校(l'école nouvelle)のそれとは完全に一致している[55]。

さらに、彼女はアマイドの新学校が 1947 年に拡大された際、自分にリトミックの講座を創設するように依頼がきて以来、授業は週一回行われとても大きな成功を収めている[56]、と述べている。タウフスタインは 1948-1954 年の間、アマイドの学校でリトミックを教えていた。アマイドの第二学校における理念や授業内容に関しても、タウフスタインは「第一にひとつの集団内の各子どもの責任感を与えていくという新学校の精神において仕事をするため、アマイド女史と合意している…(中略)…私は子どもたちの団結心、彼らの機転、自己制御、彼らの感覚の記憶（視覚の記憶は特にドクロリーメソ―ドで養われる）を発展させるように努力している[57]」と記している。つまり、そこで行われたリトミックは、ドクロリー・メソードの理念を援用した授業がなされていたのである。

ドクロリーは子どもの自由活動、自発的活動を重視し、子どもは一人で作業をすることを学ぶだけでなく、集団作業に協力できるようにしなければならないと考えていた[58]。 J＝ダルクローズもまた、リトミックのレッスンは音楽の伴奏に合わせて共同で行われるということによって歓びがもたらされるとし、「音楽は子どもたちを 1 つの輪に結ぶ。集合的な生活は個々の有機体を活気づけ…(中略)… 1 つの意志によって生気づけられる[59]」と述

べており、近似した考えの一端が窺える。

練習の内容に関しては、①グループゲームと、２つあるいはそれ以上のグループに同時に対照的な（反対の）動きをさせること、②少人数のグループを大人数に変えたり、またはその逆にすること、③混乱した状態を最短時間で秩序立てた状態にすること、④リーダーを順番に、あるいは、あらかじめ取り決められた音楽の指示に従って交替させたりするものである。(①－④は筆者の加筆)

これらは、集団で行う活動を中心としており、音楽の指示によって動きを変えるなど子どもの注意力や自己制御を促し、自主的な活動を養う指導内容である。そして、彼女は「言うまでもないことだが、私はまた、子どもたちに音楽の基礎を教えること、音楽に対する彼らの関心を引きだすことに没頭した」[60]と述べている。ドクロリーは、興味は注意力のタンクを開き方向づける水門であり、神経のエネルギーを始動させる刺激である[61]と記している。タウフスタインはドクロリー・メソードの理念とリトミックの共通する部分を見出して実践していた。

ドクロリーの教育施設や学校では、リスル、アッピア(1913-)、ビネ(1923-1928 期間中全てとは限らない)、ポートレイン(1928-３年間以上)、エックシュタインが担当し、アマイド新学校においてはタウフスタイン(1948-1954)らがリトミックのレッスンを行っていた（括弧内の年号は実践期間)。つまり、これらの指導者たちは、継続してドクロリー・メソードの教育の中でリトミックを実施していた。

第５節　ベルギーにおけるリトミック教育の発展

ブリュッセルにおいて、J＝ダルクローズの弟子エックシュタインは、1940 年にリトックの学校(プライベート・スクール)を開設する。彼は「1949 年に J＝ダルクローズ研究所を設立、20 年間ユーリゥと協力し、忠実な助手ペティ(Petit, Monique 1982-1997)と 15 年間共に仕事をした[62]」と述べている。彼もまたドクロリー学校でリトミックを教えていたひとりである。この間にリトミックは教員養成の必修科目となり、1975 年には文部省(the Ministry of Culture)から公式な研究所として認定されている。ペティはレナーテ(Peter, Renate)とともに、リラクゼーションと機能的な動き(movement fonctionel)を研究していた。注目すべきは、ペティのもとでダンスや振付け、コレオグラフ（Rhythmische Choreographie)の授業が行われ、その科目が重視されていたことである。この科目はフランスのダンサー、ラベルの『ボレロ』の振付けをしたことで著名なモーリス・ベジャール

(Bejart, Maurice 1927-2007)の影響を受けているといわれている[63]。彼は「私の主な関心は、人々を指導することであり、予備的な指導コースで 1970 年 10 月に開かれるトレーニングセンターを作る方法を見つけた。これは、ジェスチャーを意味する『ムードラ(Moudra)』と呼ばれる肉体的、声楽的、肉体的、音楽的な表現を中心として…(後略)…[64]」と述べ、ブリュッセルにムードラの学校を設立(1970-1988)し、リトミック研究所ブリュッセル校でもワークショップを行っていた。19 世紀のベルギーは識字率を高めるために、歴史の英雄的場面を描いた絵画、パレード、演劇の三つを重要視し、ベルギー国内どこでも制限なく劇場を建設してよいという法律まであった[65]。アマイドもドクロリーの学習案について、「パントマイム劇の各場面で各人に演ずべき部分を与え、その演技に重要性を持たせる[66]」 という活動を挙げている。ブリュッセル校のリトミック領域の拡がりには、ベルギーの歴史や慣習にひとつの背景があるといえるだろう。

第 6 節　まとめ

ドクロリーは、発達の遅れた子どもたちの教育実践により、リトミックが子どもの知能の程度や経験を考慮しながら、彼らの進歩、運動能力を上げるために有効な方法であると考え、その学習の一部に取り入れていた。従来の研究では、ドクロリー学校でリトミックの学習が取り入れられていたことは示されていたが、その経緯や影響に関しては明らかにされていない。本章では、ベルギーで活躍していたリトミック教師たちがドクロリーの教育理念を援用し、「音楽に対する子どもの関心を引きだすこと」や「自主的な活動を促すこと」などに注視しながらリトミックを実施していたことを新たに明らかにすることができた。

ドクロリーは、子どもは次第に動きたいという欲求が起こり、自己コントロールをできるようになると捉えており、特に幼児への分析的な教育のプロセスを疑問視していた。彼はリトミックを「分析的である」とし、子どもが「リトミックの運動を好む」こと、つまり興味を持っていることが上手くいく条件であると記している。リトミックは初めから興味を持つか否かではなく、まず経験をさせた後、喜びや楽しさより興味を抱くようになる教育である。分析的であることや経験を先行させるリトミック教育法に対して、ドクロリーの見解には批判的な指摘がみられる。しかし、ドクロリーは芸術・表現分野の教育に関して、経験を利用しながら調和のとれた人間性の発達を約束するものと述べており、「運動整合が習性化しすぎていない」ことがリトミックの成功の鍵であるとも記している。彼

は習性化せずに思考や判断力を養う練習により、自分自身の身体をより適切にコントロールするリトミックの効果を認識していた。ドクロリーはリトミックの「全体的な運動整合」や「全身を使用した運動」の練習、経験による感覚練習をするところに共感し、自身のメソードにリトミックを適用したものと考えられる。

さらに、リトミックはアマイドによって、ドクロリー学校およびアマイド新学校においても行われていたことが明らかになった。アマイドはドクロリー学校長時代、自身の「新学校」にて、リトミックの授業を数名のリトミック教師に継続して依頼しており、リトミックを有効なものと捉えていた。ベルギーにおけるリトミックは、ドクロリー・メソードの援用によって、当初より障がい児のための教育、あるいは子どもの自己統制や判断力(機転)、集団活動を通して子どもの人間性を発展させる教育として実施されていたのである。これらを援用したリトミックの指導内容を記した資料により、ベルギーのリトミックはドクロリー・メソードからの影響を受けていたといえるだろう。

また、J＝ダルクローズはレッスンのためブリュッセル校へも訪れており[67]、弟子たちによる書簡や報告書(*Le Rythme*)から、ドクロリーの教育を充分に認知していた。J＝ダルクローズはリトミックの療法的価値について、自身の著書(1935)[68]に序文を付した心理学者フォーレルと同列にドクロリーを挙げている。ベルギーでのリトミックの拡がりは、J＝ダルクローズに障がい児教育におけるリトミックの可能性を強く意識させたと考えられる。

ベルギーにおけるリトミックの発展は、ドクロリー・メソードの影響が色濃く投影されている。また、ベルギーでは障がい児教育や幼児教育、初等教育へのリトミックの有用性ばかりでなく、演劇、ダンス、コレオグラフなど幅広い分野においてリトミックが展開されていた。リトミックのもつ柔軟性や発展性は、ベルギーのさまざまな地域の人々に受け入れられ実践されていたのである。

注、及び引用文

---

[1] 斎藤佐和「解説」、ドクロリー、斎藤佐和訳、『ドクロリー・メソッド』、明治図書、1977、pp.247-24.

[2] 上沼久之亟『生活學校 デクロリーの新教育法』、明治図書、1931年、86頁。(A.Hamaide,*La méthode Decroly*(1922)を参照して執筆されたものと考えられる。)

[3] A.Berchtold, *Emile jaques-Dalcroze et son temps*, L'Age d'Homme, Lausanne, 2000, p.185.

[4] Spector, Irwin, *Rhythm and Life :the work of Emile Jaqies-Dalcroze*, Pendragon press,
New York,1991,p.277

[5] S.Vos, *Dans in België 1890-1940*, Leuven University Pres, Louvain,2012, pp.149-150

[6] F.Leclerc,"La Rythmique Jaques-Dalcroze en Belgique au XXE Siècie", *Institut Dalcroze Belgique*, 2016.〈http://www.dalcroze.eu/historique.html〉(2017 年以降は省略されている)

[7] Decroly et G.Boon, *Vers L'École rénovée* , Office de Publicité,Bruxelles,1921.

[8] Decroly, *Le Traitement et L' Éducation des Enfants Irréguliers*, Maurice Lamertin, Bruxelles, 1925,p.28

[9] Decroly,*La Fonction de Globalisation et L'Enseignement,* Bruxelles, Maurice Lamertin,1929.

[10] A.Hamaide,*La méthode Decroly*,Delachaux et Niestlé,Neuchatel,1966, p.13(この施設は 1909 年以降、ブリュッセル郊外のユッケル Uccle に移転)

[11] Hamaide,*ibid.*, pp.13-14

[12] ドクロリー、斎藤佐和訳、『ドクロリー・メソッド』、明治図書、1977、p.4

[13] 1921 年にロンドンを本拠として、新教育の実践家、理論家を結集し設立され、二年に一度、国際会議が行われた。その機関誌『新時代(The New Era)』は国際誌として刊行された。

[14] 岩間浩、『ユネスコ創設の源流を訪ねて—新教育連盟と神智学協会—』、学苑社、2008、p.304

[15] ドクロリー、斎藤佐和訳、「学校の改革をめざして」『ドクロリー・メソッド』、明治図書、1977、pp.21-28

[16] ドクロリー、前掲書、1977、p.79

[17] ドクロリー、前掲書、1977、p.89

[18] ドクロリー、同上書、1977、pp.76-77

[19] ドクロリー、前掲書、1977、p.50

[20] ドクロリー、前掲書、1977、pp.53-54

[21] ドクロリー、前掲書、1977、p.196

[22] J＝ダルクローズ、山本昌男訳『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003 年、pp.76-77

[23] J=ダルクローズ、板野平訳、『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版社、1990、p.45

[24] J=ダルクローズ、同上書、1990、p.56,59

[25] アマイドの恩師カルテール(Carter)が校長を務める下級中等教育機関。初等科が併設されていた。

[26] A.Hamaide,*La méthode Decroly*,Delachaux et Niestlé,Neuchatel,1966.

[27] Decroly et G.Boon, *op.cit.*, 1921, p.30

[28] F.Marquebreucq, *Etude de Gymnastique educative pour enfants anormaux*, Gyan Books PVT.LTD., 2017(First Published 1910),p.36

[29] G.Louis(Bulletinier),“Lack.Résultats obtenus par les travaux manuels sans une ésole d’ensegnement spécial”, *Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise*,1903.
[30] G.Louis(Bulletinier),*ibid.,* p.20
[31] B.Ensor,“Discours de clôture”,*Pour l’ Nouvelle* No.11,1924, p.43
[32] F.Leclerc,“Institut Dalcroze Belgique”,2016,
〈http://www.dalcroze.eu/historique.html〉
[33] Anon,“ Loin du PAYS,Un artiste Genevois en Californie :Théodore Appia”*Journal La Tribune de Geneve*,1926, n.pag.
[34] Schweizerisches Musik-Archiv,“Jean Binet.,né le 17 octobre 1893, mort le 24 février 1960 ： Liste des oeuvres”,*Bibliothèque musicale suisses*,ville de Genève,1970, n.pag.
[35] J.Binet,“lettres autographes à Jaques-Dalcroze”,Bibliothèque de Genève,1926, Ms.mus. 675. f.21-24
[36] J.Binet,“Rapports d'Ecoles”,*Le Rythme* No.15,Genève,1925, p.18
[37] J.Binet,*ibid* ., 1925, p.18.
[38] J.Binet,*ibid* ., 1925, p.18.
[39] Decroly, *op.cit.*, 1925, p.28.
[40] ドクロリー、斎藤佐和訳「全体化機能と教育」『ドクロリー・メソッド』、p.108
[41] Decroly,*ibid.*, 1929, p.49.
[42] ドクロリー、前掲書、1977、p.108
[43] ドクロリー、前掲書、1977、pp.52-53
[44] J＝ダルクローズ、河口眞須美訳『リズム・音楽・教育』、開成出版、2003 年、p.10
[45] J＝ダルクローズ、同上書、p.10
[46] スタンドレ「ジャック＝ダルクローズとアドルフ・アピア」、マルタン他、板野平訳『作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ』、全音楽譜出版社、pp.417-418
[47] J＝ダルクローズ、板野平訳『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版社、1990 年、p.83
[48] ドクロリー、前掲書、1977、p.123
[49] J＝ダルクローズ、河口道朗訳『音楽と人間』、開成出版、2011 年
[50] J＝ダルクローズ、同上書、p.93
[51] S.Eckstein,“Échos de nos Collègues”, *Le Rythme*, Bulletin de l’union internationale des professeurs(以下、U.I.P.D.と表記), Institut Jaques-Dalcroze,Genève,1970, p.29
[52] Anon,“Programme Général des cours”,*Bulletin Mensuelde L’Inastitut des Hutes Études et de L’École de Musicales et Dramatiques d’Ixelles,* No.1-3,Bruxelles, 1908, p.2
[53] Anon,“ VI Enseignement rithmique et plastique, Gymnastique rithmique.Mme Zimmer”,*Revue de l'Institut des Hautes Études et des l'École de Musique et de Déclamation d'Ixelles,* Union de la Presse péricdique belge, 1909, p.33
[54] G.Poutrain,“Rapports d’écoles”, *Le Rythme*,No.31,Institut Jaques-Dalcroze, Genève,1931, p.41
[55] A.Taufstein,“La Rythmique a L’ École Nouvelle”,*Le Rythme* No.8*,* U.I.P.D., 1953, pp.9-10
[56] A.Taufstein,*ibid.*, 1953, p.10

[57] A.Taufstein,*ibid.*, 1953, p.10

[58] アマイド「ドクロリー法」、ドクロリー『ドクロリー・メソード』、前掲書、p.133.

[59] J＝ダルクローズ、前掲書、『リトミック・芸術と教育』、1990、p.97

[60] A.Taufstein, *op.cit.*, 1953, p.10

[61] アマイド「ドクロリー法」、前掲書、p.180

[62] S.Eckstein,"The evolution of eurythmics education in Belgium", *Le Rythme*, L' Institut jaques-Dalcroze Genève,1970, p.29

[63] R.Ring, *Lexikon der Rhythmik*, Gustav Bosse GmbH&Co.KG,Kassel, Brigitte Steonmann, bosso musick paperback 53, 1997, pp.30-31

[64] N.Zand(intormation obtained), "Belgium, A new project of Maurice Bejart's: "Moudra"in an engine shed", *Le Rythme* , Institut Jaques-Dalcroze Genève, 1970, pp.33-34

[65] アンネ・ランデ・ペータス『効率学のススメ』公演プログラム、新国立劇場、2013、p.30

[66] アマイド「ドクロリー法」、ドクロリー『ドクロリー・メソード』、前掲書、p.167

[67] G.Eckhod, "Etoile belbe", *Le Rythme* No.13, Institut Jaques-Dalcroze,1924, p.18

[68] J-Dalcroze, *Coordination et Disordination des mouvements corporels*, Alphones Leduc (Paris), 1935.

第　5　章

ジャック＝ダルクローズの教育理念に関する研究：
新教育連盟における活動を通して

第１節　新教育連盟の成立と『新時代』誌の創刊

本章の課題は、J＝ダルクローズの新教育連盟との関わりに焦点をあて、当時のさまざまな新しい教育改革の実践においてリトミック教育の果たした役割を検討し、J＝ダルクローズの教育観について考察するものである。

未曾有の犠牲を出して終結した第一次世界大戦(1914-18)は、人々に戦争を回避する人格形成や社会建設への道を模索させたといわれている[1]。その時代において、女性初の視学官となり、神智学教育同胞会(Theosophical Fraternity in Education)[2]の事務局長であった教育家で理論家のエンソア(Ensor, Beatrice 1885-1974)は、神智学教育同胞会を母体として、1919 年に「国際連盟(The League of Nations)」を結成する。「国際連盟」の目的のひとつは、第一次世界大戦を経て、次に起こりうる世界の紛争への調停と侵略的行為の禁止であった[3]。

1921 年、エンソアらの呼びかけにより、教育を通して世界平和を促進させる国際的団体を創設する観点をもって、フランスのカレーで新教育家たちの全体会議が行われた。

このカレー会議を皮切りに、さまざまな新しい児童中心主義の教育者たちが参画し、ここに「国際連盟」は名称を改め、ロンドンを拠点に新しい教育における国際的連携を目的とする「新教育連盟(The New (World) Education Fellowship; abbr.WEF.)」が設立された。同年、『新時代（当時は *Education for the New Era. An International Quarterly Magazine for the Promotion of Reconstruction in Education,* 現在 *The New Era*)』誌が発行される。この機関誌（当時は季刊誌）はすでにエンソアによって 1920 年に発刊されていたが、単に新しい教育というだけでなく、戦争のない国際協力の時代のために準備する[4]という動機があった。これは、エンソアらによって編集された英語版のほか、ジュネーヴの心理学者・教育家フェリエール編集によるフランス語版『新時代のために(*Pour l'Ére Nouvelle*)』、ロッテン(Rotten, Elisabeth 1882-1964)編集によるドイツ語版『来るべき時代(*Das Werdende Zeitalter*)』の三誌の協力的連携をもとに国際的機関誌として刊行された。

この国際組織に参集した主要メンバーは、エンソアをはじめ、ドクロリー、フェリエー

ルなど当時世界的に活躍していた進歩的な教育を推進・実践する教育者たちであったが、音楽教育家であるジャック＝ダルクローズも名を連ねていた。

J＝ダルクローズと新教育運動に関する先行研究は多数あり、その中でも教育研究家ボイド(Boyd, William)『世界新教育史(1965)』や長尾十三二『新教育運動の歴史的考察(1988)』の一部に、断片的な記述がある。また、山名『夢幻のドイツ田園都市(2006)』[5]では、ヘレラウにリトミック学院を設立した J＝ダルクローズと新教育者たちの歴史を通して生活改革運動の特質が記されている。しかし、J＝ダルクローズのヘレラウでの活動は1911－14 年の３年間であり、彼の新教育連盟における活動を視座に、教育理念を検討した研究は管見のところ見当たらない。このことから、J＝ダルクローズが考えたリトミックの教育的有用性に対する新たな見解を検討することは、現在のリトミックに対する教育的意義を探る上で、重要な手掛かりになると考える。

また、本章では新教育連盟フランス語圏版の機関誌『新時代のために』に掲載された J＝ダルクローズの記述、及び新教育連盟の第二回モントルー会議における J＝ダルクローズの活動を中心に、心身の調和を目指した J＝ダルクローズの教育観を検討する。さらに、この国際機関の創立に大きな役割を果たしたエンソアの記述や、フェリエールの著書『活動学校 *L'Ecole Active* [6]』 、その他の教育者の文献を取り上げ、彼らの教育に対する考え方やその背景を含め、J＝ダルクローズについての見解や彼らとの関係を繙いていく。

第２節　『新時代』誌に関わった教育者たちと J＝ダルクローズ

１．エンソアについて

エンソアは 1885 年にマルセイユで誕生し、ジェノバ、イギリスに移り住み、ウェールズ地方のカーディフで家政学を学び教員資格を得て、シェフィールド(Sheffield)大学にて家政学を講じた。その後、彼女はロンドン郊外レッチワース[7]のアランデール・スクール(Arundale School, 後のセント・クリストファーズ St.Christopher's)、エディンバラのキング・アーサー・スクール(king Arthur School)などを設立した[8]。これらは田園地域の美しい環境の中で教育する幼児から大学入学までの子どもたちを対象とした学校であった。しかし、1925 年、エンソアは神智学協会の議長職を辞任し、彼女自身によるフレンシャム・ハイツ・スクール(Frensham Heights)を創立する。1934 年には、彼女の夫ロバート・エンソアの死亡を機に、夫が既に移住していた南アフリカへ移り、農場経営を引き継ぎながら地元の教育を受けていない子どもたちのための学校に土地や資金を提供した[9]。

岩間（2008）は 2002 年、エンソアの子孫であるマイケル・エンソア、孫のパトリック・エンソアらにインタビューを行っている。この時の聞取りの中で、岩間は「彼女はフランス語やイタリア語を自由に話せるので国際的な新教育連盟の中心者にふさわしかった[10]」と述べ、『新時代(1975)』誌にエンソア没後一年の記事として 1971 年の WEF ブリュッセル国際会議に寄せられたエンソアの言葉を掲載している。これは彼女の教育観を顕著に表した記述である。

> 私たちが公立学校で行われる教育のあり方に変化をもたらす貢献をしてきたということは、もはや疑うことはできません。しかしながら、私達は自分達が行なってきたことに得意になったり満足したりすべきではありません。なぜならなお、沢山すべきことが残っており、特に教師達が持っている力を、将来の生活者である子ども達の生き方に変え、ひいては社会を変貌するように振り向けていく必要があるからです。さらに競争よりも協力を、そして自分達が行ない、感じ、実行することによって社会をつくり上げるのだという責任感を育てていく必要があるからです[11]。

また、国際事務局長のデビッド・ターナー(Turner, David)が翻訳した、エンソアへのインタビュー記録がある。エンソアはモントルー会議について、「23 日にモントルーで開催された第 2 回会議で、我々は重要な人物に会いました。最も重要なのはユング(Jung, Carl 1875-1961)だったと思う…(中略)…そして、私たちは当時の堅苦しい体操(the stilted gymnastics)ではなく、リズムや動きなどの自己表現を見せてくれるダルクローズに会いました[12]」と述べている。さらに、彼女は J＝ダルクローズについて、フランス語版『新時代のために(1923)[13]』「内なる神 “Le dieu interieur”」の中で次のように述べている。これはモントルー会議に関する記事である。

> 子どもたちの持っている創造的エネルギーを解き放つことができるのは、各々の子どもたちのなかに神が宿っているからです。内なる神は、表現する意識と手段を持っているに違いないことを我々は知っています。我々は、我々の本性が肉体的、感情的、知的、精神的、といったさまざまな側面をあらわすことを現実のものとします。ダルクローズは、我々の肉体存在を阻害してはならず、我々はしなやかで柔軟な、美しく健康で純粋な、魂のさまざまな反映を可能にする身体をもって、我々

の本性の肉体的、感情的、知的な全ての側面を結びあわせ、調和させて、それを通して精神が自らを表明できるような全く完全なるものを形成しつつ、より高められた自己を持たなければならないことを我々に示したのです[14]。

エンソアはモントルー会議においてユングを最も重要視しながらも、多くの参加者の中から J＝ダルクローズを挙げている。第一回のカレー会議では子どもの創造的自己表現の概念について、スイスの教育者ヌスバウム(Nussbaum, Robert)より「子どもは本質的に模倣者」であると提起されたが、会議では子どもに本質的に備わっている芸術性や想像力に関して認めるには至らなかった[15]。これに対し、第二回のモントルー会議で行われた J＝ダルクローズの実演は、その提起に応えるものであったと思われる。エンソアは、リトミックが精神と肉体を調和させ、子どもたちが内省する能力を自ら表現できるようにし、それが人格をより向上させるとして評価している。このことは、J＝ダルクローズの実演によって、子どもには元来潜在する諸能力があり、それを教師が引き出すことで、子どもが主体的に表現できることを皆に知らしめたといえるだろう。

２． ロッテンとニイルについて

ベルリン出身のロッテンは、ドイツのマールブルク大学で哲学博士号を取得し、その後イギリス、ベルギーに渡り、子どもや戦争捕虜のために尽力し世界平和のための仕事に従事した人物である[16]。

彼女はスイスのパスポートを所持していたため（両親がスイス人）、第一次世界大戦の敗戦国であるドイツの関係者がフランス入国を許可されない中、1921 年の新教育連盟カレー会議に参加している。彼女は 1929 年にドレスデンへ転居し、1930 年からヘレラウの女性教育ゼミナールや邦立福祉学校[17]で教鞭を執り、翌年ヘレラウへ移った。これは注目すべき点であろう。女性教育ゼミナールは「新教育的な幼稚園や保育所の確立」を目指し 1926 年に設立された施設である。この施設は人智学に基づいた教育思想を展開したシュタイナー(Steiner, Rudolf 1861-1925)の理論が大きな影響を持っていたといわれているが、そこではリズム体操やダンスが重視されていた[18]。ロッテンはヘレラウから『来るべき時代』誌を発信し続けていたが、ナチズムの影響や弾圧によって、1934 年にスイスに亡命する。その後、彼女はスイスのトローゲンで「ペスタロッチ子どもの村」(Kinderdorf Pestalozzi)を共同設立した[19]。

J＝ダルクローズは第一次世界大戦時(1914)にヘレラウの J＝ダルクローズ学院の閉鎖を余儀なくされジュネーヴへ移転したが、その後、同学院の活動を継続するために立ち上がった弟子・教師たちは「リズム・音楽・身体教育のためのヘレラウ新学校(1919-25)[20]」を祝祭劇場内[21]に開設する。この学校は J＝ダルクローズのメソードだけでなく、身体芸術、労作教育[22]、一般教育の融合が試みられていたことに大きな特徴があった[23]。

また、エンソアが創刊した『新時代』の共同編集者であった[24]イギリスの教育者ニイル(Neill, Alexander Sutherland 1883-1973)は、リトミックと重要な関係がある。彼はエディンバラ大学で英文学を学び、ジャックスという出版社で文筆業に関わった後、フリースクールの先駆的存在であるサマーヒル・スクール(Summerhill School)をイギリスの南海岸の小さな町ライム・リージスに創設した(1924)人物である。ニイルは 1921 年から 1923 年までヘレラウに移住し、ヘレラウ新学校[25]で教鞭を執っていた。彼は３年近く滞在したヘレラウの生活を振り返り「リズムとダンス、すばらしいオペラとオーケストラの音楽に満ちた環境で過ごした[26]」と記している。また、ヘレラウ新学校は国際部門を備えており、その責任者がニイルであった。この学校についてニイルは「我々の国際学校は、ユーリズミクス(リズムとダンス)とドイツ学校、私の経営する外国人学校の部門に分かれていた[27]」と述べている。山名(2006)は、ニイルの最も大きな貢献は「リズム・音楽・身体教育のためのヘレラウ新学校」の中心人物であったベア(Baer-Friesell, Christine 1887-1932)[28]と共同して、リトミックの伝統と一般教育とを結合させようとしたことにある[29]」と述べている。一方、ニイルは『新時代(1923)』の報告において、「私たちはあらゆる害悪に対する万能薬としてリトミックを妄信するわけではない。あらゆる種類の手仕事は同じように重要である[30]」と述べている。つまり、ニイルはリトミックの有用性を認知しながらも、学校がさまざまな領域に対して興味をもつ子どもに適合しなければならないとし、リトミックをあらゆる活動領域のひとつとして位置付けていた。

３．フェリエールについて

３．１．フェリエールについて

フェリエールはスイスのジュネーヴ大学で生物学、心理学、社会学を修めた研究者であり、新教育運動の中心的指導者であった。彼の活動は多岐にわたり、国際赤十字運動にも深く関わっている。日本におけるフェリエール研究の第一人者である古沢は、フェリエールが日本であまり知られていない理由について「フェリエールの活動があまりにも大きす

ぎて、その姿がとらえにくかったからかもしれない[31]」と述べている。

フェリエールは、ドイツの教育学者リーツ(Lietz,Hermann 1868-1919)の勧めにより、イギリスの田園教育舎運動の創始者レディー(Reddie,Cecil 1858-1932)[32] が創立したアボッツホルム・スクールに(1896-97)留学した。帰国後、フェリエールは 1899 年に「国際新学校局(Bureau international des Ecoles nouvelles)」を創設し[33]、翌年、リーツが設立した田園教育舎(Landerziehungsheim)に留学・教育実践をしている[34]。 リーツによるこの寄宿舎は、6 歳から 12 歳までの子どもを対象に、教育は戸外の遊戯や身体的な活動を通して行われるべきであるというレディーの根本理念に沿って行われていたが、とりわけ芸術はレディーのアボッツホルム・スクールよりも重視されていたといわれている[35]。 リーツはフェリエールの教育観に影響を及ぼした人物のひとりである。

フェリエールは、クラパレードが創立したルソー研究所の教授として、1912 年から 10 年間教鞭をとった後、1920 年に彼の代表著作である『活動学校』を出版する。1921 年に設立した新教育連盟に参画し、その機関誌『新時代のために』のフランス語圏編集長（３年間）を務めている。さらに、1924 年ジュネーヴにおいて、国際連盟(League of Nations)、国際労働事務局(ILO)、国際児童援護連合などの幹部たちにより、世界初のインターナショナル・スクール (École internationale ; Internationale de Genève: *ecolint*)が設設された。その時フェリエールは、ルソー研究所の教師メイホファー (Meyhoffer, Paul)が校長を務めるこの国際学校の顧問に、1924 年から２年間、就任している。この学校は、ドクロリーやデューイ(Dewey, John 1859- -1952)、ウォッシュバーン(Washburne, Wolsey 1889-1968)の教育学的後援をうけて、技術的指導を受けることが出来た[36]。また、世界各国の国際機関や外交官などの子どもが１つの国の制度や内容に偏らない世界共通の大学入学資格及び成績証明書を与える国際バカロレアプログラムを採用していた。精神科医の神谷美恵子(1914-1979)はルソー研究所初等学校卒業後、この国際学校に入学している。これに関しては別稿で述べたい。

フェリエールは活動学校について、「自発的で、個人的で、生産的な活動、これが活動学校の理想である[37]」と述べている。彼は『活動学校』のなかで「教育者は、自分の前にいる、あるがままの子どもから出発するのであって、抽象的に認識された、あるいは、実験心理学の統計によって得られた平均による子どもから出発するのではない[38]」と述べている。つまり、それは子ども一人ひとり異なることを前提とする児童中心の教育である。

フェリエールは、生活にめざめる若い人々が自発的に行う、手工活動・社会活動および

知的活動があるがままの生活に彼らを適応させるよう自然と導くことができ、また、導かなければならない活動を接ぎ木することが重要であると考えていた。また、彼は「経験豊かな科学は、古い伝統的な学校に代わって…(中略)…いつか、きっと、子どもの時から学校を嫌いにはけっして思わない人間が現れてくるのを目にするだろう。なぜなら、その人たちは、身体の健康、魂の調和、その精神の開花をこの学校の中で経験するだろうからである[39]」と述べている。J＝ダルクローズも同様に、明日の教育とは何にもまして子どもが自分自身を見出し、その経験を通して自身の力にバランスが得られるようになり、個人と集団の存在に適応することである[40]と述べており、既存の知識を伝えるだけでは不十分であることに言及している。

３．２．J＝ダルクローズとフェリエールの接点

1912 年､フェリエールは J＝ダルクローズのリトミック学院(ヘレラウ)を訪れている[41]。ブライス(2014)は「アドルフ・フェリエールはジャック＝ダルクローズの知己を得、学院の講義を受けた後、リトミックを学ばせるために彼の子どもたちを学院に送った[42]」と記している。両者の記述の時期に矛盾はあるが、確かにフェリエールの娘シュザンヌ(Ferrière, Suzanne 1886-1970)は、ヘレラウの J＝ダルクローズ学院のディプロムを取得した第 1 回の卒業生であり、テオドール・アッピアやハラルド・ドールンなどとともに門下生名簿に記載されている[43]。シュザンヌ・フェリエールは、1915 年にマルグリット・ヒートン(Heaton, Marguerite)とともに、ニューヨーク(９イースト 59 番街、ニューヨークのダルクローズ・スクールの前身)でクラスを開いた人物である。その後、1918 年に学校を退いてスイスに戻り、国際赤十字社の仕事に尽力した[44]。したがって、彼女の父親であるフェリエール(F.Adolphe)はリトミックに関して認知していたと推測できる。

J＝ダルクローズの著書『ダルクローズメソード・プラスティックアニメの練習 第 1 巻(1916)[45]』には、表紙に「シュザンヌ・フェリエールとの協力による練習と原理の分類[46]」と記載されている。つまり、彼女はこの著書の実質的な共著者といえよう。また『リズムと音楽と教育(1920)』の第 11 章「リトミックと身体運動(1919)[47]」のタイトルにも「シュザンヌ・フェリエールに捧げる」と付してある。この著書に集約されている論文には、第３章にはニーナ・ゴルター、第 7 章にはアルベール・マルシュ、第 12 章にはパーシィ・インガム、第 13 章には、ジャック・シュヌヴィエールに捧げられている。これは J＝ダルクローズが彼女を弟子としてではなく、リトミックの教育者同士としてその存在を捉えて

いたことが窺える。

また、フェリエールとJ＝ダルクローズの接点はルソー研究所にある。J＝ダルクローズは、ルソー研究所を創立したクラパレードと親交があり、研究所とその付属施設「メゾン・デ・プチ」でリトミックを行っていた。つまり、ルソー研究所の教授であったフェリエールとの交流も必然的にあったといえる。これを裏付けるものとして、J＝ダルクローズがフェリエールに宛てた手紙がある。ここには「ご親切な手紙をありがとうございます。多分、どれほどあなたは私に手紙の模範を示してくださったことか、私は助手にそれをタイプするように頼み、あなたにその写しを送れるでしょう…(中略)…私はアルフレッド・ビネ協会に入ることを申し出たいと思います。連絡先は委員会のどなたに聞くべきでしょうか？[48]」と綴られている。アルフレッド・ビネ協会(学会)は、フランスの心理学者ビネ(Binet, Alfred 1857-1911)[49]らが中心に活躍した「子どもの心理学的研究のために自由協会(Société libre pour l'étude psychologique de l'enfant)」を1917年に改名した学会である。これにより、J＝ダルクローズがさまざまな心理学者たちとの交流を持ち、リトミックが子どもの人格に教育的役割を果たす教育法であることを[50]、心理学や教育学の学会や新教育連盟への参加により拡げていこうとしていたことがわかる。以下、表1に新教育連盟会議(1922-29年)の経過を示す。

（表１、新教育連盟会議一覧表、初回から第５回まで）

開催年	開　催　地	会議のテーマ
1922年	第１回 カレー会議	子どもの創造的自己表現
1923年	第２回 モントルー会議（ダルクローズ参加）	創造的奉仕のための教育
1925年	第３回 ハイデルベルク会議	保護者の自由と教育者の教育
1927年	第４回 ロカルノ会議	教育における自由の意味
1929年	第５回 エルシノーア会議	新しい心理学とカリキュラム

（この会議は現在も継続している。ハイデルベルク会議のテーマは問題提起の一部であり、全体のテーマではない。また、エルシノーア会議以降、組織改革が行われ、翌年にはジュネーヴの国際連盟の国際教育局(Bureau International d'Education, 1925)との提携も成立した[51])

J＝ダルクローズは、国際新教育連盟の機関誌『新時代のために(フランス語圏版)』に三度寄稿している。最初の記事はフランス語圏版が刊行した初年、1922年の『リズム(Le Rythme)』、次は1923年に行われたモントルー会議の『レジュメ(Rapport du II congrès

international d'éducation nouvelle. IV. Questions connexes)』、三度目は、1930 年『バランス(l'équilibre)』である。これらの文献を通して、次節では両者の関係とともに、J＝ダルクローズのリトミック教育理念について検討する。

第３節　J＝ダルクローズの新教育連盟における活動

新教育連盟の原則には「世界各国に在住する同じ教育理想を持つ教師達およびその他の人々の間で、二年ごとに開かれる国際会議において、また、英語、ドイツ語、フランス語によって刊行される国際誌において、お互いに関係を結び、連帯の感覚を抱いくようにするように促進する[52]」という項目が記されている。J＝ダルクローズはそのフランス語版機関誌『新時代のために』に、いち早く『リズム *Le Rythme* (1922)』[53]という小論を投稿している。つまり、これが J＝ダルクローズの新教育連盟におけるデビューである。

１）『リズム(1922)』は、教育者を対象に執筆されたリトミックの解説である。J＝ダルクローズは、健康法としての体操やスポーツの肉体的訓練では不十分であり、肉体のリズムと精神のリズムを結合させるのがリトミックの目的であると述べ､次のように記している。

> 与えられた合図に肉体の自発的なリズムが作動する、あるリズムに注意を集中させる、有用なリズムを強化し無用な動き(écarter les mouvements intempestifs en reforçant les rythmes utiles)を排除する、肉体と精神のリズムを調和させる、こうして満足すべき状態と喜ばしい平和を引き起こし、ついには想像力と感情に対し花開く自由を宣言する。これがリトミックのエクササイズの先に待つ大団円なのだ[54]。

J＝ダルクローズはエクササイズを通して、リトミックのあらゆる作用因のなかで最も重要なものは音楽であるとし、その有用性について説明している。彼は「幾世紀にわたる音楽リズムの継続的変容は人類の習慣と性格と気質の変容に対応するので、ある様式の音楽のひとフレーズを演じるだけで(suftit de jouer une phrase)、その作品の作曲された時代の人の精神状態を甦らせる[55]」、また「さらに観念と結びつけることで、今日の我々の肉体に社会の要求と取り決めによって、その時代に規定された身体運動の筋肉のエコーを呼び覚ますのに充分である[56]」と述べている。従って、初等学校では、子どもたちに模倣させることは簡単であるが、ただの打撃や原始的リズムでは充分ではなく、個々の個性に

よってニュアンスを加えたりするように仕向け、若い精神と小さな身体に歓びと熱意を注ぎ、想像の能力に直接的に刺激を与えることを強調している。

２）彼は新教育連盟の第二回のモントルー会議(1923)に参加し、その開会式においてジュネーヴの子どもたちと共にリトミックの実演を行っている[57]。この連盟によって採択された七つの「参加の原則」の内、第三には「学習、そして一般的に生活についての習慣のためには、子どもの内的興味に対して、自由な活動を与えるものでなくてはならない。― その興味とは、彼に自発的に目覚めるもの、また各種の手工的、知的、美的、社会的および他の諸活動において、それらの子どもの表現を見出すものである[58]」と記されている。これは、J＝ダルクローズの教育観を肯定するものである。

J＝ダルクローズはこの時 58 歳であり、リトミックはすでに国際的に広まっていたが、自身の教育法の子どもに対する教育的価値について賛同を得るために、積極的な行動を起こしていたことに驚かされる。『新時代のために(1923)[59]』には、その時のレジュメが掲載されており、実演内容や J＝ダルクローズの見解を読み取ることができる。モントルー会議のテーマは「創造的奉仕のための教育」であった。J＝ダルクローズは、以下のように教育学者たちに対して説明している。

> 私がリトミック体操によって到達しようとする目的は、子どものもつさまざまな内的な力のバランスをとることである。現在、我々はたくさんの神経質な子どもたち、だらしない、または調和のとれていない子どもたちに出会う。…(中略)…知的なものと肉体的なものとのバランスをとること、つまり、中枢神経の教育によって人体組織全体の機能調整を確かなものにすることは、全的成長の頂点へ向かうための鍵である。我々は、運動をさまざまに分解、分類することが脳の発達に基づく直接作用を引き起こすことを知っている。より高度な能力への飛躍を可能にするため、動作は反復練習によって自動的なものになる。生徒は彼の運動を分解させることを学ぶのみならず、そこから深い意味を理解するのである。つまり、彼は動作の支点を知り、実現しようとしているリズムを感じ取ることになるのである[60]。

J＝ダルクローズは、対立し、しかし補い合う能力がこのメソードの基礎にあり、受け取った号令に対して素早く反応することや、今続けている動作を瞬時に制止することは、

心理的側面と肉体的側面での疑う余地のない価値をもつ制御能力を獲得させると記している。また、J＝ダルクローズは次のように述べている。

> リトミック体操の実習において、子どもたちの各々の性質の違いは如実に現れる。まれには、精神と肉体の完璧なバランスを証明する生徒たちもいる。多くの場合、身体の各部分は、それぞれ異なる反応をする。ここに紹介する 6 人中ひとりの生徒（専門の音楽家ではなく、ジュネーヴ地方の公立の小・中学校の生徒である）は、下半身においては素早く楽々と反応することが出来るが、肩や首の反応は幾分硬さがみられ調和を欠いている。もう一人の生徒では、頭と腕は活動的で号令や音楽に対して素早い反応を示すが、足の運動は遅れ気味である。こうした差異は、生徒たちがさまざまな刺激に対して、身体のすべての部分を均等に反応させることができるように助勢(favoriser)していかねばならないということを教師たちは知るべきである[61]。

J＝ダルクローズは、一旦、人体組織のバランスがとれれば、神経組織もバランスがとれ、同じように日常活動の生活と知的、精神生活のバランスもとれると説いている。例えば、ロンドンの知的障がい児学校(école d'enfants anormaux)のある少女は、7 までだけしか数を数えられなかったが、一か月リトミックの授業を受けた後、健常児と同じように数を数えられるようになった、と事例を挙げている。

J＝ダルクローズは「運動の容易さと自制は、個人の精神生活の上にまで作用を及ぼす。自分自身を持つということは、人生におけるひとつの成功の要素である[62]」と述べ、すべての公立学校におけるリトミックの習得は、より健康でバランスがとれ、病的な趨勢に陥る危険の少ない世代を生み出すことに貢献することを主張している。

J＝ダルクローズはリトミックによって、音楽的能力の伸長とともに、心と身体のバランス、すなわち人格のバランスが養われることを教育者たちに伝えたかったのではないだろうか。その「バランス」に関して、7 年後にも J＝ダルクローズは寄稿している。

３）『新時代のために(1930)』[63]に記載された「バランス(l'équilibre)」は、「リズムと学校生活(*le rythme et la vie scolaire*)（年代不明）」から引用（抜粋）されたものである。この小論は、J＝ダルクローズの論文集『リトミック・芸術と教育(1930)』[64]所収の「バランス

(Balance)」の章にも同様の内容が記載されている。J＝ダルクローズが初等学校教育や教育者に対して強調したい考えがこの「バランス」の中で述べられている。その記述の一部を以下に挙げる。

> この均衡の必要性は社会的、実践的、情動的生活のどんな細部にも見られる。初等、高等の学校ともと精神と肉体の能力の正しいバランスを図ることを強制すべきである。身体的疲労は精神的自由によって、頭脳の疲労は筋肉組織の協力・神経の滞りない循環・正しい状態のもとでなされる知性の働きによる喜びによって、報われるのではないだろうか[65]。

また、J＝ダルクローズは、生活における均衡の探究は、教師が生徒に注意力や集中力を要求する場合でも生徒に緊張をさせないと述べ、「均衡を見出そうとする試みは徐々に教師を導いて彼のメソードを変えさせる[66]」と記している。そして、彼は次のように記している。

> 一時間の授業の中にさえ気晴らしを取り入れ、必要と思えば力を抜かせ、地理の時間に歌を歌わせ、２編の歌曲の間に数学や歴史の質問を挟む。子どもの工夫の能力の自然な発展は、模倣や機械的な繰り返しの能力の発展と同じく、子どもの進歩にとって本質的なものである[67]。

これは、ひとつの授業の枠組みに囚われずに、他領域との横断的学習の重要性を提唱しているものである。また、学校教育における音楽指導のあり方にも「バランス」が必要であり、教師が子どもから引き出そうとする音楽的基礎能力の伸長とは異質な専門性への固執・執着心に J＝ダルクローズは一石を投じている。彼は「節約すること、バランスを保つこと、これはスローガンであるに違いない[68]」と述べている。節約とは進歩する意思を無駄にせず、神経の消耗を避けることであり、欲望を慎み創造への望みと実現する方法のバランスを保つことを意味している。

J＝ダルクローズがリトミックによって「精神と身体の調和を図る」ことを目指したことは、主著『リズムと音楽と教育(1920)』の序に記されている。従って、これはリトミックの教育理念において周知の見解である。しかし、これらの記述により「調和」と同様に

「バランス」という語句にもリトミック教育において重要な意味をもつことを見出すことができた。『リズムと音楽と教育(1920)』にも、全文中「調和(harmonieux)」は５か所[69]に用いられているのに対し、「バランス・均衡（équilibre)」の語句も９か所[70] に使用されているからである。J＝ダルクローズはさまざまな意味合いを含む「バランス équilibre」の語句を用いていることから、その重要性を読み取ることができる。J＝ダルクローズにとって精神と身体の「調和 harmonieux」や教育や社会における「バランス équilibre」の考え方は、人間教育を包含する音楽教育リトミックの教育観を理解する上で重要な手掛かりとなるものといえる。

第４節　まとめ

専門的に音楽を学ぶ学生のための音楽教育から、身体運動を伴ったリズム活動によって精神と肉体のバランス・調和を目指すようになった彼のメソードは、J＝ダルクローズ独自の研究の賜物である。しかし、その教育観の背景には、多くの学者、研究者、教育者たちの存在によるところが大きい。新教育連盟会議における J＝ダルクローズの積極的なアプローチも、当時の教育心理学や障がい児研究の教育家たちからの影響であるといえるだろう。

エンソアがリトミックに関して、精神と肉体を調和させ、子どもの内省する能力を自ら表現できるようにし、人格をより向上させるメソードとして評価したことは、J＝ダルクローズにとってリトミックの教育的有用性への自信に繋がったと考えられる。モントルー会議(1923)参画によるエンソアの論評は、J＝ダルクローズが 1920 年に発表した主著『リズムと音楽と教育』後のリトミック教育の拡がりとともに、その教育的価値の国際的な評価を得たものと捉えることができる。ロッテン、ニイルと J＝ダルクローズとの接点は直接的ではない。しかし、J＝ダルクローズ不在後のヘレラウで、リトミックが改革志向の教育的活動とともに行われていたことは注目すべきことである。これは、リトミックが一般教育と融合、適用し得たことを表している。また、フェリエールと J＝ダルクローズの関係については、ルソー研究所やメゾン・デ・プチでのリトミックや娘シュザンヌとの関わりにおいてリトミックへの認知があったと考えられる。しかし、その関わりは不明な点が多い。J＝ダルクローズが書簡をフェリエールに宛てていること等から、フェリエールは J＝ダルクローズが学びを得たいと考えたいた研究者のひとりであったと思われる。

当時の新教育家たちは、リトミックについて次のように評価していた。①音楽的経験に

より子どもの内省する諸能力を発揮させること、②自ら喜びをもって表現できるようにする子どもの自主性と創造性を養うこと、③子どもの興味を促し、注意力や集中力を発達させること、④心身の調和・バランスを図り、人格の向上を目指すこと、の４つの教育的効果についてである。それは、押付けられた知的な学習ではなく、身体運動による経験が先行するリトミックの指導法が革新的な方向性をもつ音楽教育であったからである。新教育運動の時代の中の教育観において、J＝ダルクローズの教育は新しい心理学的観点から考えられた方法論をもつ、例えば子どもの身体的・精神的における有益な働きについて、また内省する創造力等の能力を発達させ人格の成長に寄与するという、新しい教育観を持った音楽教育法であると位置付けることができるだろう。

また、J＝ダルクローズはリトミックにとって「子どものもつさまざまな内的な力のバランスをとる必要性」を特に重視していた。彼は、学校教育における音楽指導のあり方にも「バランス」の必要を説いている。心身の調和や均衡を見出そうとする教師たちの試みは、子どもたちの身体的疲労を精神的自由にし、頭脳の疲労は筋肉組織の協力のもとでなされる知性の働きによって喜びへと導かれる。彼はリトミックによって、子どもの身体的・精神的な自由と喜びを、音楽を愛好する心とともに育むことを目指したのである。『新時代のために』への寄稿は、リトミックの極めて本質的な教育理念の解明や内容を理解する上で、重要な手掛かりであることを改めて痛感するものである。しかし、J＝ダルクローズの創案したリトミックの教育観は奥深く、これを更なる今後の研究の課題としたい。

注、及び引用文献

---

[1] 古沢常雄・米田俊彦編『教育史』、学文社、2013 年、pp.75-76

[2] 1915 年に設立された協会。神智学は個人的信仰ではあったが幅の広い見地があり、宗教的偏狭性から救い、教育のあらゆる形態における理想の助成(教育連盟においても)をその目的と定義している。

[3] ボイド・ローソン、『世界新教育史』、国際新教育協会訳、玉川大学出版部、1967 年、p.281

[4] ボイド・ローソン、前掲書、1967 年、pp.131-132

[5] 山名淳『夢幻のドイツ田園都市　教育共同体ヘレラウの挑戦』、ミネルヴァ書房、2006 年。

[6] A.Ferrière, L'Ecole Active, Quatrième édition revue et réduite à un volume, Editions Forum, Genève, 1930.　(1920 年初版、第３版より二分冊を一冊に合本)

[7] レッチワース(Letchworth)は、近代都市計画の祖と呼ばれるイギリスの社会改良家エベネザー・ハワード(Howard, Ebenezer 1850 – 1928)が提唱した田園都市の理念に基づいて建設された最初の田園都市。

[8] W.Boyd and W.Rawson, *The Story of the New Education*, Heinemann, London, 1965, p.67.

[9] 岩間浩『ユネスコ創設の源流を訪ねてー新教育運動と神智学協会ー』、学苑社、2008 年、p.48

[10] 岩間浩、前掲書、2008 年、pp.41-42

[11] 岩間浩、前掲書、2008 年、p.45

[12] Interviewer unknown, transcribed by David Turner,"Interview with Beatrice Ensor 1970", *WEF Archive of the University of London Institute of Education*,Zurück,1970,〈www.martinnaef.ch〉

[13] B.Ensor,"Coup-D'deil D'Ensemble Discours de Cloture, Le Dieu interieur", *Pour L'Ere Nouvelle,* No.8, Genève, 1923.

[14] B.Ensor, *ibid.,* 1923,Genève, p.137,139.

[15] W.Boyd and W.Rawson, *ibid.*, p.71.

[16] W.Boyd and W.Rawson, *ibid.*, pp.70-71.

[17] 1929 年にヘレラウの祝祭劇場の西側フロアで開始された寄宿制の教育施設。

[18] 岩間浩、前掲書、2008 年、p.284

[19] 岩間浩、前掲書、2008 年、p.85

[20] Neue Schule Hellerau für Rhzthmus, Musik und Körperbidlung (1919-25)

[21] 祝祭劇場（Festspielhaus Hellerau）はヘレラウに建設された劇場である。そこに最初のリトミック教育のための J＝ダルクローズ学院が設立された。

[22] 20 世紀の初頭、ドイツの教育改革運動のなかで、19 世紀末までの範例的で書物中心の教え込み教育への反動として、ケルンシュタイナーらが提唱した労作学校の概念から生まれてきた教育。

[23] M.Fasshauer, *Das Phänomen Hellerau*, Antiquariat der Papiersammler, 1997, Dresden, S.220.

[24] 第三号から 1923 年までの短期間であった。

[25] 1920 年に設立された改革志向の中等教育施設。（7 歳－18 歳）

[26] A.S.Nill, *Neill! Neill! Orange Peer!* , Hart Publishing Company Inc., New York, 1972, p.75.

[27] A.S.Nill, *ibid.,* 1972, p.76.

[28]「リズム・音楽・身体教育のためのヘレラウ新学校」の校長であった彼女は、移転先では(ラクセンブルク校)、リトミックの原理とモンテッソーリ教育との統合を試みている。J＝ダルクローズに師事したリトミック教師。

[29] 山名淳、前掲書、2006 年、p.238

[30] 山名淳、前掲書、2006 年、p.239（Neill,“Hellerau International School”, *The New Era.* Vol.3, No.9, 1923, p.37）

[31] フェリエール『活動学校』、古沢常雄・小林亜子訳、明治図書出版、1989 年、p.17

[32] レディーはイギリスにおける最初の田園寄宿学校の創立者。リーツはここで一年間教師をしている。

[33] フェリエール『活動学校』、前掲書、1989 年、p.13

[34] 岩間浩、前掲書、2008 年、p.80

[35] ボイド・ローソン、前掲書、1967 年、p.27

[36] フェリエール『活動学校』、前掲書、1989 年、p.222

[37] フェリエール『活動学校』、前掲書、1989 年、p.55

[38] フェリエール、前掲書、1989 年、p.103

[39] フェリエール、前掲書、1989 年、p.62

[40] J＝ダルクローズ『リズム・音楽・教育』、河口眞須美訳、開成出版、p. x

[41] Rémy.Gerber, *Vie et Oeuvre d'Adolphe Ferriere,Chronologie de son existence première partie*:1879-1934,Genève,1989,p.11.

[42] M.Brice, *op.cit.*, 2014.p.30.

[43] J-Dalcroze,*Der Rhythmus ein Jahrbuch*,Erstes bis Viertes Tausend,Jena,1911,p.72

[44] I.Spector, *Rhythme and Life: The Work of Emil Jaques-Dalcroze,* Pendragon Press Stuyvesant, New York,1990, p.235.
フェリエールの父フレデリック(Ferrière, Frédéric 1848-1924)は、心理学者・精神療法医、国際赤十字委員会の副総裁を務めた人物で、アドルフ・アッピアの父、医師ルイ(Appia, Louis 1818-98)とはいとこ同士であり、彼らは互いに戦争犠牲者のための赤十字運動共同創設者であった。J＝ダルクローズとアッピア家、フェリエールの家族の三者は、研究者、友人、弟子として密接に関わり合っていたと思われる。

[45] J-Dalcroze, *Méthode de Jaques-Dalcroze. Exercices de plastique animée* Vol.I., Jobin & CIE, Lausanne, 1916.

[46] J-Dalcroze, *ibid*, “En collaboration pour le classement des exercices et principes avec Mlle SUSANNE FERRIÈRE, professer diplômé de l'Institut Jaques-Dalcroze.”

[47] J＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』、前掲書、2003 年、p.181
Le Rytnme,La Musique et L'Éducation, 1920, p.160. (原書では第 12 章、p.160)

[48] J-Dalcroze,“Lettre à Ferrière”,Institut Jaques-Dalcroze Genève,1924.

[49] ビネはフランスの心理学者であり、ソルボンヌ大学実験心理学研究所所長(1894-1911)を務めている。1905 年に弟子のシモン(Théodore Simon)と共同研究により最初の知能検査法を作った。

[50] 細川匡美、「クラパレードからジャック＝ダルクローズへなされた教育に関する示唆についての研究—学会活動と書簡を手掛かりに—」、日本ダルクローズ音楽教育研究第 41 号、2017 年、pp.26-37 参照。

[51] B. Ensor and D. V. Halbach,“ The Outlook Tower”, *The New Era*, Apr. 1930. pp.62-66

[52] 岩間浩、『ユネスコ創設の源流を訪ねて』、学苑社、2008 年、p.21

[53] J-Dalcroze, “Le Rythme” , *Pour l'ère nouvelle* No.3, 1922, pp.51-52

[54] J-Dalcroze, *ibid.*, 1922, p.51.

[55] J-Dalcroze, *ibid.*, 1922, p.51.

[56] J-Dalcroze, *ibid.*, 1922, p.51.

[57] ボイド『世界新教育史』、前掲書、1967 年、pp.149-150

[58] ボイド『世界新教育史』、前掲書、1967 年、p.142

[59] J-Dalcroze,“Rapport du II congrès international d'éducation nouvelle”, *Pour l'ère nouvelle* No.8, 1923.

[60] J-Dalcroze, *ibid.*, 1923, pp.130-131

[61] J-Dalcroze, *ibid.*, 1923, pp.130-131

[62] J-Dalcroze, *ibid.*, 1923, pp.130-131

[63] J-Dalcroze, “L’Équilibre”,extrait de :«*Le rythme et la vie scolaire*», *Pour l'ère nouvelle* No.68, 1930.

[64] J-Dalcroze, *Eurhythmics Art and Education*, translated by Fredrik.Rothwell, Cyntha Cox,London, 1930.

[65] J＝ダルクローズ『リトミック・芸術と教育』、板野平訳、全音楽譜出版、1990 年、p.206

[66] J＝ダルクローズ、前掲書、1990 年、p.209

[67] J＝ダルクローズ、前掲書、1990 年、p.209

[68] J＝ダルクローズ、河口道朗訳『音楽と人間』、開成出版、2011 年、p.107

[69] J-dalcroze, *Le Rythme, La Musique et L’Éducation*, Jobin & Cie, Lausanne, 1920, p.57, 70, 93, 113, 149.

[70] J-dalcroze, *Le Rythme, La Musique et L’Éducation*, Jobin & Cie, Lausanne, 1920, p.37, 57, 81, 83, 88, 115, 191, 204, 207.

終　章
本研究の結論

終章では、これまで J＝ダルクローズとクラパレード、モンテッソーリ、ドクロリーらとの関係における検討を振り返り､それらを通じて明らかになった相互の影響を踏まえて、当時の革新的な音楽教育を先導した J＝ダルクローズの教育観が、どのように変化をとげたのか、音楽教育をどのように方向づけようとしたのかについて考察を進めていくことを課題とする。

当時の音楽教育は演奏技術の向上を中心とするものであった。しかし、J＝ダルクローズは、音楽教育における卓越した技術が真の音楽表現や音楽の理解に繋がるものではないと考えていた。それは彼自身の幼児期におけるピアノ教授の経験に遡る。彼は、子ども時代に受けた技術偏重で退屈なピアノレッスンを疎ましく疑問に思っていた。その後、ジュネーヴ音楽院で音楽家を目指す学生を指導する立場になった彼は、技術を向上させるだけの音楽教育に限界を感じるようになったのである。このようにして、彼は技術偏重の音楽教育から脱却し、リトミックを聴取力や身体運動などを取り入れた教育法として体系化した。そして、当時の心理学や生理学、教育学からの学びにより、J＝ダルクローズの教育観は音楽家のための音楽教育から、子どもの内省する能力を発揮させ、調和のとれた人間形成を目指す「音楽による音楽教育」へと発展していった。その教育観の変遷には、同郷の親友であり心理学者であったクラパレードから与えられた子どもの視点に立った教育学的示唆があった。また、J＝ダルクローズはモンテッソーリやドクロリーから、障がい児教育や乳幼児の発達に即した教育の効果について学び、リトミックの重要な役割を成す領域のひとつとして発展させている。彼らは心理学者や医師から出発し、教育家として独自の理念に基づいた教育施設を設立した新教育の実践者であった。彼らの行った新しい教育の方向性は、J＝ダルクローズの教育観に影響を与えたといえる。

以下、これら本論で検討した内容を総括し各章における知見をまとめ、J＝ダルクローズの新しい教育的意義について考察する。

１．本研究のまとめ

第１章では、ルソー研究所とリトミックの関係について考察した。これは第２章で取り上げるクラパレードと J＝ダルクローズの研究上の関係において論拠を導く重要な意味合

いをもつものである。

ルソー研究所はクラパレードによって 1912 年に創立された、子どもの教育改革のためのラボラトリー、教員養成などを目的とした先駆的教育機関であった。その後 1914 年にその付属幼児施設メゾン・デ・プチが設立され、幼児教育の実践とともに子どもの発達心理学の研究も行われていた。その研究はクラパレードからピアジェへと引き継がれ、近代の発達心理学の形成に寄与したとみなされている。

ルソー研究所創立の３年後、J＝ダルクローズは第一次世界大戦によりヘレラウに設立したリトミック学院を閉鎖し、ジュネーヴに J＝ダルクローズ研究所を創立する。クラパレードは J＝ダルクローズと 1900 年前後から交流があったと思われるが、このリトミック研究所設立に関しても尽力している。彼はリトミックの創案当初から、身体運動を活用した革新的な音楽教育法に関心を示し支援していた。

第１章の検討において先ず明らかにしたことは、ルソー研究所におけるリトミックの導入である。J＝ダルクローズがクラパレードに宛てた書簡には、互いの研究所で教育学とリトミックの教育交換をする提案が記されている。この提案が実現したことは、ルソー研究所が発行する『プログラム(学校・授業案内)』に「リトミック」の授業科目が記載されていたことにより確認することできた。また、J＝ダルローズ研究所発行の『リズム』誌所収の報告書によると、J＝ダルクローズの妹ブリュネ＝ルコントはルソー研究所の学生にリトミックを教えていたのである。一方、クラパレードも J＝ダルクローズ研究所において教育学の講義を行っていた。このことにより、J＝ダルクローズは、リトミックを学ぶためには最新の教育学の知識が不可欠であると認識していたことがわかる。

次に、クラパレードがリトミックをどのように評価し、ルソー研究所に取り入れたのかについて検討した。クラパレードは機能主義的観点から精神的発達を目指す教育、つまり、子どもの欲求(興味)をひきつけ、彼らの活動性を目覚めさせようと考えていた。本研究では、クラパレードのリトミックに対する評価について幾つかの文献を見出したが、彼はリトミックについて、リズムと音楽の感覚を発達させるという価値ばかりでなく、感情と欲求の教育方法としての価値があり、単純な欲求の命ずるのに従って、苦もなく運動を行うことができるというような神経組織の柔軟性を高め、身体を制御する力を与える、と説明している。つまり、クラパレードは、リトミックを子どもの欲求や自己コントロール機能に働きかける「音楽を活用した身体運動」として評価していた。これは、クラパレードが自身の教育機関に取り入れた理由のひとつである。子どもの発達心理を研究し、教員養成

を行うルソー研究所にとって、リトミックが有益な教育として貴重な役割を果たしていたことは、クラパレードの教育思想に関連づけられるものであり、本研究を進めていく上での重要な契機となった。

第２章では第１章の検討を踏まえ、クラパレードから与えられた J＝ダルクローズへの教育的示唆について考察した。

クラパレードは「機能主義教育論」を提唱し、すべての行為は興味によって導かれ、あらゆる可能な反応の中から瞬時に選択することであると示している。クラパレードと J＝ダルクローズは、子どもの注意力や筋肉運動感覚が及ぼす教育的効果について共同研究していたといわれており、これまでの研究では、クラパレードの「無意識の法則」や J＝ダルクローズへの助言が、リトミックの「注意力」を育成する「反応練習」に影響を与えたと捉えられている。しかし、本章ではクラパレードからの影響を従来とは異なる視点から次のように考察した。

本研究において、J＝ダルクローズとクラパレードの多数の往復書簡を入手し検討した結果、J＝ダルクローズはクラパレードによって心理学の研究に導かれたことを明示していることが判った。また、J＝ダルクローズは 1906 年の書簡の中で、クラパレードに「神経支配」の定義について助言を求めている。この書簡の内容の一部は、既にマルタン他『エミール・ジャック＝ダルクローズ』等に記載されているが、本研究において、以下の新たな考察を加えた。それは、「神経支配」という言葉が、1906 年の書簡と同年に出版された J＝ダルクローズの著書『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図』の主要なテーマであったことである。この著書には、リトミックの練習は全てのニュアンスと運動性の神経支配の度合いによって行われ、動きを支配する「感覚・判断力・意志」の３つの能力の遊びを規則づける、と記されている。これはリトミックに筋肉収縮が持つ特徴を活用する目的をもって執筆されたものであり、クラパレードからの助言はこの著作に対する科学的根拠を導いたものと考えられる。また、『ジャック＝ダルクローズのメソード(1906)』に記されているレッスン内容には、注意力や自己制御を喚起させるための指導プロセスが記されており、運動性の神経支配の研究から、それを身体運動と関連させたリトミックの練習法に生かしていることが確認できた。このことは、クラパレードからの助言や協力が J＝ダルクローズの指導法や教育観に影響を与えたことを明らかにしている。

管見の限り発表されていない J＝ダルクローズ宛のクラパレードの書簡(1906)には、運動が心理学的重要性を持つこと、リトミックが自己と他を理解し「心身に大きな教育的影

響を与える」ことが記されている。その教育的影響とは、子どもの表現や注意力、自己コントロール機能などの効果を意味している。すなわち、クラパレードが J＝ダルクローズに与えた教育的示唆とは、子ども個人の人間性を視野に入れた教育であった。J＝ダルクローズはクラパレードから生理学的、心理学的知己を得て、リトミックの実際的な現象の支えとして運動が及ぼすさまざまな教育的役割を確信するに至ったのである。

第３章では、モンテッソーリと J＝ダルクローズの音楽教育について比較、検討し、リトミックがモンテッソーリ教育の音楽活動に及ぼした影響、及び相互の教育観に対する見解について考察した。モンテッソーリは、発達の遅れた子どもの教育を健常児に適用できるものとし、自身の教育を実践する施設として、1907 年にローマに「子どもの家」を設立した。J＝ダルクローズとモンテッソーリは、ともに新教育運動に関わった教育者であり、感覚教育、音楽教育、障がい児教育について研究・実践し、独自の教育法を体系化したという共通点がある。

モンテッソーリ・メソードにおける音楽教育は、モンテッソーリとその協力者たちによって段階的に体系化されたといわれている。しかし、1916 年にイタリアで出版された『初等学校における自己教育(1916)』の記述から、リトミックが拍子やリズムに関する有効な練習として、モンテッソーリの音楽教育の中で実施されていたことが判明した。また、J＝ダルクローズはバルセロナのリトミッククラスにおいて、モンテッソーリの教育を受けた子どもたちが良い成果を上げていることを証言している。モンテッソーリの音楽教育に協力したマッケローニ、ギルバート、バーネットらは、リトミックを学んだ人物であり、特にモンテッソーリ音楽教育のリズム曲集を作ったバーネットは、ニューヨークのダルクローズ・スクールでも教鞭を執っていた。彼らはリトミック教育法に依拠し、モンテッソーリの音楽教育を確立したと考えられる。つまり、これは J＝ダルクローズの教育法からの影響を明らかにしている。

次いでこの章では、従来の研究においてほとんど示されていないベーム(1985)編集のモンテッソーリ論文集所収の「運動の組織化による人格形成(1932)」から、モンテッソーリのリトミックに対する晩年の見解を明らかにした。モンテッソーリは、身体運動が人格形成に及ぼす影響について、J＝ダルクローズの身体運動は、最終的には「精神と運動の根本的な統一」に達するという見解を示している。モンテッソーリは、個人が自分の運動を抑制し、目標に達するように注意を向けさせることで、子どもに自己コントロール機能を促すと捉えていた。この点においては、リトミックと共通した見解を見出すことができた。

一方、音楽を第一義として身体運動を活用し心身の調和を目指した J＝ダルクローズの教育と、音楽を活用した身体運動により子どもの人間形成を成し遂げるモンテッソーリの教育には、音楽という基本要素の上に築かれている理念においての相違がある。これはモンテッソーリが障がい児や貧困層の子どもへの支援から教育が始まっているのに対し、J＝ダルクローズは音楽家としての姿勢を終始貫いているところに見解の差異がある。しかし、J＝ダルクローズは、古代から音楽は癒やしや喜びをもたらすものと考え、心身を発達させようとした先人の考え方を継承しており、モンテッソーリ・メソードの療法的教育や乳幼児期の教育の重要性への関心を示している。J＝ダルクローズは、幼児期の聴覚の発達に関するリトミックの経験的効果の科学的根拠をモンテッソーリ教育から見出していたのである。

また、第４章ではドクロリー・メソードとリトミックの関係について考察した。ドクロリーは、子どもの興味の題材を作業活動によって学習する心理学的教育法を創案し、モンテッソーリと同様に精神障がい児の治療に従事し、その後、彼の教育メソードによる学校を開設した。J＝ダルクローズとドクロリーの直接的な接点は、ほとんどないと指摘されている。しかし、ブリュッセルでリトミックを教えていた J＝ダルクローズの弟子たちは、発達障がい児施設や健常児のためのドクロリー学校において、リトミックの授業を行っていたのである。ドクロリーは、子どもの知能の程度や経験を考慮しながら、彼らの進歩、運動能力を上げるために、音楽や律動体操は有効な方法であると考えていた。本章では、ドクロリー学校でのリトミックは、子どもの興味、自由活動、自発的活動を重視し、集団作業に協力できうように配慮する、というドクロリー・メソードの理念を援用した実践であったことを明らかにしたのである。これは、リトミックの教育理念が、ドクロリー・メソードと共通する部分を持っていたことを示している。

しかし、ドクロリーはリトミックについて「運動の分析を要求」することや「全体的な運動整合を修正して新しい整合に到達するために、身体をバラバラに解体することを要求する」という限りにおいて難しい練習であると評している。ドクロリーは、部分より全体を優先させる学びのプロセスを重視する「全体化」の理論を提唱しており、幼児への分析的な教育プロセスを疑問視していた。一方、彼はリトミックの「全体的な運動整合」の方法について「運動整合が習性化しすぎていないこと」がリトミックの成功の鍵であるとも記している。リトミックは遊戯などの決められた動きをせず、子ども自身が判断して表現する教育である。ドクロリーはリトミックの習性化させない方法により、自分自身の身体

をより適切にコントロールすることができると認識していた。つまり、彼は自己コントロールができるよう、その運動や遊びの欲求を助けるために、音楽やリズムを使用したリトミックを導入し、障がい児への効果はそのまま健常児の教育に適用されたと考えられる。このように、ベルギーにおけるリトミックの発展は、ドクロリー・メソードの影響が色濃く投影されている。ベルギーでは障がい児教育や幼児教育、初等教育へのリトミックの有用性が認められていたばかりでなく、演劇やダンスなど幅広い分野においてリトミックが展開されていた。ベルギーでのリトミックの拡がりは、J＝ダルクローズに障がい児教育のみならず、さまざまな領域におけるリトミックの可能性を強く認識させる一助になったといえる。

第 5 章では、J＝ダルクローズの新教育連盟との関わりに焦点をあて、当時のさまざまな新しい教育改革の実践においてリトミックの果たした役割を検討し、J＝ダルクローズの教育観について考察した。

新教育連盟は 1921 年、エンソアらの呼びかけにより、教育を通して世界平和を促進させる観点をもって、新しい教育における国際的連携を目的として設立された。J＝ダルクローズは新教育連盟の機関誌『新時代のために』が刊行されると直ちに『リズム』という題の小論を寄稿しており、1923 年には新教育連盟モントルー会議にも参加している。この会議での実演は、リトミック教育における成果を世界の教育者たちに広く知らしめる活動となった。本研究では、エンソアが「リトミックは精神と肉体を調和させ、人格をより向上させるメソードである」と評価を得ていることも明らかにした。新教育運動の時代の教育観において、J＝ダルクローズの教育は新しい心理学的視座による方法論を持つ、例えば、子どもの身体的・精神的における有益な働きにについえ、また内省する創造性等の能力を発達させ人格の成長に寄与するという、新しい教育観を持った音楽教育法として貴重な役割を果たした。

また、新教育連盟のフランス語圏の機関誌『新時代のために』に寄稿した小論『バランス』には、J＝ダルクローズの教育観が記されている。この記述は、新教育連盟の教育者たちに向けた J＝ダルクローズのメッセージと捉えることができる。彼は「バランスの必要性」は、社会的、実践的、情動的生活のどんな細部にもみられ、生活における均衡の探究は、教師が生徒に注意力や集中力を要求する場合でも生徒に緊張をさせない。均衡をみいだそうとする試みは教師の考えを徐々に変えさせる、と記している。彼は学校教育における音楽指導のあり方にも「バランス」が必要であり、リトミックによって音楽的能力の

伸長とともに、心と身体のバランス、すなわち人格のバランスが養われることを主張していた。J＝ダルクローズは新しい教育の動向の中で、自身の音楽教育の在り方を子どもの精神と身体を開放し、バランスのとれた人間形成を目指す教育観へと、より世界的視野をもったものに発展させたのである。

以上、本論文では、J＝ダルクローズの教育観の変遷に関して、新教育家たちからの影響やリトミック受容から得た教育理念に対する確信、新教育運動との関わりなどを通して検討してきた。これを踏まえて、J＝ダルクローズの新しい教育的意義について考察し、本研究のまとめとしたい。

２．J＝ダルクローズの音楽教育観再考

J＝ダルクローズの教育観は、芸術家のための音楽的能力を伸長させる「音楽への音楽教育」から、子どもの視点に立ち、人間性を豊かにする「音楽による音楽教育」に変遷を遂げている。その教育観について、本論文から得られた結果を以下の三つの視点から再考する。

一つ目は「人間的成長を目指す音楽教育」という視点である。

J＝ダルクローズは当初、音楽家の養成において、演奏技術の向上を重視する音楽教育からの脱却を考え、音楽と身体運動を融合させたリトミックを創案した。彼はそこから真の音楽性を養うことは出来ないことを知っていたからである。J＝ダルクローズはその後、クラパレードから心理学的、生理学的、教育学的知己を得て、リトミックが自己を知り、運動の可能性を意識して行うことにより個人を高める教育的有用性をもつことを確信するに至った。J＝ダルクローズは、音楽の本質は音楽の役割を拡大し、純粋芸術の枠組みを超えたところにあると考えた。彼はクラパレードの助言や理論からの学びによって、リトミックを人格形成に寄与するメソードとして､その教育観を変化させたのである｡それは、1906 年の書簡から読み取ることができた。

このことについては第２章でも触れたが、J＝ダルクローズの 1906 年の書簡には、クラパレードに「リズムの本質について述べようとしている」ことが記されている。その内容は「神経支配」の定義について助言を求めるものであったが、同年に出版された J＝ダルクローズの『呼吸と筋肉の神経支配・解剖図』と『ジャック＝ダルクローズのメソード』の２つの著書の内容と一致している。その内容は次のように要約できる。リトミックの練習は、ニュアンスと運動性の神経支配の度合いにより行われ、動きを支配する「感覚・判

断・意志力」の能力の遊びを規則づけること、また、注意力や自己制御を喚起させることである。これらの著書には、運動性の神経支配の研究から、それを身体運動と関連させたリトミックの練習法が示されており、「リズムの本質について」述べられている。

1906 年は、J＝ダルクローズがリトミックを創案して数年後、講演や授業を始めた頃である。彼は 1910 年にジュネーヴ音楽院の教授職を辞任し、リトミック教育実践を実現するために翌年にはドイツの田園都市ヘレラウに移り就任している。つまり、クラパレードとはジュネーヴ音楽院時代から交流があったことがわかる。J＝ダルクローズは、クラパレードにヘレラウに精神生理学の研究所を持ちたいと書簡を送っており、身体運動と神経組織が関与する注意力や判断力を促す自己抑止について大きな関心を寄せていた。

クラパレードはリトミックに対して、身体や表現手段、また注意力や欲求についての一般的教養のひとつであり、慣例的教育が充分に呼び覚ますことのできないエネルギーの根源を開くものであると評価している。クラパレードは 1912 年にルソー研究所を創立し、子どもの発達心理学を研究していた人物である。彼は、子どもは現在の欲求を満たすだけでは満足せず、つねにそれ以上のことを知りたがり自己を乗り越えようとすると分析し、彼らの内在的な欲求や興味によって、外界と自己との関係を創造的で主体的な存在として捉えようとした。クラパレードは、この「成長の欲求」は教育上の貴重な助けであり、その教育方法としてリトミックの有用性を認めている。このようなクラパレードの子どもの視点に立った教育観は、J＝ダルクローズに子ども個人を尊重し人間的成長を促す教育、すなわち、児童理解する教育に展開させたといえる。

二つ目は、「発達の遅れた子どもの教育」という視点である。

J＝ダルクローズは『リトミックと視覚障がい児者教育』という論文を執筆しているように、リトミックの治療的教育にも力を注いでいる。彼は、音楽には本質的な治療の能力があり、我々は全ての感覚や内的な力によって音楽に応えることができると考えていた。本論文で取り上げたドクロリーも、自身の設立した施設や学校において、音楽や身体運動は障がい児の教育について有効であると考えリトミックを導入している。19 世紀後半には、身体的、精神的障がい児に対して大きく配慮が向けられるようになり、特にドクロリーやモンテッソーリは、彼らに医学的治療ではなく教育という手段により効果を上げ、その成果を健常児にも適用した。そのことは、彼らのメソードを世界各地に広げたのである。

ドクロリーは、感覚の練習は必然的に多くの運動を含んでおり、律動体操は粗大運動として有効な方法のひとつである、また、神経中枢を興奮させ、記憶を豊かにするような内

的な感覚は、本能的欲求や全身感覚と呼ばれるさまざまな状態からくると述べている。つまり、ドクロリーはリトミックの音楽を伴った全身運動をするところを評価していた。さらに、彼は、芸術教育は技術の習得ではなく一般教養のひとつとして捉え、経験を利用しながら調和のとれた人間性の発達を約束するものと捉えている。この記述は、子どもたちが経験を通して自分の欲求を満たすために集中力を発揮し、自分をコントロールしていく教育の重要性を示している。そして、ドクロリー学校では、子どもの自由活動、自発的活動、集団作業による協力的活動を重視するドクロリー・メソードを援用したリトミックが行われていた。このことより、J＝ダルクローズは次のように捉えたのではないだろうか。ひとつは、リトミックが障がい児の教育に効果を示したという確信、もうひとつは、障がい児や健常児の枠組みをこえて、リトミックが子どもたちの恣意的ではない自由活動や集団的・協力的活動を行うことができること、そして、さまざまな形に応じて柔軟に適応できることへの教育的価値である。

三つ目は「幼児教育への関心」という視点である。

リトミックは当初、音楽を学ぶ学生のために考案された音楽教育であった。また、リトミックを学びに訪れた人々は、世界各国から集まった音楽家や教師、ダンサー、演劇者、画家、作家たちであった。このようにして、リトミックは幅の広い領域が現在も存在している。つまり、リトミックは子どもたちだけに向けられたメソードではないのである。しかし、J＝ダルクローズは幼児教育に高い関心を持っていた。それは、例えば、幼児の聴覚が素早く発達する経験から幼児教育の重要性に気付いたことや、学校の音楽教育改革の推進等においてもたらされたと考えられる。

その中でもモンテッソーリの教育は幼児に特化した特徴を持っており、子どもが物事に興味を抱く瞬間を捉えて促す「敏感期」の教育や、「静粛」の中で傾聴し自主的に自己制御する心を育む練習について、J＝ダルクローズはモンテッソーリを「非常に示唆的な幼児教育に取り組んできた」と評している。彼は「子どもの教育」や「幼児の発達」などの論文を残している。J＝ダルクローズの「好奇心は創造する心を呼び覚ます」という言葉は、モンテッソーリの教育理念に通ずるものである。また、彼はリトミックの練習は子どもの気質に応じて絶えず変わるべきであるとし、リトミックの目的は固有の能力を全体的にバランス良くすることにあると説いている。J＝ダルクローズは、子どもの注意力などの連続性の欠如を観察し、子どもの特性に合わせた遊びのかたちで指導することを推奨していた。これは、晩年に出版された著書『音楽と人間(1945)』にある記述であるが、J＝ダ

ルクローズが子どもの発達や気質に応じた児童理解する教育観へと到達していたことを明らかにしている。

これまでの考察を通して、当初、音楽のための教育と考えていた J＝ダルクローズが心理学者や教育家たちの理論や理念を通して、子どもの視点に立ち、豊かな人間性を育む教育へとその教育観を変化させていったことが明らかになった。

新教育連盟の会議における J＝ダルクローズの積極的なアプローチも、当時の教育心理学や障がい児研究の依拠によるものであると考えられる。新教育連盟の機関誌『新教育のために(1930)』に記載されている「バランス」には、教師という職業はあらゆる職業の中で最も素晴らしいが、我々は賛否両論を量り、現在・過去・未来を調和させ、無益な思考と動作を排さなければならないと述べている。これは、当時の教育の認識に基づいた記述であるが、そこには学びというインプットと一般教育や障がい児教育に寄与するリトミック教育へとアウトプットした相互作用が生じていたと捉えることができる。それは、身体運動を活用した教育であるリトミックが時代のニーズに応じた新しい教育であったからこそ、J＝ダルクローズは自身の教育観をより良い方向性に変えていくことができたと解釈できる。

すでに我が国の音楽教育は専門家や上流階層のステータスのためのものではなく、すべての人間、子どもたちが経験できるものとなっている。それは学校による音楽教育がなされているからである。現在、子どもの思考力や判断力の涵養を目指す学校教育の注目は、子どもの関心や主体的な経験によって「豊かな心」を育むことにある。しかし、これは、上手にできることや押付けられた学習ではない教育を促していく教師の指標でもある。身体運動による経験が先行するリトミックの指導法は、現在の音楽教育の更なる可能性を引き出すことができるのではないだろうか。

J＝ダルクローズの確信するに至った教育観とは、心身の調和を目指したばかりでなく、子どもの視点に立った教育観を基盤として、自己を知り、欲求や行為を自己コントロールすることで注意力や判断力、社会性などを養い、音楽による楽しい自己表現により豊かな創造性を育み、そして集団活動によって他者を認め、共感する心の重要性であった。

リトミックが 100 年経った今でも、J＝ダルクローズは我々に最新の知識を吸収し、ある一定の固執した考えを日々振り返り、柔軟性をもって時代のニーズに応じた音楽教育を進めていくことを教えてくれているのである。

３．今後の課題

本研究で検討した J＝ダルクローズの教育観はある一部分でしかない。リトミックの教育観には、さまざまな側面からの研究が必要である。「身体運動を活用することにより心身の調和や均衡を目指した」と著する J＝ダルクローズの言葉には、まだ解明していない見解が含まれている。身体表現、障がい児教育、学校教育等、世界各国へ拡がりをみせたリトミックの教育観について、さらなる研究を継続したいと思っている。

主要参考文献一覧

欧文文献

J＝ダルクローズ(Jaques-Dalcroze,Emile)の文献

- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1906), Bibliothèque Publique et Universitaire(Genèva) (以下、B.P.U.と略す), ff.167-168.
- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), (1907), B.P.U., ff.169-170.
- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(Monte Verita,/Ascona,1909), B.P.U., ff.171-172.
- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède), SA,(pendant de guerre), B.P.U., f.181.
- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1925?), B.P.U., ff.185-186.
- J-Dalcroze, *La correspondence* (Lettres à Claparède),(1912),(Cartre postale du Redbourne Hotel à Londres), B.P.U., f.187.
- J-Dalcroze,"Lettre à Ferrière",Institut Jaques-Dalcroze Genève,1924.
- J-Dalcroze, *La Respiration I'Innervation Musculaire Planches Anatomiques Sandos*, Jobin & Cie, Editeurs. 1905.
- J-Dalcroze, *Notes Bariolées* , Paris ,1948.
- J-Dalcroze, *Souvenirs Notes et critiçues*, Editons Victor Attinger, Neuchtel-Paris, 1942.
- J-Dalcroze,"Eurhythmics and the education of the blind", *Eurhythmics Art and Education,* Translated by Frederick Rothwell, Chatto & Windus, London, 1930.
- J-Dalcroze, *Coordination et Disordination des mouvements corporels*, Alphones Leduc (Paris), 1935.
- J-Dalcroze, *Méthode de Jaques-Dalcroze. Exercices de plastique animée,* Vol.I., Jobin & CIE, Lausanne,1916.
- J-Dalcroze, *Der Rhythmus ein Jahrbuch*,Erstes bis Viertes Tausend, Jena,1911.
- J-Dalcroze, "Le Rythme" , *Pour l'ère nouvelle* No.3, 1922.
- J-Dalcroze,"Rapport du II congrès international d'éducation nouvelle", *Pour l'ère nouvelle* No.8, 1923.
- J-Dalcroze, "L'Équilibre",extrait de :«*Le rythme et la vie scolaire*" , *Pour l'ère nouvelle* No.68, 1930.

・ J-Dalcroze, *Eurhythmics Art and Education*, translated by Fredrik.Rothwell, Cyntha Cox, London, 1930.
・ J-Dalcroze, *Méthode Jaques'Dalcroze 3me partie Les gammes et les tonalités,* le phrasé et les nuances,1909.
・ J-Dalcroze, *Méthde jaques-Dalcroze Gymnastique Rythmique*, Sandos,Jobin and Cie, paris, Neuchtel, Leipzig, 1906.
・ J-Dalcroze, *La Respiration I'Innervation Musculaire Planches Anatomiques* Sandoz, Jobin & Cie,Editeurs. 1906.
・J-Dalcroze, *Le rythme*, *la musique et l'éducation*, Paris, 1920 ; 1935 [Rhythmus, Musik et Erziehung. Benno Schwabe, Basel, 1922]

J＝ダルクローズ以外の文献

・ Marie-Laure Bachmann, *Dalcroze Today an education through and into music*, Oxford University Press.1991.
・ A.Berchtold, *Emile jaques-Dalcroze et son temps*, L'Age d'Homme, Lausanne, 2000.
・ Barnett, Elise.Braun, *Montessori & music Rhythmic Activities for young children,* New York, 1973.
・ Willam Boyd & Wyatt Rawson, *The story of the new education*, Heinemann Educational Books, London, 1965.
・ J.-M.Besse,"l'oeuvre éducative d'O.Decroly ou le projet d'une science de l'éducation", Thèse pour le Doctorat de 3e cycle, *Université Lyon.*
・ Jean.Binet,"lettres autographes à Jaques-Dalcroze",Bibliothèque de Genève,1926, Ms.mus. 675. f.21-24.
・ Jean.Binet,"Rapports d'Ecoles",*Le Rythme* No.15,Genève,1925.
・ Mary Brice, "La Rythmique Jaques-Dalcroze dans les Ecoles promaires genevoises：une approche didactique", Université de Genève. Dr.Thèse, 2014.
・ Schweizerisches Musik-Archiv,"Jean Binet.,né le 17 octobre 1893, mort le 24 février 1960：Liste des oeuvres",*Bibliothèque musicale suisses*,ville de Genève, 1970.
・ Bommeli-Hainard, "Das Kontinuitätsprinzip in Zeit und Raum Hellerau" , 1992. 〈www.rhythmik.net/whoiswho/bommeli.htm 2016. 〉
・ W.Böhm, M.Montessori, *Maria Montessori Texte und Gegenwartsdiskussion,* Verlag juliusklinkhardt, 1985.
・ J.Burney, Platonis Opera, 5 vols. Oxford Clazzical Texts, B.C.358. §654c.

- P.Bovet, *Vingt ans de vie.L'Institut J.-J.Rousseau de 1912 à 1932*, Delachaux & Niestlé, Neuchâtel, 1932.
- Thomas Brotz, "Dalcrozian piano pedagogy and cognitive motor learning theory", *Dalcroze Society of America,* Vol.41, No.3, 2015.
- E.Claparède,(Lettres à J-Dalcroze), "11.Opinions et Critiques sur la Méthode Jaques'Dalcroze" *Le Rythme,* No.12*.,* Le Institut J-Dalcroze, Genèva,1924.
- E.Claparède, "Les innovations les plus importantes du domaine de la pédagogie depuis le début du siècle"Separat-Abdruk aus dem Jahrbuch der Schweizerischen 1914.
- E.Claparède, *Psychologìe de L'enfant et Pédagogie Experimentale*, Librarie Kundig, Genève, 1916.
- E.Claparéde,"Repport sur l'activité de la Sosiéte pédagogique genevoise pendant l'exercise 1913-1914",*Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.9, 1916.
- E.Claparéde,"Die französische psychologisch-pädagogische Bewegung"*Archiv für Pädagogik II.Teil, Die Pädagogische Forschung* , April 1914.
- Decroly,*La Fonction de Globalisation et L'Enseignement,* Bruxelles, Maurice Lamertin,1929.
- Descoeudres, *L'éducation des enfants anormaux*, 1916.
- Dutoit-Carlir, "Le Créateur de la Rythmique"Émile Jaques'F.Martin,et al. *Dalcroze L'Homme le Compositeur le Créateur de la Rythmique*, La Baconnière, Neuchâtel, 1965, p.332.fn.
- G.Eckhod, "Etoile belbe", *Le Rythme* No.13, Institut Jaques-Dalcroze,1924.
- S.Eckstein, "The evolution of eurythmics education in Belgium", *Le Rythme*, l'Institut jaques-Dalcroze Genève, 1970.
- B.Ensor,"Discours de clôture",*Pour l' Nouvelle* No.11,1924.
- B.Ensor,"Coup-D'deil D'Ensemble Discours de Cloture, Le Dieu interieur", *Pour L'Ere Nouvelle,* No.8, Genève, 1923.
- Interviewer unknown, transcribed by David Turner,"Interview with Beatrice Ensor 1970", *WEF Archive of the University of London Institute of Education*,Zurück, 1970, 〈www.martinnaef.ch〉
- S.Eckstein "Échos de nos Collègues", *Le Rythme*, Bulletin de l'union internationale des professeurs(以下、U.I.P.D.と表記), Institut Jaques-Dalcroze, Genève, 1970.
- T.Flournoy, *Le Rythme,* No.12*.,* (1924), *loc.cit.,* p.41.
- M.Fasshauer, *Das Phänomen Hellerau*, Antiquariat der Papiersammler, 1997, Dresden, S.220.

- A.Ferrière, L'Ecole Active, Quatrième édition revue et réduite à un volume, Editions Forum, Genève, 1930.
- T.Flournoy, *Le Rythme,* No.12., (1924)
- Frank Martin, Tibor Dénes, *Alfred Berchtold et al., Émile Jaques-Dalcroze L'Homme, le compositeur le créateur de la Rythmique,* Éditions de la Baconnière, Neuchâtel, 1965.
- Rémy.Gerber, *Vie et Oeuvre d'Adolphe Ferriere, Chronologie de son existence première partie*:1879-1934,Genève,1989.
- *A Greek-English lexicon,* compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, 1940, Oxford, Clarendon Press, 1988.
- A.Hamaide,*La méthode Decroly*,Delachaux et Niestlé,Neuchatel,1966.
- Lee, James Willam, "Dalcroze by any name: Eurhythmics in farly modern theatre and dance", 2003.
- G.Louis(Bulletinier),"Lack.Résultats obtenus par les travaux manuels sans une ésole d'ensegnement spécial", *Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise*,1903.
- F.Marquebreucq, *Etude de Gymnastique educative pour enfants anormaux*, Gyan Books PVT.LTD., 2017.(First Published 1910)
- J.K.Miller, "Dalcroze, Montessori and preschool music teaching." American Music Teacher 40(6), 1991.
- M.Montessori, *Il metodo della pedagogia scientifica applicato all' educazione infantle nelle casa dei bambini*, Rome, Max Bretschneider, 1909.
- M.Montessori, *The Montessori Method* :Scientific Pedagogy as Applied to Child Education in "The Chidren's Houses" with Additions and revisions by the auther, Trans.by Anne.E.Gorge, New York, Frederick A.Stokes company, 1912.
- M.Montessori, *L'autoeducazione Nelle Scuole Elementari* ,Ermanno Loescher, Loescher, Rome, 1916.
- M.Montessori, *The Advanced Montessori Method: the Montessoir elementary material,* Trans.by Arthur Livingson, New York, Frederick A.Stokes Company, 1917.
- M.Montessori *The Advanced Montessori Method-II The Elementary Material* , Oxford, England, 1965.
- A.S.Neill, *Neill! Neill! Orange Peer!* , Hart Publishing Company Inc., New York, 1972.
- Programme, Institut J.J.Rousseau（1914-1943 年まで。1913. 1919. 1933. 1935. 1938-1940 のプログラムを除く）

- Anon,“Programme Général des cours”,*Bulletin Mensuelde L’Inastitut des Hutes Études et de L’École de Musicales et Dramatiques d’Ixelles,* No.1-3,Bruxelles,1908
- Anon,“VI Enseignement rithmique et plastique, Gymnastique rithmique.Mme Zimmer”,*Revue de l'Institut des Hautes Études et des l'École de Musique et de Déclamation d'Ixelles,* Union de la Presse péricdique belge, 1909.
- Anon*., Programme et Horaire du Semestre D'Hiver Xme*, Institut des Sciences de l'Education, (Genève,1921-1922) ., n.pag. *Programme Général*, Institut des Sciences de l'Education,s.d.
- Anon,“ Loin du PAYS,Un artiste Genevois en Californie :Théodore Appia”*Journal La Tribune de Geneve*,1926.
- Programme, Spécial L’Éducation des petits, Institut J.J.Rousseau, 1916.
- Programme Général, Institut des Sciences de I'Education,（年代は不明）
- Madureira, Rafael, “Jaques-Dalcroze: música e educação”, 2010.
- Ring Steinmann, *Lexikon der Rhythmik*. Gustav Bosse Verlag, Kassel.1996.
- I.Spector, *Rhythme and Life: The Work of Emil Jaques-Dalcroze,* Pendragon Press Stuyvesant, New York, 1990.
- S.Radice, *The new children; talks with Dr.Maria Montessori,* New York, Frederick A.Stokes Conpany, 1920.
- A.Taufstein,“La Rythmique a L’ École Nouvelle”,*Le Rythme* No.8*,* U.I.P.D., 1953.
- J.Verheul, (editor and archivist at Association Montessori Internationale, Netherland), (メール通信での聞き取りによる)
- E.Willy,“Conférence et exercises de gymnastique rythmique, par M.Jaques-Dalcroze” *Bulletin de la Sosiété Pédagogique Genevoise,* No.7, 1916.
- N.Zand(intormation obtained), “Belgium, A new project of Maurice Bejart’s: “Moudra”in an engine shed”, *Le Rythme,* L’Institut jaques-Dalcroze Genève, 1970

和文文献

J＝ダルクローズの著書

- 板野平訳、『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版、1990／1986 年
- 河口眞須美訳、『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003 年
- 板野平監修、山本昌男訳、『リズム・音楽・教育』、開成出版、2003 年
- 河口道朗訳、『音楽と人間』河口道朗訳、開成出版、2011 年。

・ 板野平・岡本仁共訳、『ダルクローズ・ソルフェージ』、第Ⅰ巻-Ⅲ巻、国立音楽大学出版部、1978 年
・ 板野平訳、『リズム運動』、全音楽譜出版社、1970 年

J＝ダルクローズ以外の文献

・ J・ブラック/S・ムーア共著、神原雅之編訳『リズム・インサイド』、西日本法規出版社、2002 年
・ ドクロリー、斎藤佐和訳『ドクロリー・メソード』、明治図書、1977 年
・ イタール、古武彌正訳『アヴェロンの野生児』、福村出版、1975 年
・ イタール、中野善達/松田清訳『新訳アヴェロンの野生児』、福村出版、1978 年
・ ハーラン・レイン『アヴェロンの野生児研究』中村善達訳編、福村出版、1980 年
・ 岩間浩『ユネスコ創設の源流を訪ねて—新教育連盟と神智学協会—』、学苑社、2008 年
・ 岡田正章・川野辺敏監修『世界の幼児教育４　北欧・スイス』、日本らいぶらり、1983 年
・ デクードル、若井林一訳、中野善造編『異常児の教育』、クレス出版、2008 年
・ F.マルタン他、板野平訳『作曲家・エミール・ジャック=ダルクローズ』、全音楽譜出版、1988 年
・ R.エイブラムソン、板野和彦訳『音楽教育メソードの比較』、全音楽譜出版、1994 年
・ E.クラパレード、原聡介訳『機能主義教育論』、明治図書出版、1987 年
・ アンネ・ランデ・ペータス『効率学のススメ』公演プログラム、新国立劇場、2013 年
・ W.ボイド・W.ローソン、国際新教育協会訳『世界教育史』、玉川大学出版部、1967 年
・ V.H.ミード、神原雅之・板野和彦・山下薫子訳『ダルクローズ・アプローチによる　子どものための音楽授業』、フクロウ出版、2008 年
・ 坂田薫子「リトミックにおける反応練習—その意義と課題—」、『ダルクローズ音楽教育研究』Vol.18、1993 年
・ 長尾十三二『新教育運動の歴史的考察』、明治図書、1988 年
・ 関口博子「リトミックの理念—リズムの根本理念—」『リトミック教育研究—理論と実践の調和を目指して—』、日本ダルクローズ音楽教育学会編、2015 年
・ E.セガン、中野善達訳、『知能障害児の教育』、福村出版、1980 年
・ E.セガン、末川博監修/薬師川虹一訳『障害児の治療と教育—精神薄弱とその生理学的治療—』、ミネルヴァ書房、1981 年
・ 中央教育審議会、教育課程企画特別部会「資料１」、2016 年

・ 供田武嘉津『世界音楽教育史』、音楽之友社、1982/1958 年
・ E.B.バーネット、フランス・ボーン、桑村清子訳『モンテッソーリ音楽　３才～８才の子供のためのリズム曲集』、エンデルレ書店、1984 年
・ ハイラント、平野智美、井出真理子共訳『マリア・モンテッソーリ』、東信堂、1999 年
・ 古沢常雄「第一部　フェリエールと新教育運動」『活動学校』明治図書出版、1989 年
・ 古沢常雄・米田俊彦編『教育史』、学文社、2013 年
・ 藤尾かの子「モンテッソーリ教育における音楽教育の内容・方法とその発展」『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』、KTC 中央出版、2016 年
・ フェリエール、古沢常雄・小林亜子訳『活動学校』、明治図書出版、1989 年
・ マッケローニ、夙川幼児教育研究会訳『モンテッソーリ博士との出会い』、エンデルレ書店、1979 年
・ モンテッソーリ、平野智美・渡辺起世子共訳『私のハンドブック』、エンデルレ書店、1989 年
・ モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの発見』、国土社、1989 年
・ モンテッソーリ、鼓常良訳『幼児の秘密』、国土社、1990 年
・ モンテッソーリ、鼓常良訳『子どもの心－吸収する心－』、国土社、1974 年
・ モンテッソーリ、阿部真紀子・白川蓉子訳『世界教育学選集 77　モンテッソーリ・メソッド』、明治図書出版、1977 年
・ 森下京子「モンテッソーリ教育の内容・方法の概要と今日の実践が引き継ぐもの」、『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』、KTC 中央出版、2016 年
・ リタ・クレーマー、平井久監訳『マリア・モンテッソーリ　子どもへの愛と生涯』、新潮社、1981 年
・ R.リング、B.シュタイマン編著、河口通朗、河口眞朱美訳『リトミック事典』、2006 年
・ 山下尚一「リズム概念の語源について―アルキロコスと人間の倫理」、『駿河台大学論叢』（49)、2014 年
・ 山名淳『夢幻のドイツ田園都市　教育共同体ヘレラウの挑戦』、ミネルヴァ書房、2006 年

おわりに

本研究を提出するにあたり、ご指導、ご助言、ご協力いただいた多くの方々に感謝の意を表します。

本研究のはじまりは明星大学通信制大学院の修士課程に遡ります。６年前、大学での幼保小の教員養成に携わる機会を得て、音楽教育や幼児教育研究の必要性を痛感し大学院への入学を決意いたしました。

はじめは専門であり身近に問題意識のあるピアノ教育についての研究を考えておりましたが、板野和彦先生より音楽教育法リトミックとモンテッソーリについての研究を課題とするのはどうかとご助言を賜りました。それが私の研究の出発点でした。振り返れば、小学校時代から大学まで、リトミックの授業を楽しんでいた自分を思い出します。20 年ほど前、子どもに対するピアノ指導法の課題への打開策としてリトミックの勉強をはじめて以来、リトミック指導者養成機関で講師を務める中で、モンテッソーリ教育との出逢いもありました。板野和彦先生のご助言と数々のご指摘のおかげで研究への興味も急速に高まりましたが、その深さや意味もわからないまま研究の扉を開けた私は、板野和彦先生の薫陶を受けながらも、そのご指導に充分応えられず申し訳なく思っております。このような私を５年間に亘り辛抱強く、趣旨を噛み砕いて一からご指導賜りました板野和彦先生には、衷心より御礼を申し上げ、深甚の謝意を表する次第です。

また、非常勤講師として勤務している立正大学の上司である板野晴子先生は、明星大学通信制大学院の大先輩であり、明星大学院入学を勧めて頂いた恩人でもあります。いつも拙劣な私を励まし、お手本を示してくださいましたことに改めて感謝を申し上げます。

後期課程に入学し、研究のテーマはリトミックと同時代を生きた教育者たちに焦点をあてたものでした。これは、前期課程で明星大学院の多くの先生方がお導きくださった教育学への関心と影響が大きく関わっております。通信大学院の諸先生方には、お会いする度に励ましやご指摘ご指導をいただきました。とくに、今年度ご退職された佐々井利夫先生には、ご助言ご指導を賜り深謝申し上げます。

また、論文の査読では樋口修資先生、星山麻木先生、福島大学の杉田政夫先生より多くのご助言ご指摘をいただきました。論文をまとめることができましたのも、諸先生方のお導きによるものと感謝申し上げます。

歴史的研究を進めていく上で、この数年は新しい知見を見出すために文献蒐集に力を注ぐ日々でもありました。ジャック＝ダルクローズ研究所ジュネーヴのソアツィッヒ図書館司書長には文献提供､研究者へのコントタクトの方法など多大なご尽力をいただきました。また、ジュネーヴ大学図書館、スイス在日大使館他、多くの方々にお世話になりました。世界の研究者からの情報提供は、日本の誰ともわからない一大学院生の研究への強力な後押しとなり、これらの方々の姿勢は、今後の研究者のあり方の礎となる私の財産となりました。今後も本大学院での良い経験を活かして研究に取り組んで参りたいと思います。

細 川　匡 美